

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十四年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇一六号



日川協加盟

No. 1016

同人特集・私の一句

一月号

第二回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

このたび川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題二句 共選）

課題吟

「ひらく」

雫石隆子（川柳宮城野社）

「旅」

川上大輪（川柳塔社）

雑詠

西出楓楽（川柳塔社）

投句要領

規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料

一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切

平成二十四年二月二十日（月）消印有効

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇一

川柳塔社 誌上大会係宛

TEL/FAX（〇六）六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題秀句に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

（日本橋川村ビル4F）

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

龍辰竜 そしてタツノオトシゴ

小島 蘭 幸

明けましておめでとうございます。本年が皆様にとって穏やかな年でありますように心からお祈り申し上げます。昨年の3月11日に発生した東日本大震災は大地震、大津波、原発事故と未曾有の大災害となりました。また各地で台風、大雨による被害も甚大でした。

海よ見たか御夫妻のあの黙礼を

真理子

昨年の五月、本社句会、課題「物腰」の月間賞作品です。被災地の厳しい冬を想像する時、私はいつもこの作品を思い出すのです。被災者の皆様の一日も早い復興を心から願っています。

本年は辰年、天上からカッと眼を見開いている飛竜は日本を、世界を、宇宙を守護してくれていると信じている私です。そこで辰年に頂いた賀状の中から、特に印象に残っている作品を三句、紹介したいと思います。

君は見たか龍のしっぽが揺れるのを 藻介

龍は想像上の動物で、私もそうですが、誰もが、あの迫力のある顔かたちを先ず想像すると思います。しかしこの作品は、しっぽに焦点を当てているのです。しっぽから徐徐に龍の顔が見えてくるのです。故中尾藻介さんの川柳は、誰にでも分る言葉で深いのです。

ユーモアがすこしわかる龍のひげ 智子

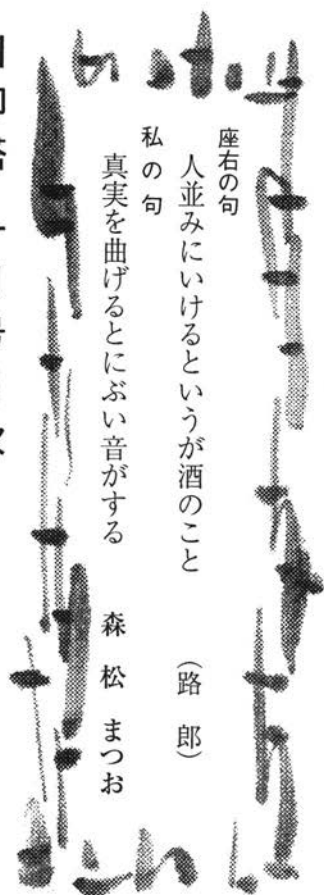
龍のひげに、私の父の顔がダブって、しんみりとさせられた作品です。父はとても無口でしたが無類の酒好きで、酔うと私の自慢？をしていたようです。

故小出智子さんの一番の思い出は、ある川柳大会の終了後に、私のところへスーと寄って来られて「私、蘭幸さんの披露好きです」と小さな声で言われた事です。あの時の眼鏡の奥のやさしい瞳が、今も私の胸に焼きついています。

はてなはてなとタツノオトシゴ考える 富湖

二〇〇〇年に頂いた賀状の作品ですが、はてなはてなは、今の日本を世界を予言しているかのようです。故川上富湖さんは大輪副主幹の奥様です。

二〇一二年辰年が平穏でありますように。



座右の句

人並みにいけるといふが酒のこと

(路郎)

私の句

真実を曲げるとにぶい音がする

森松 まつお

川柳塔 一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「白辰」

■巻頭言

龍辰竜

そしてタツノオトシゴ

小島 蘭 幸

(1)

句の表記を考える

西 出 楓 楽

(2)

川柳塔(同人吟)

小島 蘭 幸 選

(4)

川柳塔の川柳讃歌

(85)

木津 川 計

(47)

自選集

温故知新

(48)

水煙抄

川上大輪選

(51)

中島生々庵句抄

新 家 完 司 選

(73)

誹風柳多留——篇研究

77

愛染帖

(74)

檸檬抄

「ぜいたく」

(76)

小島蘭幸50句

福士慕情・池 森子共選

(80)

一路集「織

る」

政岡未延子選

(84)

句の表記を考える

西 出 楓 楽

毎月規則正しく発行されている『川柳塔』は、携わっている人たちに心の中で感謝しつつ通読をしている。「川柳塔」「水煙抄」は、同人・誌友の皆さんの近況を知ることができるので、気がかりがあると簡単なハガキを出したり、電話をしてお尋ねする時もある。

その他に一つ違った楽しみ方をしている。それは皆さんの句を、時々取り上げこつそり表記の仕方を変えてみるのである。つまり漢字・平仮名・アルファベットを操り、句がどう変わるか実験して遊んでいる。表記に工夫がある句を次に挙げるのでご参考。

長寿国政府高齢軽視策 虎 尾

この句は漢字表記が大成していると言えよう。高齢者に冷淡で、縋る者を拒絶するような政府の態度がもろに窺える。そして高齢者の一人として、許せない気持ちにもさせられる。

都市砂漠携帯電話無頓着 英比古

この句も街をゆく人々の情の無さが、漢

一路集（「いちばん」）…………… 柿花和夫選 ……（84）

初歩教室「脚」…………… 藤岡ヒデコ選 ……（85）

秀句鑑賞「同人吟」…………… 鈴木公弘 ……（86）

「水煙抄」…………… 三好專平 ……（88）

せんりゆう飛行船^⑬…………… 古久保和子 ……（90）

津軽発おもしろ景色^⑦…………… 新家完司 ……（91）

英語のSeason^①…………… 高瀬霜石 ……（92）

同人特集 私の一句…………… 吉村侑久代 ……（93）

■句集紹介「続・二人三脚」富田美義・保子著…………… 太田 昭 ……（103）

川柳塔碑合祀祭法要…………… 水野黒兎 ……（104）

十二月本社句会…………… ……（106）

各地柳壇（佳句地十選／古今堂蕉子）…………… ……（110）

一月各地句会案内…………… ……（124）

柳界展望…………… ……（126）

■編集後記（ひとこと／森松まつお）…………… 朱夏・勝弘 ……（164）

座右の句

達人は喋り名人物言わず

私の句

満点を捨てて持ち味光りだす

（薫風）

足立 茂

字仕立てによってきつぱりと表現されている。この傾向はスマホの普及により、最近いっそう顕著になっているように思われる。なさけうれしくつねうどんにむせかえり

三 窓

健吟家・健筆家としてつとに有名であった作者は、惜しくも先日他界された。こうしてすべてを平仮名にしたため、向き合っている相手の「情け」が強調されているのがわかる。

ややゆるくなりたるはのにぎりめし 寄生木

心憎いまでに平仮名が生きている。母の老いと母子の情愛が余すところなく伝わる。ハワイ行きGOのランプか月が出る 薫風

ゴーではなく「GO」としたために、外国へ「さあ出発」という高揚した気持ちが強調されている。

正体不明コウロウ省にモンカ省 涼平

「コウロウ」「モンカ」を片仮名にしたことにより、正体不明が生き、政治不信に対する嘆きが身近に迫る。

これらの句を参考に掲載句を取り上げて表記の工夫をし、ひとりよがりになることもありますが、試行錯誤を楽しんでいる。



小島蘭幸選

松江市 石橋 芳山

笑おうとカラスは電線に並ぶ

ほあほあに飼い馴らされて今の俺

スーパーマンもジャンスダルクも来てくれぬ

ハイハイと変にまゝなるくなるオヤジ

偉そうな貴方を虫籠に入れる

豆粒は数で勝負をかけて来る

河内長野市 村上 直樹

9・11・3・11世界変わる

土ふまず戦も知らず飢えもせず

散骨を嫌う息子と揉めている

飲み放題やめた同期の名幹事

親の歳越えてちよっぴり恩返し

臨月にエール日本の明日は晴れ

河内長野市 山岡 富美子

秋の思惟どうどう巡りして暮れる

このところ地球も情緒不安定

三世代の鍋はときどき煮こぼれる

誰からも声はかからぬ昼の月

パソコンに頼り詩囊が立ち枯れる

ここで愚痴こぼせば排気ガスになる

橿原市 安土 理恵

さりげなく聞かす生まれた日のことを

おとうとがふわり遊びに来た午睡

目指すのはガイドブックにないところ

スイッチを切り換えたのは誰ですか

やせたけど千切りキャベツ見るもイヤ

満面の笑顔試しているらしい

堺市 柿花 和夫

お誘いを待っておりまますカレンダー

転勤のたびに日本が好きになる

したたかに飲んで淋しくなる幹事

コンビニと百均が好きまだ独り

まわりみな笑ってるから笑つとく

仮設から帰宅苦屋で大の字に

吹田市 山 本 希久子

朝の光素直にこめん ありがとう

ギアチェンジしてさしかかる喜寿の坂

立ち止まってばかり振り向いてばかり

花に託した想いと今日を生きている

まじまじと見れば淋しい自画像だ

女に生まれてよかったという時代

和歌山市 木 本 朱 夏

仏さまのために今夜は栗ごはん

錠剤の一つと今日を組み立てる

海の正体視てからつづく不眠症

紙ヒコキ飛ばして秋を見送った

時代には添わぬ帽子をかぶっている

コートのか立てる枯葉の似合う街

鳥取市 倉 益 一 瑠

ひと言が嵐を生んだ会議室

人間のエゴで祈っているのです

祈っても腹いっぱいになりません

びっくり箱鳩がなかなか出て来ない

ハングリーの中で生まれた名案だ

平等に愛して子等の静と動

橿原市 居 谷 真理子

ほっという木綿の白になりたいねん

平和ですひと黙っておりました

引き返すことは知らない渡り鳥

私のそばでゆっくり熟れなさい

油断すると嫌いな人に似てしまう

ローカル線何かが思い出せそうで

芦屋市 竹 山 千賀子

もうしばらくこの世の橋を渡ります

超新人破ってくれた古い殻

どきどきを一杯詰めたバスポート

亡夫からの愛を未だに償えず

善行を積んで仏のそばに行く

幸せになれる鏡をふところに

大阪市 井 丸 昌 紀

気が付けば残り一人になっていた

辻褄の合わぬ言い訳じつと聞く

とまり木の端が私の指定席

僕ひとり抜けても誰も困らない

ものさしを変えてやすらぎ手に入れる

鈴付けぬ猫がのさばる都市砂漠

鳥取市 両 川 無 限

雨がしとしと少し黙っていて欲しい

かぶと虫四角い部屋に棲みなれる

幸せな絵を裏返す妻の乱

シーソーの反対側に乗る夕陽

検診のカルテ小さな乱を抱く

感情線の乱れりセットするお酒

弘前市 高瀬 霜 石

年賀状クセ字がほくを呼び止める
行間を読む能力を身に付ける
自然体なんて気軽に言うけれど
誰も見ていないところで手を洗う
気がつけばこんなに厚い懺悔録
引導を渡されほくも目が覚める

和歌山市 牛尾 緑 良

アナログで父と母にはご挨拶
生き延びた使命で今日の飯を食う
古希の膳六枚切りのパンで足る
君が代は名曲バレエと国技館
電池まだ動いています心電図
おみくじの代りに開くりトマス紙

堺市 栞 原 道 夫

吐く息と吸う息午後の金魚鉢
黒板を磨こう顔が映るまで
おいおいと呼ぶ穴があり急がねば
恋人の耳から垂れている雫
投げキッスしてかたつむり別れたり
ウルトラマン一家が浴びている西陽

三田市 堀 正 和

円高に合せて天も高くなる
鰻には山椒僕にはお小遣い
先生と呼ばれてからの標準語

目薬を一滴裏を読むために
遮断機が昭和の音で鳴っている
秋祭り済むと無人に戻る駅

岸和田市 岩 佐 ダン吉

損得を捨てたら見えてきませんか
一歩引く今にわかると言い聞かす
好きなこと言うているんじゃない
九条に迫る矢ならば受けてやる
顔会えば私心捨てろと言うてくれ
減らず口ときつと言われているだろう

唐津市 井 上 勝 視

老妻を使いすぎて三ケ日
自画像の大修正をしたくなる
敗戦を生きた家内の腕まくり
御歳暮を止めて今年は凝りが取れ
恙なく暮れて感謝の般若経
水子には難しかろう経の語句

唐津市 坂 本 蜂 朗

十字架を掲げ伴天連ここにあり
生き抜けと仰せにならぬマリア様
殉教の悪はマリアか御領主か
斬罪者の中に同姓いる鼓動
恐いものなど何もないだオラシヨ
殉教の鳥ひっそりと死人華

豊中市 藤井則彦

いらちには日にち薬もそつぽ向く
くしゃみする勢いだけはまだ負けぬ
棺桶に入ればほつとする予感
飲み放題ほど割高なものはない
落ち込んでる人にかんばれとは言わぬ
いつの間に人の名消えた電話帳

出雲市 竹治 ちかし

聞いてなどないのに酔つてないと言う
渋柿も上手に甘くして食べる
退屈が過ぎると神も踏み外す
カルピスの味を忘れて老いている
生かされてまた聞いている般若経
うっかりと大きな夢を見ってしまう

神戸市 伊勢田 毅

冬眠をしたかどじょうが動かない
廃屋の庭に熟柿がぶら下がる
酔ったふりアンテナ確かと立てておく
帶少しゆるめ本音を言う女

奥の奥読んで通れぬ道がある
後期高齢今日も鞭打つ万歩計

藤井寺市 高田 美代子

おめでとうを亡夫に言うてお元日
信号は青いまのうちに今のうち
女三人寄ってはかすかなる炎

わたくしも団栗ですか背比べ
姉妹が寄ってアルバムに華が咲く
着地点を間違わぬよう翔んでます

大阪市 升成 好

お薬が同じで長い立ち話
みな他人知らぬ街ゆくとときめきよ
気くばりが過ぎてお客を疲れさせ
善根を積まれた温いまなざしだ
勢いに乗れぬ私を妻が押す
ドレスアップに若さがほしい試着室

堺市 志田 千代

五十余年手書き続けた年賀状
追いこんでいるのは私自身です
目力の残る人形捨てられず
家族葬仕しすぎると言うのです
食べすぎぬようにブドウに種がある
自転車でのんびり走る道がない

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

歳月よダルマは転ぶこと覚え
ひと様の痛みに踏み込んでしまい
喪中ハガキの中で聴えた風の音
群れて咲く野菊語れば長くなる
月光のソナタと去って行つたひと
謎解きは上手に妻がしてくれる

倉吉市 牧野芳光

中国へ行く百均の灰皿と
チベットの太陽ギリリ人を刺す
天国に近い所にボタラ宮
ダライ・ラマの形で衣鎮座する
酸欠の町で仏とすれ違ふ
水面からこの世を覗くように蓮

三田市 久保田千代

口にする物みな旨し秋さなか
旬のものを食べて寿命をまた伸ばす
腰痛に家事も出来ずに句も出来ず
これからのこと考えて主人見る
手術ないと決めた私に意地がある
オペラ観る今別人になれる瞬間

京都市 坪井孝一

大きい空腹立てるのが恥かしい
ロボットが勤務評定して困る
孤立無援律義にまわる独楽の芯
懐に本を二冊の無人駅
古い写真焼いた煙は涙色
前衛家可愛い花をねじ曲げる

和歌山市 玉置当代

豊稜へTPPを撥ね飛ばす
言いたいことあるがこの場は折れておく
日替わりメニユー今日はみそ味しょうゆ味

主義主張なくてぞろぞろ雑魚の群れ
孫がもうちゃんと味方を知っている
春夏秋冬くすり片手に生きている

高槻市 島田千鶴子

前向きな人でよかつた癌告知
ありふれた暮らしに戻る退院日
心細さあるから少し笑つとく
診察券増えて埋つたスケジュール
地図にない道はスキップして通る
絵手紙にやさしさを見る季節知る

東大阪市 米田水昇

庭に来る小鳥に目覚む今日の幸
足萎えに置いてくれている庭の椅子
一点を見れば真実見えてくる
清流濁流水の勢い恐ろしい
孫作るたこやきうまいママの留守
良妻でなかったけれど今平和

奈良市 米田恭昌

亡母と来た老舗も消えて若い街
洪ちんが一枚はたく義援金
やさしい風に応えて回る風車
インテリも立ち食いうどん食うている
我が家にも始末におえぬ娘がひとり
大阪生れの僕の気がかり市長選

堺市 齋藤 さくら

夫婦喧嘩帰るふるさと無くなった
孫の顔見たら長生きしたくなる
ぼっくりと死ねますように墓参り
温泉とエステの友は決めてある
同じ年もう友達は未亡人
親の世話出来ただけでも有り難い

長岡京市 山田 葉子

MRIにじっくり過去を暴かれる
新薬と腕組み歩く崖っぷち
冬はそこ増やしておこう皮下脂肪
奥の手はエンマ様には通じない
キミマロのやさしさわからないなんて
荒物屋会話楽しみながら買う

大阪市 榎本 舞夢

喜寿過ぎて趣味の数をば整理する
なつかしい友の献立舌つづみ
老人会掃除コーラスボランテア
一年の思い出どり年賀書く
子や孫に食べさせたくて節料理
若松を活けて新年迎え待つ

鳥取市 近藤 佳子

水不足縁ない国の有難味
子に炊事まかせ極楽つづいてる
もう秋よ秋よと風鈴がさわぐ

洗濯と掃除わたしのテリトリ
大國主の袋の中にいるわたし
身のまわりだけが卒寿の守備範囲

鳥取市 有沢 せつ子

亡き母のふと声がした日暮れ道
まかされた仕事あるから風邪引けぬ
幸せでいようといつもよく動く
歓声も届くスポーツ面の記事
転けるなよ自分に気合入れている
電子辞書杖にし夢の種を蒔く

大阪市 神夏磯 典子

あの人が休んで私トップなり
馴染むまでおんなじ服を着ていよう
もう少し粘りなさいと残り福
老いてなお無策無駄な日作らない
満腹にすれば忘れてよく眠れ
正月だ蟹一匹と話す

和歌山市 柏原 夕胡

ウインクをしても靡かぬところが好き
何くそと叱咤激励して生きる
手切金みたいにもらつて粗品
女の翳りだろうか勘が鈍くなる
気がつけば味方はみんな消えていた
のらりくらり槍を躲して生き延びる

大阪市 古今堂 蕉子

黙殺したつもりの老いが話しかけ

含蓄の話みんなにコピーする

月例の句会黙祷続くなり

指切りの指玄関に忘れてる

不本意な話耳なり加速する

大阪市 川端 一步

四捨五入するとかすぐつたい歳だ

火祭りの炎は真つ赤龍に似て

憧れの人に逢いたい図書に向く

復旧復興ただそれだけを初日の出

父と子が走り初春呼んでいる

大阪市 鶴田 遠野

政治不信また年金を論議する

軸足を家庭に戻す定年後

欲望の海が泳がす二枚舌

気くばりが過ぎる男で頼りない

生活上寝るときだけに着るバジヤマ

大阪市 佐藤 忠昭

錯覚に自惚れ加え嫌われる

気配りが過ぎて嫌味なお節介

切れ悪い勢いがないぞ故障かな

百葉の長に毎晩世話になり

永年のグチをしみじみ聞く夜長

大阪市 岩崎 公誠

頓智きく男軽いとあしらわれ

生き方はちゃんぽらんぼらんで隙だらけ

温室で育てたトマト愚痴言わぬ

劣化する脳でものごとすぐ忘れ

ここから嬉しい手紙母の文字

大阪市 近藤 正

六度目の年男です去年今年

古希過ぎてとんとゆとりがありません

三・一一暮らしの節目くつきりと

メルトダウン原発神話ぶっ壊す

復興の仮設住宅森拓く

大阪市 笠嶋 恵美

義援金出して気持ち救われる

秋の虫生きていたんだ鳴いている

語り芸まぶしく聞いて泣かされる

学年会晴れて幹事の顔が立つ

五階から郵便バイク待つタベ

大阪市 板東 倫子

大阪マラソン寛平ちゃんも走ってる

真相は見ぬふり知らぬふりが良い

あらちゃんと呼ばれあざらし昼寝する

みちのくのみほとけ慈悲の目に涙

子を連れて熊猿猪が町へ出る

大阪市 谷口 義

お騒がせしましたと来るお正月
マンネリのお正月にも初日の出
はつたりを繋ぎに時々を使う
畳の部屋はバリアフリーだったのだ
絶対に上達しないものもある

大阪市 大川 桃花

お日様を見せてあげたい深海魚
右手の怪我ひだり鍛えるチャンスかも
ドラマでも灰皿消えた応接間
やがて大きくなって顔出す隠し事
予防注射うつと体調悪くなる

大阪市 吉村 一風

深呼吸ゆっくりところ和ませる
鉛筆を削ると少し落ちつきぬ
見て見ると秋の朝顔呼んでいる
うまいこと妻に言葉で叩かれる
騙されても騙すな言うて生きてます

大阪市 澤田 定子

童謡を流して灯油売りはじめ
姿勢よい正坐出来ない膝小僧
食卓に日本松茸出てこない
年一度生死確認するハガキ
備前焼土の良し悪し舌の上

大阪市 田浦 實

おじぎする稲穂の波は美しい
休耕田醜くしてる里の顔
三陸のうまいサンマに食らいつく
線香花火咲き切るときは大きいな
愚痴れます生駒の山に空の雲

大阪市 平嶋 美智子

プラスマイナス ゼロの決済終えて初春
余白ない初春の暦のときい顔
夏ばてが癒えないままに冬に入る
認知症こわくて脳を抜き使う
おこりっぱくなつた本性出て来たか

大阪市 小谷 集一

思い出をぎつしり詰めてある右脳
ピンチには笑顔と決めている頑固
妥協点見つけてからはよく喋る
マンネリの一人芝居に喝入れる
欠点の多い人だが暖い

大阪市 松尾 柳右子

立冬の雀が遊ぶ道を行く
来客の帰りし後の侘びしさよ
闘病の夫の意欲に安心し
新聞をくまなく読んで床に就く
献立の具材揃えて時間待ち

大阪市 原田 すみ子

世の中は狭いと思う人の縁
空腹がマンネリ料理許してる
くるくると帯解きながら生き返る
仏壇へ愚痴も感謝も申し上げ
誘われた趣味で新たな自分見え

大阪市 熊代 菜月

泣き虫もメタボも母の遺伝です
病む友をはげます嘘はたんとつき
くねくねと続く八十路の峠道
強がりを言って自分に喝を入れ
子に甘えちよつと弱音をはきました

大阪市 津村 志華子

朝ぼらけ今煌煌と竜昇る
明日がある傘寿の明日は儲けもの
盗る物も無いけど鍵は掛けて出る
お節介少し過ぎたと悔いている
この辺で手を打つ策を考える

大阪市 奥村 五月

窓際は人の心が分る椅子
ドライブも枯葉マークでのんびりと
スピード化だけ故郷遠くなり
素顔でも車中化粧で見ちがえる
松茸とカニの味などもう忘れ

大阪市 伏見 雅明

勢い込んで二階に上がり何だっけ
人並みの容姿だけれど良くもてる
規格外地野菜売れる道の駅
人間が横どりをしたけもの道
国境の線引きひとつにある火種

大阪市 津守 なぎさ

病あけはるかな虹を掌の中に
叱られず育ち些細にすぐ切れる
検査値は平均と言う弱い足
下戸独居お屠蘇届いて面喰う
しつけ糸抜けず出番を待つ晴れ着

大阪市 池上 清治

値上がりでサラダのレタス見え隠れ
旅の夢捨てずジバンゲ払い込み
極言をすれば原発など要らぬ
足腰が元氣まいにち極楽だ
台風も地震もここはそれてくれ

大阪市 江島谷 勝弘

シンブルな男で御座い私は
たたんでもたたんでも出る悔しさが
よめはんに薄情もんと言われてる
淋しいな黄門さんも消えていく
代っても政治貧困抜け出せぬ

大阪市 小泉 ひさ乃

再生の地に希望もち咲くのち
笑い合い寄せ付けぬ鬱認知症
峠越えやさしい朝の風に会い
何方にも取れる言葉の後遺症
底辺でどう生きようと娘の器

大阪市 寺井 弘子

年金にハードル下げる妻の知恵
王冠のビール我が家に縁遠い
旅先で妻と同室どないしよう
通夜の客晩酌代り飲んでいる
脱がされたマネキン裸恥じらつて

大阪市 吉内 タカ子

七十億中の一人だ凜と立つ
前向きの明日の誘いか茜雲
手を摩るだけの夫婦も笑い合う
年支度片付け出来ぬこの温さ
マラソンでタフな大阪生かしてや

大阪市 坂 裕之

まあいいか右に同じの手を上げる
応援はしてほしいけど条件が
噂聞く度に大きな花になる
手の届く辺りで待ってくれた父
また逢える約束をして受話器置く

大阪市 岩崎 玲子

ジャコ好きのわたし健脚自信あり
思い出の入場券は葉です
平均値なら上等と我が子見る
氣くばりのできるロボット侍っている
神木がでんと構えて私見る

大阪市 榎本 日の出

ガラクタと目が合ってから捨てられぬ
三ヶ日一步も出ずに修業する
あの人のことだからくりきつとある
負けん氣が自分のミスをすぐ許す
パリーまで旅行して来た正露丸

池田市 栗田 久子

あらたまる氣持ちで朝の水を汲む
身を清め何はさておき氏神へ
ポストからかすか賀状の届く音
水仙の香り馥郁静かな夜
木枯らしは夜の眠りを浅くする

和泉市 横山 捷也

プライドがあるから渡れぬ橋である
付き合おう本音で語る酒ならば
酔ったふりとほけ上手で輪が和む
鈴なりの渋柿熟れて老い一人
ピリオドは打てぬ娘の長電話

泉佐野市 山本蛙城

いつからか漢字分解趣味となり

お節まで買う人増えた世を思う

大阪に馴れて鉛玉いつも持つ

カラオケをノド活ですと言いつら

元歩兵足の弱りにもう勝てず

茨木市 藤井正雄

知恵袋逆さに振っている窮地

生真面目な貴方に通じないコント

その結果だけを面白がる世間

あとあとの事あり無理を聞いて置く

老人会歌声揃うのは軍歌

茨木市 島田誠一

どぶネズミ色が何だか安心だ

七十億熱気で地球茹だりそう

商品券何故か贅沢品を買う

避難所で不自由無いかと問うマイク

過去形の会話に追われ去る職場

大阪狭山市 矢野梓

国政も豊かになれと投票日

反省を忘れた記事が今日も載り

責任を取らぬトップの綺麗事

物忘れ慰め合ってお茶にする

今日もまたあつと言う間の仕舞風呂

交野市 森本弘風

暑い秋拗ねているのか色付かぬ

お供にはちびた鉛筆万歩計

静かだがやっぱり不便妻の留守

ヒヨウ柄のおばちゃんにさえるセンス

円高に四季報の熱冷えたまま

河内長野市 井上喜醉

生きるのに三日も眠る手術台

飲める日が来るのか全快待ち遠しい

平和でも歴史に穴のある日本

石段で楽しいよいしよ寺めぐり

退院で今年も聞けるウィーンフィル

河内長野市 山室光弘

切れ味のにぶった脳がする指図

争点がわからぬままのでかい声

腹八分秋の味覚がゆるさない

もうそろそろないものねだりやめますか

叱った子に叱られ想う世の無常

河内長野市 坂上淳司

幕の内が魅力で付いて行く歌舞伎

名優も端は通行人でした

勘太郎におひねり飛んだ村芝居

ほの字だな耳朶赤く染めている

免許証返すと僕が居なくなり

河内長野市 植村喜代

太陽がまだ暑い秋の夕暮れ
秋日和家にいるのも落ちつかず
お腹すくとあれもこれもと決まらない
バスが着くうれしい話聞きました
らしくとは難しいけど私好き

河内長野市 水谷正子

災害のない一年を祈ります
子ら巣立ち孤独樂しむ一人酒
孤独でも心の通う犬が居る
赤ちゃんの笑顔に勝る癒しなし
笑ってる場合か郵貯みつからぬ

河内長野市 黒岩靖博

あなただけ愛一筋に身を捧げ
思い出の夫婦茶碗を継ぎ直す
正義感強すぎ出世ほど遠い
僕の出世桜吹雪でジ・エンド
もじもじと初な乙女も今女将

岸和田市 原 さよ子

天国へ行く気の小銭ためている
ひとくさり聞いて盆栽もろてくる
手の内をかくしきれないお人好し
預かった鍵に自由を奪われる
町工場まだ一線に立つ白髪

岸和田市 森元ふみよ

八十路越え論語ひもとき脳めざめ
嫁迎えパソコン三台誰のため
困ったなラップの端がみあたらん
年毎に化粧の濃ゆい嫁となり
松茸を横目でモヤシ買うベテラン

岸和田市 堤 梢代

原発で逃げ場失う狭い国
果てしない愚痴を聞くのも一仕事
高齢の先輩にあるいい笑顔
これだけは守っています飯一膳
眉間には縦皺ないのが自慢です

岸和田市 雪本珠子

お喋りも健康の内妻元氣
簡素でもこころ豊かに暮らしてる
定年後妻のカラーに染められる
幸せの種を集めて育ててる
年重ね甘え上手に生きてゆく

四條畷市 吉岡 修

拾ってたら僕の噂も落ちていた
弱者だとみな思ってるそのひとり
新聞に出るほど悪い人じゃない
イエスともノーとも見えて迷わせる
計算は早い金が残らない

吹田市 太田 昭

握手したあとの始末は考えぬ
相槌を打った男の無責任
潰された空き缶おれの亡骸か
諍いにけじめをつけた酒二合
スキップの余裕を残し老いてゆく

吹田市 須磨 活恵

もう国旗出す家もなくお正月
神棚へ両手を合せ貰う福
ちさい福こぼさぬように掌を合す
初詣で心あらたに祈る幸
寒い朝咲く山茶花の律義さよ

吹田市 大谷 篤子

電話口首から上は元気です
退院の日こぼれる笑みの和やかさ
もう少し生きる自信に冬が来る
根拠ない自信あふれた若い日々
たくさんの歌をうたつて深い秋

吹田市 野下 之男

独裁者最後はこうと教えてる
山ガールこれがご縁で四十年
お昼寝の妻の寝顔は愛らしい
マドンナの白髪も良いねOB会
ヒグマでも住み良い町を知っている

吹田市 瀬戸 まさよ

お互いに思い出せずに笑い合う
恩返しできずにごめん友の逝く
長生きを喜びながら淋しくて
節電を言われなくともする家計
大声を非難する目の喫茶店

吹田市 木下 敏子

残り火をほどほど燃やし文化の日
天高し歩幅広げた万歩計
ひとり居て合せる両手あたたかし
寒い夜ひとり湯たんば抱いて寝る
勿体ないけれど斜めに見て捨てる

高石市 浅野 房子

昭和恋歌うたい青春巻き戻す
風の盆今も恋しい遠花火
老いてなお外反拇趾が直らない
一手間がうるさくなってきた料理
野分吹く会いたい人は皆故人

高槻市 片山 かずお

言葉にできぬことを余白に語らせる
残りものの野菜主役にしたシチュー
秋夜長銚子が昔語りだす
助けるかどうかは顔を見て決める
労ってくれてる声が冷めている

高槻市 杉本義昭

相続をじつと聞いてる床柱

大声を出せば何だか正しそう

海は母心を洗う波の音

地場野菜鮮度が届く朝の市

バスガイド雨も味方に名調子

高槻市 乙倉武史

節電に湯タンボ懐炉備え良し

一人ものストーリーない幕が開く

毎日を一喜一憂して暮らす

臍で茶を沸かす笑いはないかない

積んどくをボチボチ崩す退院後

高槻市 初代正彦

よく嚙んでスローライフに触れてみる

セールの慣れた態度に腰が引け

これからは偶には主夫を買ってでる

他人には無理をするなど言いながら

満開のコスモス園で季を貰う

高槻市 指宿千枝子

珍客の蟠螂と飲む赤ワイン

ソムリエの鼻に産地は騙せない

葉嫌い手洗いうがい風邪払い

安眠の葉は軽いストレッチ

孫と意気投合してる目の高さ

高槻市 左右田泰雄

小春日の路地をのっそり横切る猫

骨つぽいところがやたらと人気呼ぶ

氣にすまい噂雀の地獄耳

流石だな先の先まで読んでいる

急ぎ立てるようにケトルの湯がたぎる

高槻市 富田美義

まだ古いぬ継ぎ足す知恵のあれやこれ

散るもみじ風を味方に舞上る

成長の笑顔嬉しい服の丈

愚痴ふまん裏の本音の甘いこと

目が合ったその瞬間にある命

高槻市 富田保子

久し振り身内揃って撮る一枚

笑い声白寿の母を囲む部屋

泥かぶることを覚悟し位置に就く

わが道を歩く笑顔に会えるまで

傘立ての底に不満をひと雫

高槻市 井上照子

被災地を思う感謝のお正月

店員さんゆうべの食事は焼肉ね

ポイントが溜まり夕食膳豪華

老人会音痴の私歌う番

テレビ観て焦げたおかずを我が皿に

高槻市 佐 甲 昭 二

相槌を打って渦から抜け出せず

ざわざわと私を囲む電子音

約束を果たしさっさと幕を引く

グルメ旅の帰りに覗くラーメン店

やすらぎに浸る酒場の指定席

高槻市 峯 村 勲 弘

日本に生きて地震に立ち向う

原発に文殊の知恵も生かされず

節電に炬燵で育つ家族の和

それぞれの顔で迎える喜寿傘寿

だんまりでピンチをしのぐ若い二人

高槻市 安 田 忠 子

農作業絵になる秋を車窓から

虫くいの野菜が並ぶ道の駅

朝ウォーク始めて腰の痛み消え

お隣の垣根をやつと刈ってくれ

ゴミとなり落ちる衛星見てみたい

豊中市 水 野 黒 兎

鉛ちゃんをどうぞ関西ひとり旅

最後には妻が結論出す平和

自転車止めて木の実降る音を聞く

ショッピングモール古稀に買う物が無い

その昔缶蹴りをしたあかね雲

豊中市 江 見 見 清

亡き母の自分史痛みには触れず

真つ先に済ます妻からの用事

痛いところ知ってる人が横に居る

星からも見られています今日のウツ

待たされる医者ハシゴをして疲れ

豊中市 松 村 里 江

のせ上手話上手が煙に巻く

欲かけて一つ積んでは総くずれ

菜園の野菜で母を元氣付け

節約は百円シヨップまずのぞく

忘れずに今も盆暮届く品

豊中市 松 尾 美智代

久し振り友のやる気に見張る

コトコトと豆を煮ながら明日のこと

花束になれないけれど曼珠沙華

毎日歩く痛かった膝やわらいで

小さな秋たしかめながら散歩道

富田林市 中 井 ア キ

連れ舞の夢を見ている寒桜

瘡蓋を剥して明日を組み立てる

病院の廊下とてつもなく長い

ふところにひとつ君だけのオアシス

叫んだら優しく抱いてくれますか

富田林市 中 崎 深 雪

丹精の菊ニコニコと秋深む

「イマジン」が流れやすらぐテイルーム

夫だつて昔は白馬の王子様

好きな本開くときめき恋に似て

女々しいに女という字失礼ね

富田林市 片 岡 智恵子

老夫婦もう乗りかえる駅がない

空っぽになった巣箱にいるふたり

生きてゆく重荷は続く蟻の道

レタスひとつ買つて政治に持つ不信

犬の散歩犬に人間つながれる

寝屋川市 籠 島 恵 子

自画像に言つて聞かせたのは昔

難問を避けて通つたツケがくる

近ごろは夫の愚痴に冷めている

口唇を読まれ頭を下げられる

決済のあとも時雨がふつてくる

寝屋川市 森

茜

留守電を入れて音沙汰ないその後

ここちよい沈黙あおい青い空

町内は物音もせず菊日和

ちよつと置いた帽子にこんもり猫眠る

日常にある喜びをこぼさない

寝屋川市 太 田 とし子

目の位置がだんだん子供になつてくる

九十歳離れた曾孫の手と遊ぶ

わたくしの気儘を許す秋の天

天と地にメールを送る父母の顔

復興のサンマで今日もありがとう

寝屋川市 森 田 麗

紅葉と張り合い無駄なセンス着る

師走まで妻のカレンダー余白なし

犬二匹大岡裁きする夫

親の歳越え未だ背を押されてる

積んできた歳月に紗がかかり出す

寝屋川市 平 松 かすみ

三十年よくも続いた五七五(ネヤガワ啓動)

影武者のあの手この手に支えられ

記念誌に残る私のボランティア

おとうちゃん煙たがられた頃が華

居留守するけれど年金ただける

寝屋川市 富 山 ルイ子

築き上げた信頼瞬時に崩れ去る

情けない平靜心が消え失せる

大会のお誘いがつぎつぎと来る

娘婿の優しさ同居二十年

来年の鬼が笑っている役目

羽曳野市 徳山 みつこ

枇杷の花やはり約束違えない
そろそろ動かには正月さまが来る
金婚過ぎ一年凸凹のまま
あの世へは安くいけるといふチラシ
ありあわせ半分こして昼ご飯

羽曳野市 三好 専平

病院の待合室が読書部屋
声なき声封じてならぬ民主主義
放射能汚染気にせぬ秋雀
秋の野に帰化植物の花ざかり
いつまでも虹を描いて生きており

羽曳野市 安芸田 泰子

日本の味七輪で焼く秋刀魚
転た寝の足の中から秋がくる
三食を食べる以外にない予定
泣いていることは知らない影法師
猫にまでお世辞を言うて下心

羽曳野市 福田 悦子

十二支に神の定めがつきまとう
おめでとう今年も言える喜びに
一日の無事を朝日に手を合わす
元旦の祈り平和の鐘が鳴る
生きている証空気の旨さ知る

羽曳野市 吉村 久仁雄
ケータイで話すと息子よくしゃべる
安らぎの椅子で口開け眠る母

人生の誤算続きが面白い
情報化もうスマホには追いつけず
世界平和という錯覚は手放さぬ

羽曳野市 永田 章司

海辺での終の住処の夢が消え
冬の日の日向窓辺は老母の席
自分史の過去からはずす傷ひとつ
なでしこも和服を着ると女です
老犬と長生き競う散歩道

東大阪市 佐々木 満作

写経するころでおれば救われる
おみくじの吉凶なんぞ当てにせぬ
童謡を唄えばころろ丸くなる
断捨離へ未練抱いては片付かぬ
辰年の景気浮上を期待する

東大阪市 笠井 欣子

杖無しで洗面トイレ有難い
夫逝つて子等は早速模様替へ
川柳という武器もって元氣出そ
ダイヤ婚でもらった湯呑み淋しげに
秋雨がなにか淋しい夕餉どき

枚方市 寺川 弘一

公害撤いて税金吸っている煙草

保証はないがボツクリ寺がよく流行る

無神論者も最後は世話になるお寺

隙間風ごく生真面目で几帳面

風鈴が優しい風を待って居る

枚方市 伊達 郁夫

スーツ脱ぎ遊び心と言うセンス

丹精の菊をバツサリ仏様

うれしさを伝える十指良く弾む

色欲が減って私が白くなる

極まれば涙は胸の中に落つ

枚方市 海老池 洋

結び目を信じる僕も奴隷

やりがいを見守る妻がいてくれる

煌煌と家中点けてひとり飯

ビル谷間に頑張る由緒あるお寺

軍事力誇示のパレード寒く見る

枚方市 小林 わこ

拍子木を鳴らして朝の幕あける

第二幕アンパン二つ買って待つ

電話鳴る芝居の夢はここまでと

一芝居うつならうつと言って欲し

ファイナルアンサーゆっくり旅をしませんか

枚方市 二宮 山久

ふる雨に幸せ綴る旅の宿

発表会終えて疲れの露天風呂

雨降ると東北地方思いだす

お正月今年は俺の年にする

五七五綴り始めた朝の四時

枚方市 二宮 紫鳳

秋風に足取り弾む女旅

仏像に癒され巡る古都の秋

ティータイム心と和らぐ雨の午後

鉢植えのみかんだわに空の青

心まで染めて和みの紅葉狩

枚方市 丹後屋 肇

立冬日ブーツを履いてやってくる

初対面同士励ます登山道

断捨離ともったいないがせめぎ合い

卒業後バートをハシゴして暮らす

ヘルパーと腕を組み合う交差点

枚方市 安達 忠央

燃える薔薇棘の痛みを忘れさせ

生きている証しのつらさ歯が痛む

星流れ妻よみがえる前兆か

妻介護三年越しを生きてくれ

救急車パレードの列真つ二つ

藤井寺市 太田 扶美代

いつか私を捉まえにくる夕陽
カレンダー十一月のけだるさよ
菊人形大河ドラマの幕が開く
恋しいなんて一度もしていない
くちびるの寒さで秋を知りました

藤井寺市 津田 シルク

よいいな事言わさぬようにガム噛ます
酒呑んで心の浄化すると言う
楽しみはもすこし後と計量器
耳なれて出来ちゃった婚おめでとう
ひと日でいい昼に咲きたい月見草

藤井寺市 若松 雅枝

鳩に餌遣るなと札を立ててある
三日分薬を入れた旅鞆
絶景の紅葉見下ろすロープウェイ
古里の駅にも出来たエレベーター
甘さ控え目わかつているが守れない

藤井寺市 俣野 登志子

手間な小芋もつとゆつくり食べなさい
検診のあとお腹いっぱい回る寿司
お上品なあの方苦手ですわたし
めんどいな事引き受けてからの鬱
ダイエット消費税アップがチャンス

藤井寺市 鈴木 いさお

ひと言の挨拶もなく秋がゆく
何事にも頑張りすぎる悪い癖
逢いたくて逢いたくて乗る終電車
恋人は妻と娘と孫娘
七十路の入り口辺り迷い人

藤井寺市 増井 ヨシ枝

南天がたわわに熟れてお正月
ヒヨ鳴いてふる里恋し母恋いし
お正月追い羽根の音昭和の音
声美人逢いたい会わぬそれも花
先にいく夫羨み経を読む

藤井寺市 伊藤 アヤ子

洪がぬけやさしい味のつるし柿
TTP参加不参加誰が得
伸び盛りの孫今朝も良く食べる
目が合った知らない人にこんにちは
昭和みなと船出してからもう八十路

藤井寺市 吉田 喜代子

友からの届いた詩集癒される
わたくしの自由にならぬ電子辞書
敬老会常連さんが見当たらぬ
九十歳ビンゴ景品ツケマツゲ
来年も十年日記買うつもり

箕面市 広島 巴子

感動の連獅子首が気にかかる
山葡萄口にしゅわっと疲れ癒え
曇天に友と駄洒落で気晴らしを
露天風呂鳥が無視して木の美食べ
元通りパズルをはめる日本地図

箕面市 出口 セツ子

馬鹿で良いポリシー捨てず生きている
子が側に居るゆつたりと自然体
心の穴気づかぬようにする多忙
逝く日まで明日へチャレンジし続ける
生まれて来てくれて感謝の誕生日

守口市 井上 桂 作

歳重ね偽わりのない人情を
毎日を祈る気持の老いの坂
人間の優しさ教え震災は
軸となる市民マラソン大阪で
走るたび脳と体に喜びを

八尾市 宮崎 シマ子

蓮根も牛蒡も小さく切るおせち
正月に一応晴着出したけど
娘と競い美容院に行く紅もさす
子も孫も自分の好きに初詣で
待合室辛抱強い患者たち

八尾市 高杉 千歩

新年の抱負断捨離決意する
新しい年のポイント溜めておく
動じなくなつて仏に近くなる
回る寿司年寄り相手にしていい
平均寿命そわそわしてる初春の酒

八尾市 村上 ミツ子

木枯しが鍋にしろよと喚ける
些細なことにくよくよしてるいつも
出る幕のない裏方がさわがしい
神のことはを自分勝手に聞いている
幸せを集める熊手買いにいく

八尾市 寺川 はじむ

旅すると高い建物先ず探す
呉れそうな人選つて来る奈良の鹿
赤札の横に格好良い上着
聞き上手心開いて溶けさせる
アングルを微調しながら未来撮る

堺市 源田 八千代

国民が変化求めた甲斐もなく
禁煙の世相をよそに吸う八十路
閑そうな床屋に出前頼んでる
喜寿米寿元気なままで迎えたし
今年こそ平穏祈る初詣で

堺市村上玄也

作者の名知らぬと値打ち分からぬ絵

元部下も割り勘にする定年後

氣に掛かるキッチンで妻独りごつ

熟年離婚分からんわけでないと妻

駅員の居ない特急停車駅

堺市加島由一

鈴の音も聞こえぬ神の高齡化

スナックのママからちよつといい話

結婚をせぬ子の尻を蹴りに行く

いい仲を保つ夫婦の車間距離

泣きながら浅田次郎を読んでいる

堺市奥時雄

宅急便留守を狙つて来るようだ

古希過ぎてあれよあれよの喜寿傘寿

惜しかった宝くじまだ持っている

希少価値出るかもしれない式千円

身辺の整理ひとつも手につかず

堺市大隅克博

昨日今日頑固になった訳じゃない

一步だけ下り先頭キープする

試練かも知れぬ往復向い風

昇進し言いたい事を言われない

酔う前は反省会と言つた筈

堺市山本半錢

合掌の先に命を温めて

寄り道で見つけた扉押して見る

回転ドアすんなり今日は良い日だな

障子越し冬の陽差しが微笑むよ

結局は高く付いたと御招待

堺市宮本かりん

喋り出すいつの間にやら仲直り

遠回りばかりで年を重ねてた

無口でも心を持っている叫び

間をおいてやつとにつこり領いた

早く早くと氣ばかり急いで動けない

堺市西村りつえ

ちぐはぐな夫婦も心かよい合い

アイラヴユー素直に言えぬねじれ花

ゆずり葉は新芽信じて土となり

病室にこぞつて朝日迎え入れ

忍耐を顔には出さぬ金メダル

堺市荻野象山

イエス様ご縁はないがクリスマス

断層の上でカラオケ歌つてる

一年を誓い寿ぐ互礼会

オンボロ車寿命と余生比べてる

ゆうゆうと朝寝樂しむ定年後

堺市 遠山唯教

一枚の枯れ葉が冬をつれてくる
綿帽子かぶり静かな富士にあう
年毎に億劫になる冬仕度
夢にみた父はいつでも揺るがない
つまりと一氣に老いが足にくる

堺市 内藤憲彦

痛い痛いかと言われ痛くなる
誤解されぬよう両手に荷物持ち
世話のかかった娘きれいに咲きました
暇なのにもいつも遅れてくるあいつ
ありがとう余白に書いて今日終わる

堺市 大久保のん子

絵ローソクゆれる向うに夫がいる
チャレンジの意欲まだまだためている
奔流のように過ぎ去る歲月よ
マニフェストころころ変わる未来地図
心して短所魅力にする努力

大阪府 桑田ゆきの

さりげない氣遣いくれて温い席
草の虫まだ鳴き続く暑い秋
葉虫潰す心はすでに夜叉となり
展望鏡右に左に秋の彩
通夜の座へなおも細々虫の鳴く

大阪府 米澤俣子

錆来ても夫婦の絆蝶番
肩書に健忘症と書いとう
老いるとはこんなことかと出る吐息
辛口のことば山葵に唐がらし
テレビから貰うヒントの暮らし向き

大阪府 初山隆盛

芸術も文化も薫る秋の天
国宝の芸がお囃子乗ってくる
自分まで疑いだした探しもの
試着室迷えるうちが花である
老眼鏡磨いて九条読み返す

大阪府 野田栄呼

楽しもう自由たつぷり高齢者
天気予報外れ嬉しい外出日
一杯が元氣を起こす夜の酒
有料のホーム垣根が高すぎる
元氣あるうちにホームへ夢つなぐ

神戸市 山口光久

寡黙だが土と話をしてた父
いつまでも鈍ではおれぬ裏返る
シャンシャンと見事に仕切る団子鼻
大金を持つてる人の瘦せっこけ
札状はハガキ一枚粗相なく

神戸市 早川孝子

夕焼けを食べて明日に備えてる
まだ飛べる手のひらそつと貸しましょう
インスタントのごっこ遊びに夢もらう
よしよしと手の中に住む母の愛
お月さま人の限界見えますか

神戸市 山田婦美子

生命ある限り家族の台になる
古希の坂越えて家族に感謝する
コスモスの花か亡母かと手をかざす
晩秋の風が瘦身の背に痛い
秒針に重りつけた日が沈む

神戸市 木村貴代子

喉元の固有名詞と格闘す
のんびりと生きた今更あわてまい
あわてたら鍵も眼鏡も消えてゆく
霜枯れの花に詫び言う風邪の後
ぜいたくに慣れてそうとも思わない

神戸市 山崎武彦

こげ飯のおにぎり祖母の味がする
言い過ぎたわたしを責める喉仏
火の恋を許す気にいる父の背
玉子むくわたしの愛はまだ未完
煩惱のひとつにおんな文字がある

相生市 中塚礎石

勢いがついた下りの八十路坂
病室に残した本が気にかかる
松一本いじめはじめた植木鉢
過去未来忘れて独り日向ぼこ
思い出にふけり仕分けが進まない

明石市 梶谷和郎

充電をしたくて空へ背伸びする
即興の詩だが響く自負がある
巣立つ子の影を見届け妻と酌む
インスタントの愛がネットを駆け巡る
貶してた友が見舞いに来てくれる

尼崎市 春城年代

住めば都よ鉾山やまにも銀座通りあり
どの鏡も正直過ぎる立ち姿
眠るためのお酒に夜長昂ぶらす
想い出が仰山やまつまり切ないよ
怠慢が冷凍室を占めている

尼崎市 長浜美籠

兄までも連れて逝くのか憎い癌
人と会う度に教わる生きる知恵
波立つ日風の日もあり恙無し
いい予感コーヒーカープの触れる音
安らぎをくれるタオルの肌ざわり

尼崎市 山田 耕治

神様の広告が出る十二月

長長とする言い訳を聞いてない

古本のような主人が店の奥

帰り道静かになったバス旅行

センターで年寄うまく遊ばせる

尼崎市 軸丸 勝巳

大病院みんな二時間待つ修業

先生の目は患者より画面向く

CTが手術不要とよい返事

救急車見れば気になる曲り角

切り替えの早いテレビを追えぬ老い

尼崎市 加川 靖鬼

心斎橋歩けばお茶を挽く香り(大阪南界隈)

宗右衛門町化粧落した昼の顔

この辺り牡蠣舟あった戎橋

千日前うなぎの匂い浸みた町

真相を覗かれてからネコ嫌い

尼崎市 藤岡 りこ

ふる里の道は案外狭かった

庭の花前へ前へと競ってくる

復興へ遠い道にもある出口

情報機器に慣れ考えること忘れ

浪速女三人寄れば声高に

芦屋市 黒田 能子

退屈で寄り道ばかりしてしまう

矢印の通り曲ったはずなのに

昔々で始まる童話母思う

噂ばなし猫も一緒に聞いている

無駄遣いたまにはいいねひとり言

伊丹市 山崎 君子

胡蝶蘭早や秋半ば留守まもる

もみじの木秋のなごりを美しく

のど自慢台湾恋しあの頃を

となり町見える景色はヨーロッパ

若い娘のかつら姿の多いこと

加西市 金川 宣子

ダイエツト小ぶりの茶碗買い直す

総ゴムが放せられないメタボ腹

お土産を待つてる顔を浮かべつつ

積み上げた愚痴の数だけ顔歪む

ひた向きさ展示ガラスにおでこ跡

川西市 西内 朋月

若死にのひばりを聞いて飲んでいる

老人がどんどん増える街に住み

善人の列の最後にしがみつ

デジタルの海に溺れている蛙

飲み込んだ嘘を写しているカメラ

川西市 米原雪子

にこにこと帰った顔に不安消え

出場に逃げ腰の友煽てあげ

孫曾孫みんな帰ったああしんど

秋晴れに気負った仕事はかどらず

腰弱り手押し車が無二の友

三田市 石原歳子

病む夫と思ひ出ばなしして笑う

深みゆく秋をいっぱい壺に挿す

お料理もワイン使つてハイカラに

小春日がうれしい嫁と日向ぼこ

占つて貰う気持にまだなれぬ

三田市 北野哲男

乾杯は地酒がよろしくラス会

生乾きですのと傘寿まだやる気

インターホン代りを犬にさす農家

痩せ我慢男の美学だったなあ

待ったなし行司の声と弥陀の声

三田市 田中章子

貝割れ菜生命力のある形

ねずみとり前の車が捕まった

娘の悩みおいしいものを食べましょう

阪急電車ショートパンツの流行る冬

気がつけば夫とおんなじ歌ハモる

三田市 上垣キヨミ

イケメンの案山子がもてるハイキング

フクシマの冬にせめての荷を送る

手も足も出させぬ嫁の几帳面

胃袋のスペアが欲しいカニの宿

運動のつもりで歩くモク拾い

三田市 福田好文

冷蔵庫開ければ妻の几帳面

酒臭い歯医者顔が近すぎる

任されてやる気起こしたアルバイト

休肝日何時も酒飲む夢を見る

笑い転げるほどに可笑しい事がない

西宮市 緒方美津子

菊日和百歳なんてあたりまえ

一人住む意地を柱にして生きる

地球儀をあわててまわす子の赴任

極上の目刺にチビリチビリ父

甘えても乱れてもよし秋桜

西宮市 西口いわゑ

コスモスの海に少女の日があった

じたばたの海の夕日が美しい

海がきらきらしたしに今を生きている

手の中の小さな幸よそれでいい

愚にもなる酒が平和にしてくれる

西宮市 山本義子

菊薫るあの品格に近づけぬ

人並に忙しそうな顔しとく

お芝居の月はいつでもまん丸だ

十二月生まれあわてん坊のまま今も

ひとり芝居あと暫くは許されよ

西宮市 亀岡哲子

時々嫁に甘える齢となり

運否天賦先祖代々生きた土地

秋の実りに冴えてきましたマイレシビ

美智子さまもしんどい齢となり給い

苦も楽も冗談にする日向ぼこ

西宮市 秋元てる

車内化粧ジャスト完了おめでとう

私もう年寄りなのかと九十二歳

世話焼きが減って日本の人口減

何時も同じ芋煮転がし月命日

同じ貞飽きが来たよと花葉

西宮市 藤本直

口ぐせはいつか息子と飲むだった

歌を聴く詩を聴く涙滲む時

カワイイとオシャレで済ますはめ言葉

他人事となつて久しいクリスマス

古語と死語父の日記に見る流れ

西宮市 吉井菜々子

ごちそうさま美味しい秋と笑い声

のんびりに罪悪感のあるお昼

寛いでいるのは何曜日なのわたし

川柳読本抱きしめて寂しい夜

防災バッグからまたふたつ夜食

西宮市 片山忠

老醜を感じさせない白い服

友達のような教師が増えてくる

お互いの急所を知って仲がいい

学歴の話になると力む癖

いい景色だけを憶えている故郷

西脇市 七反田順子

青空に感謝吟行無事終える

スイッチオンテレビ漬けにはならぬよう

肩の凝り耳下腺までも巻きこんで

善人の顔でコーラス仲間入り

控え目な子に阿弥陀様肩を貸す

姫路市 古川奮水

コスモスの迷路に泣いた赤い靴

子が燥ぐ落葉のプール陽は斜め

羊羹の切り方止めて座に戻る

ブルトップ集めて贈る車椅子

晩秋に茜が藍になつて酒

奈良市 阿部 紀子

道百選四キロ歩き晶子の碑

女性三人武器なき勝利ノーベル賞

どないしよう挨拶文が見つからぬ

大阪のオバチャントークプロに勝つ

大阪城の石垣の技感無量

奈良市 辻内 げんえい

魚好き骨が綺麗に残ってる

劳いの一言あれば気が晴れる

コントネタ政治の中に溢れてる

どないしよう拾ったくじが大当たり

パソコンの将棋の王手待ったする

奈良市 岩 本 浩 二

主の居ぬ故郷柿の実もたわわ

退屈に慣れてすべてがものぐさい

半世紀経って夫婦の味を出す

何気なく吐いた言葉に縛られる

なまじつか法をかじってからの鬱

奈良市 加 門 萌 子

ありがとう無事に列島初日の出

どうしても彼の地を思う同胞です

福島の子等の未来に光あれ

花活ける時の女の脱世俗

命有る物を切り取り紡ぐ日々

生駒市 飛 永 ぶりこ

日の丸にみんなで気張る辰の年

のんびりと晩秋の中風ぐひとり

絵とフォトが拮抗してる二人展

大銀杏天に命をはためかす

凹凸が憎らしいほど隙がない

香芝市 大 内 朝 子

定命を豊かに生きている笑顔

娘の帰省待つうちが花散らう鯨

風邪ぐらいの油断に食らう大目玉

正直を宝のように生きた亡父

あと何度桜紅葉の朱に会える

大和郡山市 坊 農 柳 弘

凡人の域は越さない晦日そば

初神楽巫女のすり足楚楚として

夫婦岩愛に触れ合う初日の出

人見知りしない我が家の松飾り

去年より一膳増えた雑煮箸

奈良県 渡 辺 富 子

銀色の雨へ飛火野暮れなずむ

だんだんと忘れ上手になって冬

どんな日もプラス思考を友とする

愛のかたち繕いながらフルムーン

古都一望魁夷の青い雪が降る

奈良県 天正千梢

一人ずつ聞けばルールは正しくて
ふすまの絵スキ四 五本書いている
落葉ふみつつランプの宿をさがし
遠くない墓にご無沙汰ばかりして
右の耳で聞いて左の耳で忘れ

和歌山市 福本英子

神さまの留守にちよっぴりする悪さ
クールビズ役目果して薦燃える
はみ出した絵手紙孫の初便り
野次馬が燃える大阪市長選
民主党に任す心が揺れたまま

和歌山市 古久保和子

思い出し笑いの理由は聞かぬこと
誤植一字夢の中で追ってくる
ご褒美にケーキを二つ食べました
つるべ落としへ追い抜いて行く影法師
ひと刷けの雲の行方へ遠き人

和歌山市 松原寿子

おだやかに生きて火の粉が降りかかる
着天に夢が広がる深呼吸
捨て切れぬ想いぬくめてページ繰る
拘りの人情論が熱をおび
ここはふるさと声張り上げる安来節

和歌山市 喜田准一

欲ひとつ捨てて肩の荷軽くする
土壇場は開き直りの策に出る
初夢は年金上がる夢でした
何言うているのか分らない総理
逃げ道を開けてくれてた叱り方

和歌山市 武本碧

曲り角気にした頃の若い肌
洋梨のかたちで凧いでいる私
アンニユイな心を笑う砂時計
薬漬け五臓六腑が首を振る
渋抜くとわたしの彩が褪せていく

和歌山市 田中みね

いじめとは悲しき事よ孫を見て
ごめんなさいの風に孫が立ち直る
五七五の魅力が生んだ国語好き
認知症にかからぬうちに遺産分け
相談に乗ってど偉い火傷する

和歌山市 岩本美智子

夫のぶん小さくなった鏡餅
お年玉大きな手まで伸びてくる
小春日和わたし洗濯物になる
衣替え立冬にする温度計
コスモスの波うつ海へ泳ぎ入る

和歌山市 坂部 紀久子

海南市 堂上 泰女

ネバネバを食べて病を寄せつけず
あきらめの年齢などはありません
頭ではちゃんと解っているのです
生きて行くかぎりハードルまだ続く
天災は悲しみだけを置いて行く

和歌山市 堀 富美子

田辺市 岡 昇

被災地に見事な紅葉馳けて来る
とりどりのコスモス揺れて心風ぐ
温もりに付いて行きたい友がいる
昨日今日 起伏のギャップ持て余す
子等と行く回転寿司の手際よさ

和歌山市 松尾 和香

鳥取市 森山 盛桜

一人旅今日も笑顔で生きている
ほどほどの余生延命望まない
白菜もねぎも不揃い虫もいる
残された時間わたしの万華鏡
缶ビール娘と分けて誕生日

和歌山市 上田 紀子

鳥取市 岸本 宏章

賑やかにすれば来るかも福の神
紅葉が胸の中まで降るひと日
ほどほどに忘れて明日へジャンプする
幸せが湿気ないよう風入れる
笑っても泣いてもひと日笑おうぞ

薬が生命力を見せつける

家族の汗に浸って母の仕舞風呂

デジタルになったテレビがよく拗ねる

愛の雫飲んで百歳を目指す

アイスクリーム買いに散歩に出かけるの

おいそれと立ち上がれないピンポーン

ステッキを持つと紳士の顔になる

復興のシナリオ追っている瓦礫

遺産ゼロ子供孝行だと思ふ

寝たきりの母と会話の至福時

逆立ちをしても何にも変わらない

裏口の亀裂はお客には見せぬ

褒め言葉選ると雑音だけ残る

これだけの敷居に決意蹊いた

折角のピアス一瞥されただけ

渋柿が甘くなるまで待つ小鳥

幸せな人だけにある笑い皺

おしゃべりも寿命も女性には負ける

弱者には無縁の法の穴がある

大津波海も懺悔をしたからう

鳥取市 岸 本 孝 子

百薬の長だれが名付けたいい名前
原発を止めてもみんな生きている
につこりとアップの写真撮っておく
子の歩く道は自分で決めと言う
俄雨軒先借りて無駄を買い

鳥取市 福 西 茶 子

大空に何億円の宇宙ゴミ
六回もほとけの貌をしてたのに
怒鳴りたい声呑み込んで自己嫌悪
八方へ愛想笑いはむずかしい
神拝むかたちで君に礼をいう

鳥取市 夏 目 一 粹

なにもせぬ訳にもゆかず酒をのむ
息をのむような美しさが怖い
一途さを齢が抑えてくれている
人形なら目をそらさずに見つめられ
束縛があつて人間らしくなる

鳥取市 中 村 金 祥

訂正は絶対しない大自然
ジグザグの人生楽な道はない
スポットライト浴びて気分がアップする
老い二人でるる坊主吊つて寝る
孫婦り今日は背中を丸くする

鳥取市 平 尾 菜 美

度々に積み木愚痴など申しません
宙づりの積み木はらはら船出する
ふるさとの父の積み木は代ゆずり
迷いつつ日本を担ぐTTP
明日知れぬ命残照追いかける

鳥取市 土 橋 はるお

大笑いすると転んで起きられぬ
一本橋渡り終ってから話
終活をそろそろ準備せにやならぬ
別嬪さんと話するのは難しい
孫祝う年金少し戸惑いぬ

鳥取市 土 橋 睦 子

盃が晴らして呉れた大晦日
老いたなと互いに肩をもんでいる
いい人は心にそつと秘めて置く
話したい事を持ち越す年の暮
ケーキ買う爺さまに別の顔を見る

鳥取市 吉 田 孔 美 子

高度一万夫はわが家のように寝る
ロープウェイ動いて夫がしがみつく
免許更新八回目に乗った
飛行機に仕方なく夫と乗る
棒読みをうっとり聞くと聞く妻よ妻

鳥取市 奥谷彩子

六根しようじょうゆつくり登る喜寿の山

氷河期も支えてくれた妻と老い

巨匠もほっと家に帰ればただの人

ありがとう詰め込む袋返し縫い

百態の水を恵みに生かされる

鳥取市 春木圭一郎

一人でもファンがいるとがんばれる

時折りは自分に足らぬとこ探す

非常時も自分のペース崩さない

今もなお自己中心が直らない

情けない弱い自分を受け入れる

鳥取市 高浜勇

とりあえず走って道を考える

百科辞典使われぬままいい感じ

大台のステージに乗る誕生日

厚切りのパンに半日生かされる

父さんも一緒だったと激励す

鳥取市 横田春名

ゆらゆらと白いコスモス亡き娘舞う

恩人をつい目障りにしてた悔い

アクセント気にしながらも土地言葉

孫達のしきり直しをそつと待つ

姨捨ての議論我が身に寄せてくる

鳥取市 池原天馬

枝たわわ取って食べてよ柿願う

一度くらいエースと言われ正月を

カメ虫の越冬準備あぶり出す

温暖化で吊し柿皆カビに負け

鈴虫も雀もない秋終る

鳥取市 中宇地秀四

無器用で無口信頼出来る友

コンビニが便利役場も銀行も

一つまみほどの約束胃にもたれ

善人のような顔して赤い羽

私の心はペンが知って居る

鳥取市 吉田弘子

雲走る私も走る釣瓶落とし

老いて未だ丸くなれぬに良く転ぶ

その時が来れば自然に逆らわぬ

自転車ルール老いの健康法

一週間輪と和ができて旅の友

鳥取市 深澤千恵子

嫌な事さらりと流し元氣出す

挑んでも興味だけではすぐ挫折

ほどほどに生きて人生楽になり

スマートに映る鏡の試着室

障子越し映る夕日の暖かさ

鳥取市 永原昌鼓

大根の艶と白さが欲しい老い
介護する今が幸せかもしれぬ
姿見が背中伸ばせと叱咤する
喜寿の坂まだまだ元氣夢を追う
宝箱開けると孫の顔ふたつ

鳥取市 西川和子

手八丁口も八丁いい仲間
生き方に共感出来るから手本
余生まだ竜に肖り天目指す
低迷を蘇らせる辰力
リフォームをして流行の先を行く

鳥取市 加藤茶人

あげまんの妻かも知れぬ運が向き
ぼちぼちに油断するなよ儲けてる
五十代中途半端な歳で逝き
地位守る付き合い酒で糖を病み
妻や子のための保身だ口つむる

鳥取市 前田楓花
(孝子改め)

泣いたこと明日の糧として生きる
不揃いの子供三人個性派だ
人の世は生きることが難しい
実験のために生まれたモルモット
ここだけの話どこでもする人だ

鳥取市 竹口清信

吐き切れば嘘が嘘にも成らず済む
人生を嘘で固めていいですか
嘘の数数えきれない数えない
嘘の無い世の中来ると思わない
嘘を吐く覚悟と勇氣だけはある

鳥取市 池澤大鯨

本人は毒と気づかず撒きちらす
役人根性折り目折り目に出しゃばらず
辞退という返事をもらい安堵する
眼鏡のよこれ平氣な人は信置けぬ
とんぼ眼鏡かけてニンゲンやめている

鳥取市 宮脇道子

老い先を不安もあつて花植える
片思い責めず比べず夢にだけ
老い風を何処吹く風と紅をさす
吹く風に温もり持つて頬緩む
田舎町何処に行つてもお年寄り

倉吉市 山中康子

県外車山の錦に勢ぞろい
ハンバーガーちよつと照れてるおちよば口
おおつびらに庇えぬ母が忍びない
この辺で小躍りしたい八十半ば
然り氣なく我が娘とすべて話したい

倉吉市 山本 玲子

無人売りハート信じている主
謎がまだ解けないらしい泥の舟
住む人とハートの通う路地の風
生きるさま見える独りのゴミ袋
女です朝一番に鏡みる

倉吉市 野口 節子

灰色の雲が気になるこの地球
ブランドで隠しきれない老いの影
レトルトで手抜きをさせる食文化
ハイテクの進化にくるり背を向ける
ウィルスが怖くて蛙引きこもり

倉吉市 猪川 由美子

増税総理ついに本性現わした
プラスマイナス考えながら日々暮らす
絶好調の時に退路を考える
増税や節電冬がなお寒い
陛下来て小っちゃな町は大騒ぎ

米子市 竹村 紀の治

錠剤を確かめてみる舌の上
煮て焼いて二枚の鱈で昨日今日
ひとり飯電子レンジに作らせる
独り身の不安が募る風邪の夜
高齢者講習で描く時計の絵

米子市 成田 公一

全ボツでペン習字でも習おうか
休むため三回死んだ母元氣
産声に待合室が湧きあがる
主人の名愛犬に付け呼び捨て
ひと呼吸入れて始めるアエイオウ

米子市 高田 振作

飲んだくれの亡親父と同じ酒の量
骨董品それは私のことです
LEDと寿命競争などしない
そのままのふるさとが好き母が好き
ふるまい酒よばれて本音さらけ出す

米子市 吉田 陽子

台風に情緒不安なあきあかね
寅さんがぶらり帰って来た我が家
隠れたり出たり持病と切れぬ仲
一丸となれぬ離れて住む家族
過去少し足しては今日の色にする

鳥取県 石谷 美恵子

ツツカケもいいがやつぱり下駄の音
バランスがとれず見送る縁もある
切らないで花は鉢に震えてる
疑心暗鬼だんだん闇が深くなり
転んでも只では起きず貯めている

鳥取県 竹 信 照 彦

立冬の風が身に染むなんて歳
忘れてることも忘れるのも平和
外孫の世話に爺さんでは出来ぬ
妻不在昼は汁かけめしにする
いつだってするのは後の無い話

鳥取県 山 本 正 光

原発は目の上の瘤では済まぬ
一筋の労の積木だ崩させぬ
必要とされてる老いで呆けられず
白い歯の笑みが素敵でずつと好き
九十歳恩師現役居る誇り

鳥取県 齊 尾 くにこ

夕暮れにでもでもでも追ってくる
自由人なつてこの顔この心
仕事場へ未完の夢を置いて去る
能力は無いと知る日の青い空
バスルーム今日一日の漂流者

鳥取県 深 田 俱 久

新しい笑顔つくつて年迎え
友が逝き賀状のかさも半分
どんと来い雪の対策試験済み
にぶくても欠点だけはよく気付き
下駄履くと決めた今年の初詣で

鳥取県 松 川 行 男

風止んで私の行方見失う
夫婦です柿熟す頃仲直り
平均と聞けば悲しい貯金額
女も消えた男も消えた田舎町
花びらを一つ残した文化祭

鳥取県 西 谷 悦 子

越えてゆく樹へ喝采をしてあげる
不揃いの芽でも立派に実をつける
バランスが脳と身体でくい違い
バランスのとれない足で踊ってる
復興を試されている日本国

鳥取県 佐 伯 や え

平和だな「ススシ」がでんと里守る
二十二年の顔しつかりと洗つとく
おだやかにはく新年の靴を買う
ヘルペス退散ぶじ新年を迎えます
陽に向いて咲く花たちを見習おう

鳥取県 鈴 木 一 弘

たましいがぬけた風船空に消え
マスゲームすだれだいこん秋深し
福の神宝の山の子だくさん
奥深くこだまがかえる父の森
繕いのつもりが生死大手術

鳥取県 細田 裕花

一年の恵みが光る秋の畑
親友と私の意見食い違う
私を叱ってくれた良い歯医者
七十億の光と闇がある地球
ハートには草原がある男の子

鳥取県 岩崎 和子

雨音を聞いて日頃の疲れ出る
草取りのあとに降る雨ほっとさせ
来春の芽吹き楽しみ土かける
花植えて命燃え立つ齢になる
TPO略字かえってわからない

鳥取県 山下 節子

親ばなれかさっぱり便り来なくなる
長引くぞ自慢話が始まった
長引くと断りにくくなる釣書
喧嘩することも出来ない独居です
バンザイの中でうわさを拾ってる

松江市 錦織 禮子

湖都のルーキー柳壇賞を持ち帰る
一〇〇バンザイ洒落満載の日野原氏
三歳で俳句諺飛び出すなんて
肝っ玉母さん誕生日過ぎて
つるし柿甘さしたたり落ちる出来

松江市 松本 知恵子

父介護に通った靴が捨てられぬ
すずめ鳴く声をきいてる日のゆとり
秋謳歌熟睡の日々続いている
わたくしの芯をゆるがす風が吹く
おっとりとしてミケ猫の三代目

松江市 川本 畔

白菜を三つ並べて思案する
薄気味の悪い話へ人が寄る
抜く棘も刺す棘もありT P P
古里は語りたくない秘密基地
縫い上げの中に残っていた指輪

松江市 松本文子

あの世探しに明日から旅に出てみよう
薄味に慣らされ元氣まで薄め
下積みを生きて下積みしか知らぬ
つましい暮しカーテンの引き具合
溜息ぐつぐつ煮ている水を足しながら

松江市 三島 泓丘

群れでいる鰯も弱い人間も
ほろ酔いに冷たい風が纏いつく
合鍵が心の中を掻き乱す
透き通る心で聞いているピオラ
預金帳眺め余生を思案する

松江市 小川 注 湖

ふるさとは駅名で残る新市名
見本市僕の欲望並んでる

手帳には勇氣湧き出る頁あり

婦唱夫随馬耳東風もございます

名鑑にあつたとはしゃぐ軸の前

松江市 津 川 紫 晃

どの道を歩いた足か地図がない

そつとしてボクはただいま燃焼中

介護士のやさしさにふと老いを知る

人の話聞かぬ仲間と縄のれん

ワンタツチの暮らしに慣れて萎む脳

出雲市 伊 藤 玲 子

悲しみを捨てられぬまま秋おわる

花弁で塞ぐハートにあいた穴

逢いたい合図輪ゴムが飛んでくる

さりげない気配りレモンひと滴

スイッチを切つて誰ともつながらぬ

出雲市 多久和 敬 子

久し振り夫にもらう誉め言葉

五十年貴男の色に染まりつつ

老い三人静かに食べる朝ごはん

たまたまの出会い大事に夫婦船

安らぎをもらう桜の狂い咲き

出雲市 小白金 房 子

鍵かけぬ暮らし待つて老母の顔

袋おび解いて疲れの渦に立つ

流行に遠く素顔の女が好き

来る子等へ布団ふくら干して待つ

自慢する顔ではないが日々達者

出雲市 岸 桂 子

本当のことは書けずに置く日記

造花には散る悲しみはわかるまい

ポケットの砂も子供と昼寝する

風雪も演歌になれば温かい

秋の風読まねばならぬ封書来る

出雲市 富 田 蘭 水

生きのびた命は遙か戦時とぶ

方言が句集の題を決めさせる

無能力知つても止めぬ原稿紙

干し柿がじっくり秋を味わえと

日本海風もいつまで続くやら

島根県 伊 藤 寿 美

去年より広いと思う庭を掃く

「長生きして」と孫から届く誕生日(八十歳)

パンドラの箱が瓦礫の浜に着く

すべてを呑んだ海辺で希望だけ拾う

なでしこジャパン天皇様もおくわしい(園遊会)

美作市 福原悦子

黄いばんだシャツは農婦の正装だ

明日へとチャネル合わせてから眠る

温暖化冬將軍が消えそうだ

一行詩老いの空白埋めてくれ

二度とないチャンス鱗を光らせる

美作市 山本玉恵

ころころと笑う背裏のレクイエム

いつそバクに食わそう一つかみの夢を

長い路命一つの雪囲い

燃え尽きるまでの命よ落日よ

あれやこれ拾い集めて袋とじ

美作市 大石 あすなろ

不器用に生きて切り傷かすり傷

衣替えボツケに残る夏の嘘

チンで済む愛コンビニで買うて来る

孫が来て風の流れが入れ替わる

逆風に喘いだ日から強くなる

竹原市 岩本笑子

コスモスの一人ぼっちで帰る道

リフレッシュ毎日畑見てあきず

一分一秒生きる薬を飲んでる

良い時代だったと足の爪を切り

一人だったら時々思う夜の長さ

竹原市 石原淑子

賛否両論田畑荒れてT P P

菊薫る天皇様の御容体

子育てと親の介護と孫育て

走ること止めて足許観えて来る

にいとしの家族揃うて福笑い

府中市 馬場利子

紅葉に後押しされて実る柿

生きていく喜び野良で息を抜く

突然の目の手術によりそう娘が二人

娘等の情けにたつぷりと出る涙

幸せのリズムに夜の鍋料理

府中市 岩本雅代

目前の松茸飯に目がうるむ

長老の声もとどかぬ世の乱れ

ボランティア免許あるかと尋ねられ

雑草の中で野仏赤帽子

飴一つもらって昔話出る

府中市 藤岡ヒデコ

紅葉の中でわたしを見失う

あの日から引き算ばかりしています

美しいつるべ落としに見る余生

七十路坂嘘を言うのが下手になる

背を少しのばして句会場に行く

宇部市 平田実男

致死量はあるお酒にも薬にも

交番の隣いい事悪い事

あちこちで豪雨宇宙の怒りかも

字余りはある人生も川柳も

一枚の賀状絆で半世紀

東かがわ市 川崎ひかり

返盆の裏に画いている打算

草の種風が運んで行く居場所

トンボ来て止まる小さな孫の肩

子にバトン渡し安堵の荷を下す

七歳の孫と勉強五七五

東かがわ市 清川玲子

頑張りが利かなくなつた日の気落ち

戻らない若さへせてピンクなど

なでしこのパワー貰って糧にする

老骨もまだ錆びてない政治論

痛むとこ抱えながらの旅プラン

松山市 宮尾みのり

大勢の中でどろんをきめています

肩肘を張らねば飛べぬ奴風

哲人の顔でマラソン通り過ぎ

VIP待遇カジノ百億巻き上げる

こそこそはお止しケータイ鳴っている

松山市 高橋宏臣

頑固さは本物世論あごで聞く

紛れ込むエゴも正論抱いている

明日があるそうかも知れぬなと思う

エンピツを削る 削ると明日匂う

解説をされて寡黙になる絵画

松山市 古手川 光

穏やかであれ天よ地よ原発も

ケータイを弄くり回しみな無口

マイナス思考すると始まるスパイラル

札束で原発立地くすぐられ

はけました何を忘れたかも忘れ

大洲市 中居善信

顔のない句ばかり読んでいる疲れ

純粹な目をした子らのVサイン

糸垂れていると豊かになるこころ

農政の不毛休耕田の草

所得倍増日本に何を残したか

西予市 黒田茂代

大雪山の紅葉駆け足で下る

シャープな声で大雪山の鳴きうさぎ

羽衣の滝の高さに立ちすくむ

魂に染みる宗谷の海の藍

しっかり楽しみました初めての乗馬

高知市 小川 てるみ

悠々と国境越える寒気団

冬仕度すれば夏日という異常

ふる里の米も野菜も味がある

若い気を老人力に笑われる

眉間の皺のばす眼鏡をかけている

高知県 小澤 幸泉

切り抜きをつなぎ合わせて生きる日々

終りなき人生ドラマ舞いつづけ

年金を調べ明日へ生きる術

十戒がまだ生きている罪の河

面影をたずねて遠い息子の育ち

唐津市 山口 高明

陛下より元氣頂く初参賀

轡虫他人の苦境喰えるか

一回切りの試食じゃ出ない後遺症

時を経て怖い悪魔が目覚ます

国民を騙した方が裁かれず

唐津市 樋口 輝夫

エアコンをこまめに切つて爺達者

介護四の母は哀しい「あんた誰」

掌の中に主を転がす昨日今日

美人だと言われ続けてまだ独り

税務署の門は広めに開けてある

熊本市 永田 俊子

上げ膳据え膳わたしの頭からつばに

喜怒哀楽万象すべて影を持つ

T P P 是か非か河馬が欠伸する

冬だよ急げ核災害のあと始末

世直しの一喝居士を待つ政治

熊本市 高野 宵草

老け込んでならぬ希望をまた作り

階段の多さよ街の若い脚

黙々と機械の如く散歩する

洗われた心山門出て陰り

窓少し開け木枯しに喝貰う

熊本市 岩切 康子

原稿を届けお宅の城仰ぐ

周辺の気くばり肝に命じとく

お兄様のお元氣告げて今米寿

予定三つこなして今日は良い疲れ

滝の音朝の散歩をかきたてる

札幌市 小沢 淳

好奇心あつてあの世を遠くする

不器用に生きて税が上がりかない

稜線の裏と表の暮らし向き

しがらみの尻尾が僕を悩ませる

晩秋に枯れ行くものと眠るもの

札幌市 三浦 強 一

震災が絆の文字を太くする

はいはいと言つて電話機まで歩く

寒暖差日本一が売りの里

推敲の足りぬ言葉を吐いて悔い

のんびりと行こうよ黄泉の道遥か

砂川市 大橋 政良

自画像に自縛の色をぬり込める

七人の敵のひとりに老いがいる

甘い風甘いウイंक投げてくる

追いつめて追い詰められて風うごく

あさつての方からやつて来た男

黒石市 相馬 一花

人妻が翔ぶと噂になる田舎

筋力が弱り老人力で補強する

痩せ過ぎて貴方どなたと尋ねられ

ロマンスは努力しないと生れない

ストレスが程好い眠りプレゼント

黒石市 佐藤 古拙

猫に鈴みんな足踏みばかりする

着飾った自伝を配る一代目

過労死は横目で通る蟻の列

津波去り松一本が檄とばす

初空に親子ふたりで風を揚ぐ

平川市 小寺 花峯

初軍手どんな色に染まるだろう

しばれる夜心の隅に出るわだち

半日の幸せ求め朝が来る

太陽から希望を貰う土踏まず

残り火を暖めている盆の窪

弘前市 岡本 花匠

石橋を叩く人生愚か知る

年男感謝で終わる除夜の鐘

年明けて辰の福玉欲しくなり

初酉拝み終えての生きる知恵

人と辰平和な年で過ごしたい

弘前市 須郷 井蛙

どの案も国の補償が多過ぎる

無の世界温泉宿にいる余裕

訃報欄載せない人もあり困る

クラス会幹事もいない齢になり

杖がわり毎日傘を持ち歩く

弘前市 今 愁女

MRI 暫しこの世と遮断する

ちびちびと水飲み大地万歩する

体質の先ずは改善つとめます

生野菜食わず嫌いをジュースから

リフォームを重ねて終の住み処とす

弘前市 福士慕情

嗚呼 妻がアルツハイマー症だとは
診察が出来ず薬も貰えない

お化粧もお洒落もしなくなった妻
もう妻に逆らわないと決めている
おやすみのチュウとは妻は子に返る

青森県 松山芳生

黙祷で始まる北の祭りです
津軽路へ太宰が連れて来たメロス
ひと粒の種に負けてるアスファルト
割り箸を割ってこの先どう生きる
神さまのくれた臓器で終りたい

さいたま市 星野育子

天高く声筒抜ける立ち寄り湯
増え続けるのか空き家とホームレス
キーひとつ返して肩の荷を下す
大臣を操る糸は誰が持つ
年金は支給では無く受給です

東京都 岸野あやめ

おめでとう老後のわたしへも聞かず
親友と眼と眼で話す句会場
思うこと告げる言葉が出て来ない
増えて来た思い違いと言ひ違ひ
パーマ屋で平常心を取りもどす

横浜市 小野句多留

優勝のセール意気込む御常連
秘境の湯黙して紅葉受け入れる
タラップを下りて異国を意識する（中国旅）
被災地の秋刀魚がはねる恩返し
一人居の長旅身内かき回す

横浜市 菊地政勝

青空に見えない敵が浮遊する
十万も値切つて墓地を手に入れる
淑女では居られなくなるバイキング
惚け具合チェックをされる同期会
足音を聞き分け猫が正座する

川崎市 三浦きぬ

ああ地球今日で人口七十億
人生はあつという間に終点よ
千切れ雲行きつく先は北国か
秘めごとの一つは老いの潤滑油
昭和史にどっぷり浸り今を生き

富山市 島ひかる

ご機嫌を伺っている朝のお茶
傷付けたことば日記に書いておく
予定表はみ出している老い二人
楷行草TPOへ使い分け
葛藤をくりかえし愛積み上げる

可児市 板山 まみ子

嫌だった麦飯今は週四日

菊花展育てた方はどんな方

妹と娘と孫の名がゴツチャ

美德とは言えない時もある遠慮

大掃除小春日和に少しだけ

静岡県 蘭田 獏 杏

秋刀魚焼く海の青さを偲びつつ

あいさつの爽やかチアガール駆けて行く

肩パッド外しこんなになる自由

惚け咲きの白藤暗いニュース聞く

神様の呉れた荷物が重過ぎる

犬山市 関本 かつ子

日本酒のノンアルコール見当らぬ

忙しく暮らす幸せ不幸せ

詐欺電話娘の声はとんとな

寄り添って丸いポストと田舎駅

パンジーも器量良しから売れていき

犬山市 金子 美千代

黒ずんだ柱と昔話など

断ればお誘いこなくなる不安

義兄逝く定命だとは言われても

骨拾う俗世の事は些事に見え

金木犀良い事ばかり思い出す

犬山市 吉田 幸子

菜園は猫の額で事足りる

触れないで欲しい綿毛が風に乗る

おしゃべりの君の瞳が透き通る

リストラで変身できたのも若さ

母さんのハミング私までうかれ

愛知県 早川 遡 行

今年また枯木に花を咲かせよう

円高よ止まれ企業の呻き声

これ以上悪くはならぬだろう今年

前を見て歩こう過去は過去として

人間の住めない町に誰がした

京都市 西村 益子

のんちゃんの笑いで朝がヨイドン

見て見ぬ振り仲良く過ごす老いの知恵

菜園卒業次の趣味を見つけ

来年も元気でいようクラス会

女三人しゃべりまくって日が暮れる

京都市 藤井 文代

お造りかステキ買える煙草代

がんばれのお言葉よりも手が欲しい

年金組国が頼りで息つなぐ

褒められて身に覚えなく笑うだけ

やる気萎え逃げか妥協か甘えるか

京都市 高 島 啓 子

取り越し苦労は病気のうちだろう

良い方のもしも当たったことがない

電話に出ない倒れたのかと思う

縁縁をはみだしてくる巨匠の絵

男だったと父に言われたことがある

京都市 榎 本 宏 子

二礼二拍驕るころを洗うべく

わたしの事勝手にうわさする他人

母の色未だに出せぬ玉子酒

二ヶ月はある街角のクリスマス

明日を見る鏡は虹をかけておく

京都市 三 宅 満 子

暑い寒いと不足言うては過ぎる日々

あこがれた晴耕雨読ままならず

脇役に満足母は演じ切る

戦力外家族に言われ楽隠居

オレ流を通し優勝宙に舞う

亀岡市 井 上 森 生

新年のやる気が滾る血を奉る

上席の高齢飛躍する心

老練に悟り加えた熟年に

自らの微かなオーラに気付かない

生きてゆく知恵と運とが手を繋ぐ

井原 ジーンズ川柳全国誌上大会

課 題 選 者

「ジーンズ」 森 中 恵美子 (大 阪)
辻 晩 穂 (北海道)
「 綿 」 木 本 朱 夏 (和歌山)
平 山 繁 夫 (兵 庫)
「 藍 」 西 原 千 里 (岡 山)
村 上 氷 筆 (兵 庫)

投句用紙 専用用紙またはB5に3題6句

投句料 1000円

締 切 平成24年2月10日(金)

賞 品 優秀作に井原特産のジーンズ
製品を贈呈

主 催 ジーンズ川柳実行委員会

事務局及び投句先

〒715-0014 井原市七日市町10番地

井原市商工観光課内

ジーンズ川柳係 宛

TEL.0866-62-8850

京都塔の会 40周年記念句会

日 時 2月26日(日) 正午開場

会 場 ハートピア京都 3階大会議室

京都市中京区烏丸丸田町

(地下鉄「丸太町」⑤出口)

TEL.075-222-1777

兼 題 各題2句 13時締切(欠席投句拝辞)

「 龍 」 事前投句(1月21日締切)

都 倉 求 芽 謝選

「 願 」 奥 田 みつ子 選

「 祖 」 伊 達 郁 夫 選

「 清 」 太 田 昭 選

「 坂 」 竹 森 雀 舍 選

「 妙 」 西 出 楓 楽 選

会 費 2000円(呈 お茶・軽食)

投句先 京都塔の会 都 倉 求 芽

TEL.075-351-4109

〒600-8428

京都市下京区諏訪町通り松原下がる

弁財天町328-1202

川柳塔の 川柳讃歌

(85)

木津川 計

關係が年下になる寂しさよ

広島 巴子

年下の關係で大丈夫かいな、と不安に思う
のではありません。巴子さんは「寂しさ」を
感ずるのです。その訳を探ります。

僕は若い頃から年上の女性に憧れました。
二代では三、四十代を三十代では四、五十
代を。ところが七十代のいま、さすがに八
九十代には想いが及びません。致し方なく年
上は諦めました。だから寂しいのです。年上
の官僚が居なくなるのも同じです。こゝは巴
子さん、年下の關係を若い燕と思つては。

もう一花咲かそと水は切らさない

秋 元 てる

お名前から察するに、てるさんは七十代で
す。(間違つていたらお許しください)

その年で「もう一花咲かそ」の心意気に僕
は負けそうであります。僕ももう一花咲かそ

うと、七一歳から「二人語り劇場」を始めま
した。余技のつもりが、十月と十二月は四ス
テージもあつて「嬉し・泣き」(嬉し泣きで
はありません)であります。思うに、咲かせ
過ぎは負担ですし、咲かねば寂しいし、水も
やり過ぎず、やらない過ぎずが肝要ですね。

日程表書いて三割打者めざす

川 端 一步

なんば強打者でも打率四割五分はいません
でした。なぜか三割台でおさまるのです。と
いうことはその割合が限度なのです。

外へ出るのは三日に一度、それぐらいが一
歩さんの年に相応でしょう。ですが、あかつ
き川柳会の代表だけに忙しい。打率四、五割
の出塁でしょうから三割台に控えるというの
です。一割台の日程表も寂しいとなれば、や
はり三割台が丁度です。

顔馴染みなつたばかりに値切る主婦

藤 井 文 代

百貨店で値切る女性はいません。顔馴染み
になるほど足繁く通うことがないからです。
百貨店の売子に愛想がないのは顔馴染みにな
つては値切られるので慇懃にして距離を置く
のです。百貨店に行くと、いつも孤独で寂し
さを覚えるのはこの故でしょう。

その点、商店街は距離を縮めようといします

から顔馴染みになります。なると「まけてえ
な」「かなんな、もう、嫁に行た晩でんがな」
(相手の言いなり)と昔は申してまけました。
怒るのもメール謝るのもメール

森 山 盛 桜

ついにそこまでききましたか。寂しい風景
です。奈良時代、「さびしい」とは「荒涼た
る様で、自分が期待しているものがなく、い
つもそこに見えた人が見えず、心でそれを求
める場合に使われた」とは大野晋さんの説明
です。(『日本語の年輪』新潮文庫)

僕はメールをやらないし、やれません。そ
の代り手書きのファックスを送ります。メー
ルは便利でも「荒涼」過ぎる風景です。

古稀には古稀の燃えるものありルージュ引く

田 中 み ね

昔のどなたかの句に「もう六十まだ六十と
紅を引く」がありました。今日では七十に
引き上げねば、と僕は申してきたのです。み
ねさんのような女性がいて、うれしいことデ
す。「ルージュ」がいいですね。「燃えるもの
あり」の情熱です。

永六輔さんの奥さんが言います。「女はね、
どんな高価な化粧品よりも『キレイだね』と
いう一言でキレイになるのよ」と。ですから
申します。みねさん、キレイですよ。

(『上方芸能』誌発行人)

自選集

小島 蘭 幸

川 上 大 輪

木 村 あきら

目を覚ませ私の中の青き龍
龍は炎を吐かん私は句を吐かん
龍と描いた風が天から還らない
守護神とする竜の眼よ蛇の眼よ
年金満額やつと私に春が来た
護摩を焚くCO₂を出しながら
開いた口閉じよう冬が来る前に
また値上げ一票入れてあげたのに
生きていく喜怒哀楽をかき混ぜて
にんべんに泣かされ獣偏になる
杖頼り白寿を狙う老い独り
丹頂が飛んで来そうな松並木
初春を告げに獅子舞やって来る
さあ春だ上昇気流翔ぶ構え
赤福が網棚にあり初詣で

大山で見る御来光年あらた
正月へ善人らしいご挨拶
裸木は足音たてず明日を待つ
世渡りのため腹芸も使い分け
菜園があり有難い野菜の値

歳時記に鶴彬忌載った夢を見た
羽曳野にいこい殿堂作ります
傘寿翁杖を頼りにアンヨの稽古
妻の庭百花めざして肥料積む
パソコンで孫と一緒に遊びたい

ウロチヨロは見苦しいぞと庭の石
太陽の言葉包んでいるキャベツ
ライバルの海は想定より深い
千年の古都の千年後を想う
神仏の無力ゆるしてあげましょう

晩酌も口も達者で老いの坂
新しい年を迎えて筆洗う
青春に戻っていたのは夢の中
新しい風に馴染めぬ老眼鏡
日本語に今更悩むこともない

小 西 雄 々

塩 満 敏

新 家 完 司

恒 松 町 紅

津 守 柳 伸

正月用エプロン追加する晴れ着
ひるがえる国旗すつきり初詣で
なによりの薬 湯宿の三ヶ日
内緒ごと出来ぬ姉妹のテレパシー
あせつたら転ぶ信号待つぐらい

遠 山 可 住

優勝の胸上げ人生しめくくる
私より貧しい人あり赤い羽根
副会長鳴かず飛ばすが性に合い
ロボットと重い約束してしまふ
妻の死へあれはこれと言うばかり

都 倉 求 芽

逝く秋に抱かれて暮れる東山
この暮れは計報少ない昼の月
やわらかいものだけ詰める御節箱
檜山が一日遠いうるう年
ご機嫌よろしゅう七度目のまわり年

土 橋 螢

一年は長く 短くなるいのち
謹賀新年ここに飾る五七五
死ぬことを忘れて仕舞う誕生日
人の世は光と陰の中にあり
責任と権利に雪がふり積る

中 原 諷 人

虎落吹く寒波のちから横なぐり
ひとの風邪バシッと肺に急降下
集中の室から点滴に酸素
退院の今も酸素の療養記
初春の身動き未だ自信芽吹かない

西 出 楓 楽

日本は昔日出ずる国だった
母の鈴響く昭和を語るたび
心満つ本屋と花屋はしごして
生きるとや毎日石を積んでいる
デッサンが少し足りない明日の絵

仁 部 四 郎

最後かと去年も思ったお正月
診察券ふやさぬ誓いお正月
戒名の試案書き初めお正月
お正月読み返すべき本を決め
本年も総理の月旦お正月

林 瑞 枝

日進月歩の世なり明日の絵が描ける
天は身内で天女が青い空を舞う
毬投げて森と語った昼下り
コバルトブルーの宝石の飛ぶわが溪流
美酒とろりちちの背にある日本海

前 たもつ

霜月を夏日に浮かれ風邪を引き
医者梯子一割とても薬代
野暮用に急かされ忙し年賀状
平均寿命食事いたく五万回
天地異常ノアの箱舟欲しくなり

三 宅 保 州

印刷の門松飾り恙なし
神様の主食はお餅だと思ふ
幸福の構図に欠かせない夕餉
白足袋の裏が汚れている舞台
爪を剪るときは無心になれるのに

政 岡 未延子

相性は悪いが鏡つれあるく
それぞれが違う鏡で老いを見る
見たくなくても鏡の顔は私です
笑ってみると好かれる顔になる鏡
お世辞などいわぬ鏡を大切に

宮 西 弥 生

重ね着が本番となる京時雨
あけすけなおひとりさまに南無阿弥陀
バラ色の噂に生きる紅一点
あれこれと首を突っ込み火傷する
さよならの一言残したまま他人

八 木 千 代

門の扉をじぶんで開けてしあわせな
道を掃く 今日の良いことあるように
おひさまを受けて総身も柔らかな
曲がり角より人影の現われて
どちらからともなく寄って「おめでとう」

八 十 田 洞 庵

ダイエツト秋の味覚は舐めるだけ
お粗末な縞を着こなす妻でよい
口裏を合わそう鬼が耳を寄せ
お下げ髪やつと初恋助走する
初詣で今年も絵馬に無理を言い

両 川 洋 々

政治を叱る白紙のままの一票だけ
農業はどの子も継がぬ放棄地よ
年金が出る頃余生時間切れ
因習に愛の絆を切り裂かれ
救援の善意をカットする余震

板 尾 岳 人

未だ八十歳戦争ごっこなら出来る
ベートベン静かに聞いている日の出
初日の出疲れた乳房餅を焼く
世界遺産素足でパンを食べながら
ベートベン正月すんでも帰らない

全日本川柳鳥取大会記念 第12回 春はくろぼこ川柳大会

と き 4月1日(日) 午前10時開場
ところ 鳥取市さざんか会館(Tel.0857-29-7151)

題

JR山陰線「鳥取駅」下車 南出口徒歩3分
欠席投句 3月20日消印有効

各題2句まで 当日締切 午前11時15分

星	」	高	浜	勇	選
「	」	川	本	畔	選
「	」	森	今	美	選
「	」	堂	蕉	羽	選
「	」	立	蔵	信	選
「	」	小	島	蘭	選
「	」	天	根	夢	選
「	」	河	内	笑	選

事前投句

会 費 3000円(昼食・掲載誌呈)

欠席投句 1000円(郵便小為替・掲載誌呈)

交流会 と き 3月31日(土) 午後6時より

ところ 鳥取ワシントンホテルプラザ

会 費 7000円

問い合わせ 〒689-0343 鳥取市気高町飯里84-4

鈴木 公弘 Tel.0857-84-2886

主 催 川柳同友会・くろぼこ川柳会

立冬のペランダ清し蘭の花
詩ごころどこへ忘れた句が荒れる
泣きくずれる胸欲しくなる秋の暮れ
傘寿なお乙女心のおかしくて
初夢の龍の勢い身につけん
辿った道句読点打ち振り返る
世渡りのコツを先輩から覚る
ルール違反自分の心ごまかせぬ
ニアミスに留意程よく距離を取る
逆境もプラス志向で耐え忍ぶ

河 井 庸 佑

奥 田 み つ 子

温故知新

『菊澤小松園遺句集』より

旅に出て夫を頼る妻となり
靴べらは妻の手にあり妥協癖
ゼロゼロと夫婦に無事な日が続き
何んとのう女らしさはまだ残り
てつちりへ初めてという箸になり
妻と来れば変哲もない砂の浜
石けんの泡の中からまだばやき
倦怠期空腹のまま寝てしまい
二日酔うつらうつらと愚痴を聞き
お互いに知り過ぎている円満さ
無理なこと言うても妻は怒らない
女もさるもの笑顔で迎えてくれる
肩に手を添えた写真を妻かくし
箸枕元来我が家平和主義
見られてもよい日の財布放り出され
方向音痴足は元来丈夫なり
湯けむりの中に女としての妻(湯元温泉にて)
ダイヤモンドヘッドを照らす月となり
ホノルルの夜景眠るのが惜しい
よい加減にしいて来いとあの世から



川 上 大 輪 選

富田林市 山野 寿 之

浮輪つけ重い言葉が泳ぎ切る
三面鏡私の素顔見当たらぬ
消去法つまみ食いしたのは狸

決断をして暫くはよく眠る
パソコンと妻は突然不機嫌に

十人十色僕に合う人まだ居ない

岡山市 工 藤 千代子

味噌汁が熱い啖呵が出てこない

飲み込んだ愚痴をすんなり解く夕日
瘡蓋になったところを突かれる

サイレンが鳴っているので帰ります

響かない人と飲んでる冷めたお茶
失言の尻尾を妻が離さない

富山市 有 澤 嘉 晃

思い込みが人の真価をくもらせる

献立の愚痴を聞き取る冷蔵庫
よい笑顔鏡に覚えさせておく

スッピンの話が聞ける化粧室

イケメンに化学反応してしまう

生き方を示してシワがきれいです

富田林市 関

よしみ

恋しいと書いて余白が泣いている

攻める愛逃げる愛ですやじろべえ

着メロで芯のしんまで狼狽える

拗ねるのは止そうチャンスが立ち泳ぐ

ちよろちよろと小指に止まる天の邪鬼

この人のヒントでやつと起き上がる

河内長野市 針 生 和 代

春のいのち詰めて待つて種袋

万歩計今日も夕日に癒される

少しずつ荷を捨ててゆく古希の坂

集中豪雨地球の涙かも知れず

晩学の脳を精一杯しぼる

しつけ糸取れないままに來た七十路

紀の川市 宇野 幹子

錆びてゆく父母包みたいバスタオル

美しい想い出が浮く水たまり

ティーカップ波が静かになつてゆく

青春の日記酸っぱくほろ苦い

悔しさに石を蹴ったら石も泣く

壮絶なドラマをたたむ心電図

大洲市 花岡 順子

ユニクロへ今年の冬を買いに行く

寝過ごした五分がその日左右する

言葉尻とらえ中味のない会議

顔色を読んで返事を保留する

教科書の通りに歩く気の重さ

沸点の私へ誰も近寄らぬ

寝屋川市 岡本 勲

人生の海泳ぎきつてもまだ地獄

命つないだガラスコップの残り水

スーツ着て出るのは寺か葬式や

太っ腹と言つてほしいとメタボ妻

支える杖がほしい家にも心にも

傾く夕陽にあしたの奇跡信じたい

米子市 野川 宣子

大根の辛さに勝る自己主張

追つて来る老いを振り切る紅を差す

うそのない鏡が女玩ぶ

要る要らぬ身軽にしたい古い仕度
勤ける五体何より財産だ

不要品捨てて我が部屋落ち着けず

東京都 井上 つよし

歯に着せる衣の色にも気を遣い

準備万端整え過ぎて乗り遅れ

新婚で送った駅に孫迎え

ジープの穴が若さをのぞかせる

食欲の秋乗り切ったダイエット

放射能師走の風が撒き散らし

宇部市 高山 清子

許す時やんわりと出る人間味

ためらいが顔に出るのか言葉揺れ

必要とされて生き甲斐出る八十路

核心を突かれ視線が泳ぎだす

中座すりや噂の種になる気配

遠慮ない仲にもほしい車間距離

和歌山市 福井 菜摘

波乱万丈こえた夫婦の笑いじわ

さびしくてつい指切りをしてしまう

やさしさに触れて根雪が解けてゆく

ゆつくりと回りたい日もある時計

だとしても命を削る酒に酔う

ジャンプして景色を少し変えてみる

大阪市 柴 本 ばつは

池田市 上 山 堅 坊

家族会議仲間はずれの僕でした
父と娘のぎこちないのも絆ゆえ
二女三女たつぷり貯めて嫁かぬ気だ
そんなこんなでわが家は女系みな強い
風鐸も鳩もしずかな冬の寺

大阪市 安 藤 なつこ

老夫婦手軽な嘘を食べ飽きる
雨ぼつり干した布団を思い出す
クロス替え季節の顔になる机
四面楚歌道を探しに縄のれん
陽のエキス溜めた布団へ潜り込む

貝塚市 石 田 ひろ子

人は皆自分を守る神が住む
一服の茶のごと今日をいつくしむ
許し合う人の心に花開く
食べ過ぎて悔みながらもまた食べる
おかしいと思えばすべて変に見える

大阪市 太 田 としお

ノンアルコール飲んで仲間にして貰う
悩みから解放されてボケ始め
さあ今日もしっかり食べて薬飲む
一斉に顔出す団地救急車
指切りをするのに躊躇する小指

河内長野市 木見谷 孝 代

人間だものみんな時時エラーする
頼らないサブリメントも介護にも
母よりも父がいつも損してる
老いの証とくに写真を遠ざける
カダフィさん僕と同じ歳やった

堺市 羽田野 洋 介

ときめきを絵具に溶かし描いたバラ
笑おうよ免疫力がアップする
大らかに笑うあなたについて行く
何にでも笑えた頃が華でした
やりくりで賄う母の知恵袋

河内長野市 谷 久美子

ちよつとだけがちよつとで済まぬ悪い友
少しずつなんて言わずに断捨離を
隠してもやる気と顔に書いてある
内緒だと言えば余計に漏れやすい
たつぷりと仕込んだ知恵が出てこない

あれやこれ思う事あり落ち着けず
頼らずに何でも出来た時が華
空回りばかり一日無駄にする
泣き笑い越えて太った肝っ玉
贅沢は三食昼寝出来る事

河内長野市 山本エミ

開け閉めにオイル一滴要る雨戸
胃袋に楽しい思いバイキング
ゴミ袋我が家の恥も捨てたくて
合格に祝儀袋が待つ電話
使わぬとどンドン縮む知恵袋

豊中市 池田純子

忙しいだから大きく深呼吸
空き箱に合った余生を入れてやる
お供えも秋の味覚が勢揃い
笑っても泣いても同じ時は過ぎ
優待の文字が誘惑無駄遣い

東大阪市 西田いくひろ

慌てると何か忘れる歳となる
ごめんねと言えばよいのに意地を張る
敬いの気持があれば通じ合う
しょぼくれた背中は見せぬ心意気
家族の絆顔を合わせてホツとする

箕面市 酒井紀子

夫逝くドラマのつづき演じます
雨の日は君あらわれる喪があげぬ
したたかに生きてみせます独りでも
置時計狂いはじめた秋夜長
この中に私がいいます切手はる

大阪府 高木道子

穏やかでない物腰のバイキング
畔道を歩くおもちゃの兵隊さん
三代代世紀の違う迷い箸
唇の弾丸乗せてバスが出る
悉く皮膚が失くしたしつとり度

八幡市 今井万紗子

沈むのはそこまで笑顔つくりましょう
この人で良かったのだと柿をむく
結び目は笑うところが一緒かも
悲しい日窓枠少し広げとく
窓磨く世の中広く見えてくる

神戸市 木村忠義

生き甲斐を見つけ老いても生き生きと
コスモスが皆僕に手を振っている
ジョギングをしているような雲の群れ
不覚にも自分の妻を間違える
一合の酒で舟こぐようになる

神戸市 白川淑子

八合目風邪を味方にして歩く
メタボ指導出来ぬ約束されられる
年金の範囲で少し跳ねている
適当に放つとかれてるから元氣
ミステリーゾーン十年後の私

神戸市 新保 登美子

奈良市 尾畑 なを江

本当の私を探す日記帳

パトカーに出会って道を譲られる

励ましの言葉が辛い病み上がり

底冷えに紙人形の身も細る

寝たままで入園料を取るコアラ

篠山市 石田 久子

秋の海水着の恋を捨てに行く

不義理する術も覚えた八十路です

居心地が良いのか友は二泊して

スケジュール全部消したい秋の空

独り言女の好きな台所

三田市 上田 ひとみ

こぼれ種わたしに会いに来てくれた

うんうんと自分の影に返事する

新しい靴が欲しくて走り出す

大笑いしたらどんどん泣けてきた

テレビなどうつらなくてもかまわない

宝塚市 丸山 孔一

線香の煙雑念包み込む

あの夏は冬が来るのか疑った

嬉しい日少し歩幅を広くする

録画してまで過去を見たくない

風に散る落葉よ未練残らぬか

先のこと見えてないから生きられる

ポケットに秘密ひとつをしるのばせる

毎日が静か時々めじろ来る

無い袖を振って来たけどつかれ気味

中心にいるのはいつも同じ人

奈良市 大久保 真澄

よく動く姑と居場所のない嫁と

家計簿の隅に小さく母の愚痴

うたた寝に老化がにじむ鼻メガネ

偏屈もいびきもコミで夫です

試食するたびに買い込む律義者

和歌山市 土屋 起世子

目覚しで起きて元気に演技する

予定表に合せ飲んでるビタミン剤

散歩道何所にも秋が落ちている

幸不幸自分で計る匙加減

日記帳買ってつづきの夢を書く

海南省 小谷 小雪

来年は去年の心より若く

秋天の奥に手ごわい寒気団

ふんばってみよう重心低くして

長電話時計が鳴ってけりをつけ

おやすみとパソコンの窓閉じている

紀の川市 楠原富子

くよくよを溜めた言葉の不発弾
妥協点みつからぬまま途中下車
今日の疲れ救ってくれる子の寝息
手帳からはじけ出してるスケジュール
幸せの花は目立たず咲いている

橋本市 石田隆彦

せっかちな彼にもあつた乗り遅れ
酒過ぎて五臓六腑の後始末
無農薬白菜虫と半分こ
田畑が悲鳴をあげるＴＰＰ
一人っ子甘えたよりも甘いパパ

米子市 見山温子

花言葉ハートにつけ火喰す
若者が消え休耕田増えていく
家事一切休むと言ってストライキ
点滴が明日への力つないでる
老いた証昔の事をよく語る

米子市 湯浅久司

陽がさして身体がゆるくなってる
本人の知らぬところにアザがある
多少です私がついた嘘の数
十分に生きたと思う日が来ない
いい案は後から気づくものですね

米子市 山本ふみ子

予測にはなかった病氣抱え込み
手土産にこぼれるほどの思い込め
どの娘にもこころ刻んで分けてやる
褒めすぎて痛み解せぬ子に育ち
小遣いを削られ妻の尻の下

米子市 生田寒之

貯め込んで不景気まねく貯金箱
ブレイキの利かぬチャリンコ漕ぐ老後
男一人こんにやく甘く辛く炊く
同行はその筋からの派遣受け
腰までも浸かる屋台で飯を食い

米子市 中原章子

取り柄なら日記毎日つけること
頼みごとすぐにする夫せぬ息子
免疫力腹から笑いアップする
人様にできの良い方差し上げる
熱烈な追っかけ一度してみたい

米子市 加藤正二

この地球見えない風に揺れている
頑張つてがんばるの声こだまする
独りでは長生きの福もて余す
物忘れ気づくからまだましだろう
願かけて書けるか二年日記買う

竹原市 國 實 力

隠しごとできる間の幸もあり
無い知恵をしぼって無駄を買っている
裸婦像を笑って見てる人いない
マラソンコースの中にある三途の川
惜しまれて逝く日はすでに過ぎちゃった

山口市 中 前 幸 子

自分を試す騙し絵の中に立つ
シーソーゲームの真ん中に咲くひまわりよ
坂道でひろった風の住所録
温度差の埋まらぬ男置き去りに
起き上がりこぼし明日はきつと晴れ

弘前市 高 橋 洋 子

脛かじりされない空しさと安堵
本当に悲しい時は泣けません
古日記弱音ばかりを吐いていた
老姉妹元気を結ぶ黒電話
医師補充五年後なんて待てぬ歳

佐渡市 高 野 不 二

人生の付録を生きている読書
年金があるから大事にされている
文明の利器か便座が暖かい
新聞が来る迄今日を持て余す
ポイントが貯まって無駄なものを買う

横浜市 巖 田 かず枝

退院後皆温泉へ行くと言う
長寿国病室常に満員で
モットーは出来る範囲の事をやる
車椅子乗せて欲しそな孫の顔
来てうれし帰ってうれし見舞い客

豊橋市 藤 田 千 休

錯覚と思いたくないラブゲーム
税というホップを効かす生ビール
ノックして歳を聞きたい肌の張り
連立は利権の糊でくつつかせ
絵に描いた餅で老後を膨らませ

唐津市 吉 富 節 子

病名の数が増えてく余白かな
信じたり騙したりして夫婦です
迷惑をかけぬ印鑑牙をむく
親友が逝って聞けないアドバイス
譲れない雑魚には雑魚の意地がある

メルボルン 藤 原 ポン吉

手術前気丈振る舞う子の手汗
病室に響く心拍生きる鐘
命綱今頼れるは痛み止め
待ち合いの長さがしみる治療前
痛さゆえ笑顔にかなり無理がある

大阪市 前川 善之

宝くじ夢を買つてもシャボン玉
幸せを追えば追う程逃げて行く
想定外でどんな事でも済ましてる
馴れという怖い習慣止まらない

大阪市 浅井 公平

しつこいな句の締切りが夢に出る
甘えさせ子の将来を壊す親
願いがと多すぎ頭まとまらず
願います今から余生加え算

大阪市 安田 由美子

消防車来るわ来るわと四台も
エントランス小火の後の井戸端会議
小火騒ぎこわいですねとエレベーター
二階六階十階と不審火続く

大阪市 高杉 力

同じこと言つてないかと繰り返し
老眼鏡使いたくなる記事はなし
乗り越して戻る電車でまた眠り
緊張が解けぬ回らない寿司屋

大阪市 栃尾 奏子

夕焼けがきれい裸足のまま走る
パンプスを脱ぐまで息継ぎはしない
完璧と思うところにある死角
捨てゼリフ語尾まで熱く燃えていた

大阪市 平井 露芳

一応は点呼してからのも葉
秋晴れや大きな秋を空に見た
焼け残しのハートがちよつと悪さする
ドングリを探しに熊が街ぶらり

大阪市 西川 冷子

エアコンは七時に消して余熱部屋
朝霧にぼっかり黄色く月西に
50年掛けてるひまにやせた年金
年金は老後の糧に掛けた筈

大阪市 松田 聰

増税で未来の暮らしどう変わる
不具合と言うけど実は気のゆるみ
節電に慣れた頃には夏終る
もうかりまつかばちばちでつせなつかしい

大阪市 吉川 弘泰

初詣息災願う鈴の音
三ヶ日済んで昼寝の酒を酌み
初日の出家族の絆雑煮餅
熱燗で互いに交わす祝い膳

大阪市 吉田 知之

ポイントデー混まないうちと早く出る
インタビュアみんな標準語でしゃべる
駐輪禁止書いてあつても知らんふり
歳だけはどうしようもなく押し寄せる

堺市 澤井敏治

今年こそ竜の背中に乗って翔ぶ

木守り柿狙う鴉と睨み合う

積み立てたドルは木の葉に化けていく

招き猫きょうは両手を上げている

堺市 増田和幸

ギリシャデフォルト笑えないぞ日本

地球号七十億の乗組員

一千兆国債重く沈みそう

赤トンボ見なくなつたね秋の空

堺市 近藤治子

早合点会話ちぐはぐもつれ出す

そこそこの元気があつて医者通い

趣味の日は家事そこそこにして出掛け

気苦労もするがそこそこ幸せよ

池田市 多田契子

足元で元氣ですかと影法師

無罪とは言えぬ気のする肥満体

日本茶でベートーベンを聞いている

また明日虹を探しに参ります

泉津市 助川和美

老いの身に二ヶ月先の予約旅

新幹線一泊させぬ会社員

飯美味い空腹だった昔の子

定年のない妻今日も化粧する

泉佐野市 稲葉 洋

八十路踏み少しは世間見た思い

百八つ昨日と明日の句読点

幸せの形いろいろ初日の出

海眺め空を仰いで春の気宇

交野市 田岡久幸

慎重な総理に少しじれてくる

かまきりとガラス戸越しに目が合った

また乗ってくんねえかえと駅の壁

おもちゃ屋で買った時計がよく動く

河内長野市 梶原弘光

ニューミュージックお玉杓子も跳びはねる

父の居たホームの前でお辞儀する

年末にかけてダッシュを試みる

宿題を忘れた夢を未だ見る

河内長野市 木太久正一

暖冬はいいけどどこかムリがある

愛犬と妻の世話ありわれ病めぬ

元気かな犬の散歩で確かめる

防潮堤高さ気になる元通り

河内長野市 辻村ヒロ

この人と第六感で丸つける

この顔でよければ貸すと厚化粧

鼻歌も低音になり渋味増す

散歩には何時も鉛筆ノート持つ

河内長野市 松岡 篤

名案が浮かんだ時に目が覚めて

おにぎりを三つ食う日は調子良い

買ったまま値札が付いて十余年

パパ似だよママ似ですよと寝てる子に

河内長野市 宮守 正博

専門家いつも顔出す事故のあと

幸せは一人で行けるトイレです

今日もまた喧嘩相手の妻がいる

手相ではとうに社長になっている

河内長野市 八木 加修子

野暮ったい服もレトロで人気でる

傷舐めて孤独に浸る白い猫

クリスマス点灯式の後淋し

ボスターの笑顔の裏を見てみたい

岸和田市 中岡 香代

胎児から借金背おうこの時代

引き分けて勝負つかないエコとケチ

シール持つ店員のあと追いかける

希望にはもれなく付いてくる茨

岸和田市 増田 隆昭

不景気のままに税金上げたとて

敗因のたれば明日の糧にする

実力の無さはスランプとは言わぬ

年金にボーナス欲しい十二月

吹田市 藏田 光子

旅カバン天気予報が気にかかる

露天ぶる月の光がまぶしすぎ

雑草も力衰え秋の色

親切な友の声聞く長電話

高槻市 田中 由美子

手をぎゅっと握り返して来る返事

自尊心シャワー全開して流す

ライバルは自分と決めている日課

あり余る中に育ってきた脆さ

豊中市 石橋 優明

水たまりスキップすれば月が跳ね

心の闇まるまると肥え元気なり

車掌さんノリノリで車内闊歩する

宙空に笑いかけ行く刀自一人

豊中市 貝塚 正子

寄り道も上手になった一年生

絵手紙に元気が踊る筆のあと

これ以上ないほど夢中白髪染

さくさくの脳になったかねばれない

豊中市 源田 啓生

猫ちゃんよ抱けない事情あるんだよ

本当の顔はテレビの裏にある

インクの出気にしてる間に匂を忘れ

渋皮の取れぬ栗にも意地はある

寝屋川市 小谷 滋彦

買い換えた車と余命比べ見る
一会より別離おおくて襟ただす
労えば君のおかけと感謝され
はかなくも悠悠自適死語となり

羽曳野市 安本 美喜

鼻唄交り第九の母の台所
腰曲げた海老真ん中に祝箸
昇り竜の勢いわたしマイベース
冬將軍やって来ましたガラス戸に

羽曳野市 磯本 洋一

鰯雲大漁願う漁師町
背比べし両手開いた彼岸花
秋刀魚焼く孫の帰省に心なる
かさ蓋を睨んで今日も日が暮れる

羽曳野市 宇都宮 ちづる

のんびりと手動扉で降りる駅
お土産がついつい増える時間待ち
チェックイン機械の前で狼狽える
旅の後体重計が笑ってる

枚方市 小川 良吉

離農ふえ猪出たと騒ぎ立て
機械化で早乙女風情消えた里
減反で瑞穂の国の田は荒れて
減反で野良着の案山子首垂れる

枚方市 河田 洋子

ファッションは今では楽なしサイズ
古希過ぎてただ見るだけのファッション誌
ひと昔前のファッション着ています
飾らない言葉で言える友が居る

枚方市 坂本 ミヨノ

紅葉見る極楽気分健脚美
喋るだけ喋って笑う相棒だ
定年で緊張とけて毬になる
子はかすがいい結びとけない深い愛

松原市 市川 雄太

人生をコピーするなどできません
いちゃもんは僕は耳など貸しません
寝ていてもなぜか途中で目を覚ます
人生の終着駅へ長い旅

箕面市 寺井 柳童

外泊の許可タクシーを待たせてる
ピリオドを打つてはならぬ海の声
紅葉が山から下りる笛太鼓
納税にあればうれしいポイント制

八尾市 田邊 浩三

プールの波に佳句が浮いたり沈んだり
荒波に揉まれたわりに角がある
餌を買った青い目を追う奈良の鹿
食欲もなく秋空仰ぐ片思い

八尾市 前田 紀雄

早くから監視下に有る我が家計
元気です菊菜サラダ菜我が農園
今年こそ呪縛を解いて夢を追う
マニフェスト言葉踊れどその無力

八尾市 山根 妙子

脳トレに指体操で電車待ち
手で裂いた古布で教わる布ぞうり
年金がころころ変わり鬼ごっこ
病癒え金木犀を嗅ぐゆとり

大阪府 小栢 こずえ

気にかかる人思い出す夜長です
窓明けて朝の空気と元氣いれ
あざやかな紅葉いのち飾るよに
雨降りも晴れても嬉し老農婦

大阪府 神野 千恵子

お願いと言つてゐるようなオジギソウ
これからは他力本願よしとする
安物を買つて粗末にする驕り
まっすぐな道がやつぱり性に合う

大阪府 畑中 節子

千枚田景観の良い急斜面
物干しのシャツも抱き合う芋嵐
お茶の花日和つづきに黄を点じ
二日後の筋肉痛が我あわれ

大阪府 中井 記久乃

針を持ち我手仕事で夢も縫う
今宵また月にのびゆく雲の帯
満月も過ぎてさびしい闇の夜
何事も一年生はつらいもの

大阪府 若月 祐作

骨折にコルセット付け妻の乱
MRIかけて腰椎破損知る
ヘチマ蔓日除けも出来て実もついた
ヘチマ水点滴のごと壇に溜め

神戸市 能勢 利子

気に入りの鏡に元氣もらう朝
ハイテクにギブアップですアナログ派
空の旅老母と一緒に鳥になる
食べ物がある幸せを日日感謝

神戸市 山根 弘子

ささえ合う握る両手にあるロマン
美人ママ正体見せぬカウンター
正体を知つてむなしい恋心
飛び出した友の頓知に癒されて

尼崎市 田原 一兆

振り返る機会知らせるバラの刺
妻の勘きびしく壺を衝いてくる
信じろと話すことばと目が合わぬ
猿芝居底見えてくる馬鹿らしさ

尼崎市 市坪武臣

ふるさと会訛言葉で盛り上がる
高齢者優先座席避ける意地
身内でも知らせなかった訃報欄
狙い球我慢して待つど根性

尼崎市 小池幸子

暴力をしつけどかくれ蓑にする
老い一人助っ人ほしい湿布貼る
思い出を辿る八十路の旅の宿
ギンナンの味と匂いのこのギャップ

加東市 岩本美緒子

あと少し好きな墨絵と遊びたい
霜月の温い立冬喜べず
週二回ケーサービスの仲間入り
許される嫁と姑で終りたい

加東市 安達厚

松に孤着せて自分も冬衣装
気がつけば昭和も遠くなっている
小刻みに休んでしてる畑仕事
庭の木に遊ぶ小鳥を見て飽きず

加東市 黒崎美紗子

味の違い昔しのだ赤穂塩
藍染めの体験たのし旅無し
旅参加日頃のうさも飛んで去る
来なくてもよいが白蟻すんでいい

川西市 山口不動

極論を言うてる人のいくじなし
謝罪文極めて遺憾聞き飽きた
恋しましょタイムトンネルくぐり抜け
秋天にジェット音が過ぎてゆく

川西市 日野岡和之

蘇える街並み明日へ飛躍する
太々しい自信の果ては落し穴
何ひとつなくとも笑顔待つてるよ
生き方は人それぞれでみないい

篠山市 谷田多美子

老いてまだ心は若い冬仕度
道連れの腰痛今日もよく弾む
秋夜なが昼間の悔いを振り返る
楢山がぼつり気になる明けの月

篠山市 沢山啓子

尼僧らの買い物籠も鍋らしい
おおむねは幸福なんだ屋根がある
とりもなおさず導師はどこにいますやら
決別のきつかけはほら君からだ

篠山市 永井かほる

手をつなぎ共に平和の花咲かそ
かばいあいゆずり合いして半世紀
手も足も老化か重くなってきた
不景気な世相に心重くなり

篠山市 酒井 健二

年の暮れ一回だけのボタン鍋
忘年会無理に作って年を越す
メニユー置き一番安いワイン聞く
そば食べて米の重さを胃で計る

篠山市 藤井 美智子

お互いに欠点認め心晴れ
老いの域最近やつと自覚する
ゆつくりと頑張りましょう老いの道
元気ならこそ味わえる忙しさ

篠山市 酒井 真由

のんびりと釣り糸垂れている亡父か
盟友が逝ってこの世が味気ない
取れたての野菜の贅を皿に盛る
君のそれは贅沢病というやまい

三田市 雑賀 一泉

握手され名前浮かばずケセラセラ
旅鳥留守を仏にまかせきり
コソド口に盗みの手口教えられ
不意の客妻のケーキを横取りす

三田市 尾崎 一子

新米に母の元氣も入れておく
何事もプラス思考で老いに勝つ
組体操友を信じた晴舞台
生きていよう七重八重の花もさく

三田市 辻 開子

近隣の優しさ感じ出る元氣
また今日も朝のめざめが幸くれる
血圧が天気教える体持つ
ただならぬ指の運びでするメール

西宮市 泉水 冴子

宝石は没収されるかも浄土
仏さま今夜と明日は留守します
釜茹でにされて蟹には何の罪
フランスパンを睨んでるコッペパン

西宮市 株元 玲子

散歩道木々の微笑み身に沁みる
あちこちに友だちつくり元氣出す
ブルーの空にくもり心を癒される
国々が乱れて吐息消えぬまま

三木市 山口 久子

夕陽あび帰って行くよ赤とんぼ
嫉妬した相手が猫で恥ずかしい
天高く夕やけこやけと孫歌う
白髪ふえ頑固親父も氣弱なり

奈良県 谷川 憲

モノづくり矢張り日本の座標軸
グーグルで見れば我が家は兎小屋
GPSに夜遊びの場所ばらされる
風呂敷は日本の誇るエコ文化

奈良市 矢野 良一

デパ地下の試食で昼のバイキング

古き良き昭和にもどる純喫茶

薩摩訛しみて嬉しいクラス会

青春の意気がとけあうクラス会

奈良市 前田 弘恵

久方の友にハグして幸もらう

穏やかに会話し腹で戦する

秋立ちて背高に映る影を踏み

平凡な日日に合掌震災後

和歌山市 磯部 義雄

コロンブスの真似事をしている卵

肩凝りが孫の笑顔で解れだす

掃除した跡が気になる他人の目

買物でまさかと思う物忘れ

和歌山市 坂部 かずみ

カステラの甘さに溶ける夏疲れ

玉突きのように広がる物思い

秋空にお喋り集めバス旅行

人込みに疲れ予定も早送り

岩出市 村中 悦男

時がたつ程に大事がうすくなる

乱筆も私読めればいい日記

三日月に腰を掛けたい老いとても

ほどほどに嘘も交えて親に孝

岩出市 藤原 ほのか

紅をさしやつと自分を取り戻す

手柄など立てず帰れと母の声

物干しにいろんな未来揺れている

気がつけば母の歩いた道だった

紀の川市 辻内 次根

ノーマーション秋が内角突いてくる

秋の雨ごつそり抜けていた記憶

失敗を隠す木枯らし吹いた日に

冬に咲く花の図鑑をあけて見る

紀の川市 北山 絹子

喝采はないが人間らしく生き

脇役のままで今でもいる二人

熱燗が待ちきれなくて水を飲む

秋深し豆腐主役の顔でいる

田辺市 大峠 可動

妻の歩といまの私は相子だな

未知数の大地だいつか海になる

議員歳費名もなき民の税ですか

風のある大地で会話遠くなる

和歌山県 森下 よりこ

はつとする旧友の名を思い出し

カブ大根野菜畑は冬仕度

鶏頭の種ほろほろと深む秋

来年も作ろう花の種を採る

鳥取市 松原ひとみ

口の中工事音する歯医者椅子
立ち話話のしつぽつかめない
物臭を悔いる血管老けてきた
惜敗に苦いお酒が染み渡る

境港市 中井虎尾

貧しくも新米食えりやしあわせか
無農薬命をかけて知るカエル
T P P 正論異論ごっちゃごちゃ
70の億の重さに耐える星

鳥取市 坂本とも湖

色づく森落葉ジュータン踏み締める
平和家族柱の権威守りぬく
我慢の道老いも人生遠回り
目ざわりでズボラな男凛とせよ

鳥取市 津村律子

T P P 論農家離れが増すばかり
妻の酌おだても無いが気兼ねない
秋の蚊よほつぺ迄来てぶたれてる
いい噂振り撒く人はいいい人ね

鳥取市 近藤秋星

大山の初冠雪は全国に
千年に一度未曾有の年も逝く
新年の抱負などない老いの身に
冬眠に入る準備をしています

鳥取市 大前安子

いちばんに咲いた花から種が取れ
一人っ子長の字貰いかたつむり
努力した一番の顔崩せない
吹き溜まりカサカサカサと世の話

鳥取市 山口千代子

深み行く秋が淋しく肌を刺す
捨てる気の靴が散歩の役に立つ
滑り止め靴には有るが口がない
災害が二度と来ぬよう日々拝む

米子市 後藤美恵子

午前さまでもつれもつれの忍び足
顔のしわ照らし出さない席探す
ヘルメット放射能には用なさず
取り残した草が華やぐもみじして

米子市 小塩智加恵

私と同じ名の人見当らず
無言劇一日過ごす恙無し
孫の名を忘れたようだ核家族
息切れと根気が失せる八十路坂

米子市 後藤宏之

生れ年臨機応変変えてます
いつ迄も箱入り娘が抜け切らぬ
鏡みて自分の顔にはえる犬
浮雲のような男にはととする

米子市 田村周子

煩惱は未だ未だ消えぬ八十歳
大根のおでんが欲しい秋となる
母から聞いた無情の風は未だでよい
さんま焼いて日本の秋を知りました

鳥取県 下田茂登子

融通の利かぬ夫で憎らしい
吐き出して見ても楽にはなれぬ腹
家族葬私もしたいそう思う
距離置いて喋っていますお隣りと

鳥取県 加賀田志延

金相場上ついても物が無い
言い訳に日の短さはありがたい
コオロギが夜長の友を買って出る
道すがら詩人の気分月が澄む

鳥取県 飯野菖子

鋏を振る腕は夕日も気付かない
初対面敬語無理して疲れたです
予定した思ひは空し道を行く
夕焼けの空を慕うか赤トンボ

鳥取県 岡村孝明

師のそばにびったりついてコッ学ぶ
難問が解けて心は澄み渡る
義理だとは思いうが貰う回し物
顔見知り多く会釈の文化祭

鳥取県 橋谷静江

念入りに化粧もできて旅仕度
気分かえ日帰り旅へ友誘う
古里の道は日に日に遠ざかり
節約とエコとで元氣だして見る

鳥取県 大塚美代子

横道に入るとやさしい風に合う
近道を通れば先は行き止まり
遊歩道あわだち草が手を招く
いい色に染めたと釘を褒めるなす

鳥取県 田口清帆

新しい電池入れ換え生きていく
金魚でもどじょうでも良い眠れたら
人は人あせらず亀と私ゆく
まっすぐに歩くと見えてきた希望

松江市 相見柳歩

波のないお方だいつもたおやかだ
譲られて車もうれしがっている
沈黙を守って君が袖を引く
溜めに溜めこの一球を打ってやる

出雲市 黒目英男

はじめからエゴと知りつつ欲を出す
ケイタイが次々変わり手に負えぬ
いばら道自分を信じ出直した
懸命に努力を重ね道半ば

雲南市 武島 ちよえ

天に唾吐く勢いはありません
加湿器に潤いもう顔の皺
リハビリと思えば段差苦にならぬ
選り好みなどしてられぬ日が落ちる

雲南市 菅田 かつ子

手を握るぐらいの仲で終りけり
友達が痴呆と聞いた日の辛さ
よろよろと終点までを楽しもう
残高はどうあれまめなのが取り得

安来市 原 煩惱児

未だ夢を繋ぐ歯医者へ通つて
正月の御神酒が残ったまま床に
来客も酒を呑まない僕の家
酒は毒だから飲まない僕頑固

美作市 小林 妻子

無学にもひとつやふたつある取り柄
戦場をくぐり勿体ない命
私の海にも続く計の報せ
羅漢像父母を探しにまた訪ね

倉吉市 田中 紀美恵

津波のない日本地図にと塗り変える
朝の水ゴクンと呑んで今日を生き
棒読みのばあちゃん心響かない
年金がつつかい棒で生きてます

倉吉市 前田 喜美子

緊張がほぐれて残る肩の凝り
鏡台に座ればうつる過ぎし日日
忘れたい事が頭にこびりつく
まだ生きて平均寿命引き上げる

備前市 森 ふみか

あちこちにアンテナのある暇な街
懺悔したのに変りない陽が昇る
嫁の来ぬ過疎を嘆いて酒すすむ
幸せな犬だしっかりした首輪

竹原市 六田 半徳

里山で風に吹かれる野紺菊
酒減ってお茶漸増のクラス会
山茶花が五輪咲いてる北の窓
八朔が色どり増してヒヨ騒ぐ

竹原市 若年 幸子

被災地へキラキラ戻る子供の瞳
思い出がワツと出て来る旅靴
視点変えやつと迷いの霧が晴れ
ひとり居をおいしい罍が狙つて

竹原市 土井 輝恵

孫投資持つて逝かりやあせんけえの
娘が叱る嬉しくもあり腹も立つ
廃校の庭を乗っ取る老人会
五十年良く持ったねと孫の言う

広島市 岸 本 清

儲けてる会社はどこもパートだけ
他人には酒をやめろと言えるのに
駄駄っ児が地べたに座り自己主張
まだ捨てたものじゃないわと厚化粧

香南市 桑 名 孝 雄

米寿へと五年日記が叱咤する
艱難辛苦どうか勘弁してくれよ
ここもまあ女おんなの紅葉狩り
殺伐な世相洗濯しましょうよ

今治市 渡 邊 伊 津 志

漁師町夫婦おんなじ色に焼け
蜜柑剥く指を預けた嬉しい日
美を求めたく人生の彩を選ぶ
はしたない語尾に理性を取り戻す

四国中央市 篠 原 久

浮き袋にすぐる暮しも板につき
湯豆腐に熱燗あなた冬仕度
井戸端の雀ひとりが風邪を引く
早起きのカラス命が掛かってる

松山市 神 野 き っ こ

文化の日腕まくりして部屋掃除
朝ドラに元気をもらい窓を拭く
うれしいと酒悲しいと酒を飲む
散歩道おいでおいでと薄の穂

北九州市 小 松 紀 子

誕生日生きる喜びかみしめた
満身創痍新しい部品ないものか
政治とは誰がためのもの議員諸氏
出来ること出来る時するボランティア

福岡県 豊 田 愛

またやった庄迫骨折老い悟る
憎むのは我が身の脆さコレセット
庭に咲く小菊部屋中活け虚ろ
仏飯を盛って訴え吐いている

福岡県 本 田 さ くら

初孫のDNAに興味あり
孫にミルクタマはジーツとねたみ顔
孫帰るさびしさ安堵入り交じる
世の親のすごさ実感ママになる

唐津市 岩 崎 實

がんばろうどこもかしこもがんばろう
老人も派手な赤では負けません
肩の荷をおろしたはずがまだ残り
副作用それかも知れぬこの日ごろ

唐津市 北 村 松 風

良妻と褒めて下さる他人様
掌の運命線と違う道
かわいいが覚えきれない孫曾孫
老介護二歩前進とトイレあり

山鹿市 米加田 恭代

常連さん八方美人の接客す
痛いところすべて加齢の診断書
物忘れ呆けとは言わず健忘症
イタリアさんあなたもですか借金苦

山鹿市 三谷 たん吉

誤解だと日本人なら分つてゐる
今の世に無難な道は無いと知れ
どっち道手ぐすねひいてる反対屋
古稀過ぎて若きに習う事も無し

シドニー 坂上 のり子

ニヤーンしか言わない猫の見る世界
なでられたくてほめられたくて猫が寄る
あれにこれに手を出し過ぎてどれも初歩
良いも悪いも皆織りまぜて古希の知恵

札幌市 佐藤 登美子

すきつ腹になると癪癪起こす父
週刊誌の餌食にされる芸能人
新聞を斜め読みする共稼ぎ
思い出に浸って仕分け先のばし

弘前市 高森 一 吞

謝りし稲穂の首は刈り切れず
大声で子供を叱る母元氣
天高し二重飛行の赤トンボ
復興をじっと我慢で秋刀魚やく

弘前市 稲見 則彦

海鳴りと三味の音混じる五能線
たつぷりの時間たつぷり墨をする
沸々と鍋が呼んでる十八時
レコードの溝に詰まった青春譜

塩竈市 木田 比呂朗

壮健を言いつつサブリ握りしめ
さり気なく昨夜の酒量聞く主治医
成行で片付けもする鍋奉行
今度こそ本氣らしいぞ消費税

福島県 七ツ森 客山

保証書を何処に置いたかおーいお茶
深読みをしない医者から薬だけ
平和です家事を半分こなします
自動ドア閉まらないから立っている

東京都 大竹 一良

葛藤を忘れて浴す秘湯の里
順調が驕りとなつて油断うみ
やれやれと長旅帰る朝の粥
定年で心ひろがる新天地

昭島市 野口 忠

おとうとにいつももおおきくけるケーキ
迫真の風評主婦が走り出す
素っぴんで波風立たぬ嫁姑
足腰が脳に反発しだす古稀

清瀬市 岸 愛三

薄着して感冒こいと待っている

やって見せはめてやらせる幹部職

江南市 脇田雅美

やまぬ雨はないというがバンコック

玉ねぎを刻む音にも焦りある

物食えば不燃ゴミまた増えてゆく

こんな事まで気にしてた日記帳

匂いかぐまで生きるとするか蘭奢待

アンケート書いて笑顔でホテル出る

横浜市 川島良子

アツという間の一日アツという間の一年

出勤前行き交う木々にありがとう

東京都 高岡弥生

コラーゲンたっぷり恋をしています

もう既にしてると思う親離れ

ダイエットポキッと折れた骨密度

気がつくとき水災害で年終わる

行員に尋問受けて下ろす金

身にしてみる偶然なんてない事を

岐阜市 平野あずま

孫の旅土産に嬉し長寿著

秋天に寝呆けたような白い月

京都市 清水英旺

遍路杖自分探しの第二章

パソコンのメール行間語らない

カタカナが増えて蹟く新刊書

○か×かたえずつためされ生きている

近道の方を選んだ万歩計

利き足で立つる限り安泰だ

静岡市 渡辺芳子

ごみ袋入れてあるけど捨てられず

秋に寝呆けたような白い月

ボケ防止思いついてはフラダンス

パソコンのメール行間語らない

まだやれるつもりが何とこのだるさ

○か×かたえずつためされ生きている

じゃあまたねホントにいいこの言葉

利き足で立つる限り安泰だ

愛知県 樺嶺志

まあいいかまた一段と書類積む

秋に寝呆けたような白い月

大切と書いて仕舞って失った

パソコンのメール行間語らない

整理とは捨てることだと分かっている

利き足で立つる限り安泰だ

責任をとるべき人がご教訓

第109中部地区 誌上川柳大会

宿題と選者(各2句・読み込み可)

「熱」大西泰世・島田駱舟

「美しい」長島敏子・江畑哲男

「ゆとり」情野千里・川上大輪

「遊ぶ」池さとし・戸川嘉山

参加料 1000円

(定額小為替・発表誌4月号)

締切

平成24年1月31日必着(厳守)

投句先 〒457-0038

名古屋市南区桜本町137

荒川八洲雄

電話 052-811-2347

主催 中日川柳会

中島生々庵句抄

(句集『生々樂天』から昭和五十一年発行)

昭和四十年麻生路郎没後不朽洞会員と共に「川柳塔」を創設、初代主幹として活躍された中島生々庵の句を抜粋して今月号から掲載致します。

中島生々庵(本名蓬太郎)は明治三十一年生まれ(昭和六十一年没)。昭和十四年松坂クラブ川柳部(麻生路郎指導へ入部、続いて不朽洞会員として路郎に師事、昭和十八年不朽洞会理事長となる。同十九年大阪府文芸賞を授与される。

昭和四十二年NHK川柳部門選者、同四十三年山陽新聞読者文芸川柳部選者、四十九年日本川柳協会常任理事となる。小児科の開業医であり、大阪府内科小児科医師会副会長を務める。川柳の他に直原玉青氏の下で南画の筆をとり、小石夫人と共に川柳と絵筆の趣味の両道を歩むこととなる。『川柳塔』誌発刊の昭和四十年十月号から平成十七年七月号まで表紙を描いていた日本南画院会長の直原玉青氏が句集の序文を書いておられる。

昭和十三年

ああ あれがわしの初恋だったらし

小児科へちと気兼ねした肌をぬぎ

癩性の女房シャツにも糊がすぎ

桃われも結わせたしハイヒールもはかせたし

袖丈が丁度丁度と借り羽織

昭和十四年

ノータイのまま馳せつけた悔やみの場

夕刊は初手から下足包む腹

戦いはこれからですぞ子沢山

表札に書いて我が名に一寸惚れ

尋常二年もう父の眼を知っている

内職の手に聞こえてる夕涼み

固まった火鉢の灰に秋を知り

一粒づつ頂くように雨を待ち

大雷雨虹一本を置いて去に

誹風柳多留一篇研究 77

小栗 礎説別解面白し。されど「隠れたり」が苦しいか。
清 同右。

614 殺生ハせぬと四ツ手とはなす也

山口 由昭・小栗 清 吾
伊吹 和男・山田 昭 夫
増田 忠 彦
清 博 美

612 女郎でも買イなと婿を馬鹿にする

山口 入り婿が女房に夜の交わりを拒否されたのである。挙げ句の果てに「女郎でも買いな」と罵倒されたのである。川柳の世界によく出てくる入り婿哀話。

清 賛 買たらハどふすると髻胸をすへ 傍四三

613 月あきるかにして星八隠したり

山口 「月あきるか」は「月あきらか」(安二礼三)の誤刻であり、「文選」魏武帝「短歌行」の「月明らかにして星稀に、鳥鵲南へ飛ぶ」の文句取りである。先人の解として、

これを延享四年(一七五七)八月十五日の江戸城中刃傷事件を詠んだ句ととられている。即ち、細川越中守宗孝が、家紋の九曜星を板倉家の家紋九曜巴と誤認され、板倉修理勝該に大広間で斬りつけられ、翌十六日亡くなった事件である。事件が八月十五日の名月であったことから細川越中守を星で表し、

星の影消て月見ハ闇になり 四二
九ツの星が十五の月にきえ 八六二〇
などの句もある。

しかし、敢えて別解をたてれば、これを吉原の月の紋日と考えられないだろうか。「名月は皓々と照っているのに約束をしていた馴染み客はどこかに隠れて音沙汰がない」というふうにある。

月明らかにして客星稀なり

三九一〇

山口 四ツ手駕籠に乗るのだから行き先は遊里である。しかも、この客僧侶らしい。五戒の一つ「邪淫戒」はすでに破っているが、「殺生だけはしない」と言い訳がましいことを駕籠屋と道中話しているのである。言わずもがなの弁明である。

清 賛 不屈な命衣へつ、むなり 傍三一
医者と化し地獄へはまり火の車 七一六

615 かゝさんにねだつてきなど覗きいひ

山口 覗機関(のぞきからくり)は京阪で「のぞき」と言い、江戸では「からくり」と通称したらしい。

『守貞謄稿』には「三都トモニ、神祭ノ日、或ハ諸仏ノ縁日ニハ、社頭及ビ寺院ノ境内、其他往来繁キ路傍ニ、荷ヒ出シ、児童ニ觀レ之テ錢ヲトル。」とあり、出し物は「お楽久松」「お七吉三」などが語られていたという。

料金は四文から八文と記されている。

句意は縁日などで、取り巻いている子供達に対して「母さんにねだって見物料をもらつておいで」とからくり屋がけしかけているのである。

なんとおもしろかうがとのぞきいひ

六 38

見世先へおろしてのぞきしかられる

一六 30

清 賛。

616 木綿ものつかむと醫女のいとまぢ

山口 醫女は三味線を抱えて辻つじを廻る盲目の旅芸人の一種である。越後から出てくるものが多いというが、招かれると部屋に上がつて歌や三味線を聞かせたらしい。

さて、この「木綿物」が何であるかが判然としない。醫女が着てきた上着のようなものなのか、持ち物の袋のようなものなのか、さでまた、謝礼として貰つたものなのか。いづれにしても、芸が終わつて暇乞いの段になると、目が不自由な故に、忘れ物のないようしつかり掴んでいる、ということなのであらう。

盃は醫女へ廻ると膝へ乗り

明元義一

醫女弾いて仕廻ふと何か探してる

安七義二

伊吹 賛。木綿物は撥袋あたりか。

ばちぶくろかくされてござ手をあわせ

九 37

山田 「木綿もの」の類句は管見の限り総て着る物。従つて、礎「上着のようなもの」説

増田 伊吹氏説の撥袋に賛。

清 小生は荷物を入れた風呂敷包みと考えていたが、山田氏の類句云々とあるにより、やはり衣類と考えるべきか。

617 両だめといつたと聞いて乳をくれず

山口 女房に死なれたか何かの理由で赤ん坊を残され、乳貰いに出るものがいた。また、一方には乳が張りすぎて余っているものもいた。乳貰いに出たものが、感謝できれば良いのに「向こうも乳が余つて困っているのだから両方のためだ」などと口走っている。これを聞いた女は、乳を遣るのをやめたしたのである。

「両為」は両方のためになること。乳貰いの失言である。

乳貰ひの両方よしハ口が過ぎ

明五礼一

両為と母は娘の膝へより

四 17

——これは縁談

清 賛。口は禍の元。

618 二代目のろまで金の番をする

山口 俗に「伊勢屋」と呼ばれるけちな商家の二代目のことを詠んだのであらう。初代が爪に火をとますようにして蓄財したものを二代目の道楽息子が遣うというのが、川柳の世界の常道であるが、この二代目は親父と同じように金の番だけをしていて遣わないのである。きわめて真面目な店の跡取りと思えるが、江戸っ子の美意識からいうと「のろま」なのである。

兄キハのろま弟ハ出て使ひ

一〇二 24

小栗 賛。伊勢屋でなくても、意味は通じるが。

伊吹 同右。

二代めに銀の煙管でぶつつぶし
といったあたりが、江戸っ子のお気に召したのでしょう。

山田 賛。かの伊勢屋の息子にしたつて、

金の番伊勢屋の息子よしにする
というのが江戸。

清 賛。

愛染帖

新家 完司 選

ハープより癒してくれる男前
西宮市 吉井菜々子

(評) やっぱりね。男だつて別嬪さんには癒される。このように冷静に観察できるのは、青臭い感情を超越したオトナの余裕。

豊満がいい夢ニヨリルノアール
札幌市 三浦 強一

(評) スリムとふつくら、どちらが好みかは分かれるところ。女性は瘦せたがるようだが、男性はふつくら党が多いのではないか。

仕舞うのが好きで探してばかりいる
鳥取市 有沢せつ子

(評) 散らかり放題よりも仕舞い込む方が、良いが、探さないと出てこないのは困りもの。一覧表などで収納先を記録しておこう。

だんだんと字がぞんざいになる寒さ
京都市 都倉 求芽

(評) 指先がかじかんで「不本意だが、ぞんざいな字になってしまふ」ということ。決して「ぞんざいに書く」ではない、だろう？

止まるまで立つなとバスのアナウンス
京都市 高島 啓子

(評) 過保護とも思える注意書きやアナウンスは、高齢化社会を象徴しているが、事故が起こつたときの責任回避策でもあるだろう。

この辺りまでは薬と決めて飲む
堺市 奥 時雄

(評) 飲む前までは一応決めている。が、調子が出てくると「もう少しぐらいなら…」と「薬」を超えて「毒」の範囲に入つてしまふ。

七十に見えないようにイヤリング
奈良県 渡辺 富子

(評) イヤリングは不思議な装飾品。小さなものでもおしゃれに見える。イヤリングをすることによつて顔に緊張感が生じるのか？

散歩道大の友達ばかり増え
泉佐野市 稲葉 洋

(評) 散歩させている人と人はあまりなつかないが、犬と犬はすぐに親しくなる。もちろん、中には喧嘩友達もあるだろうが…。

人間も熊もおいでと柿実る
鳥取市 福西 茶子

(評) 柿の木としては、人間も熊も猪も区別などしていいない。よく熟れたおいしい実を、みんなに食べてもらいたいのではないか。

良い事は長く続かず今日は雨
和歌山市 田中 みね

(評) 「禍福は糾える縄の如し」というよう

に福ばかりは続かない。福が続いた反動の「禍」が「雨」で済んだのを幸いとしよう。

大陸の風にくしゃみを二つ三つ
浜松市 岡田 史郎

年金でヒートテックを買つて冬
大阪市 柴本はつは

大家族の頃の名残りのお重箱
堺市 村上 玄也

することはないので何か気忙しい
無党派層聞こえは良いが無関心
和歌山市 武本 碧

三十品目夫婦茶碗が欠けぬよう
退屈な時には来ない長電話
豊中市 水野 黒兎

そよ風がページを繰れぬ電子辞書
咳払いさあ始まるぞ武勇伝
樺原市 安土 理恵

ストレスで太らせたのはあなたです
健康にいいものはもういりません
高槻市 初代 正彦

夜が明けて握手をしても遅くない
秋冷に妻の留守でも鍋にする
池田市 栗田 久子

せめてもの思い岩手の米を買つ
トースター端でみかんでも焼いてみる
奈良市 米田 恭昌

開運の本抱いている無精髭

河内長野市 梶原 弘光
T P P 想定外は禁句だよ

鳥取県 加賀田志延
T P P 解らないけど危険音

和歌山県 森下よりこ
T P P 私の頭では解けぬ

河内長野市 村上 直樹
円高と株価が脳の防腐剤

八尾市 宮崎シマ子
不景気は神様だって直せない

和歌山県 柏原 夕胡
点字ブロックの上に自転車と並ぶ
車椅子が氣を遣つてエレベーター

堺市 加島 由一
立ち飲みでドジョウ論議が盛り上がる

和歌山県 古久保和子
親不孝悔やんで歌う「吾亦紅」

和歌山県 古久保和子
目覚ましより早く目覚めるのも悔し
やめなはれ人を叩いて笑う癖

弘前市 高瀬 霜石
変化球覚えておいて損はない

大阪府 古今堂蕉子
おんなの味方おとこの仇 皮下脂肪

山なりのボール投げ合うようになる
忘れたらええねん頭軽くなる

枚方市 寺川 弘一
禁酒禁煙私を殺すつもりなの

割り勘すると僕には含み益がある

鳥取県 斉尾くにこ
夕焼けを待つて出掛ける散歩道

堺市 宮本かりん
遠回り星のきらめく道歩く

松江市 石橋 芳山
シユワシユワと今日も一日終わりそう

三田市 上垣キヨミ
洗柿も私も干すと甘くなる

和歌山県 福本 英子
故郷へまだ通しない紀勢線

和歌山県 喜田 准一
まだ近けぬらしい風邪引きさすく治る
妻の留守忘れています血糖値

松山市 神野さつこ
太陽に自己主張する百日紅

被災地に海鳴りがして冬が来る
鳥取市 岸本 宏章

運動会足に指令が届かない
岡山県 工藤千代子

君が代の歌詞を忘れたことはない
節電をします九時に寝ています

デパ地下のトイレで着メロが響く
羽曳野市 吉村久仁雄

一円を値切る肉食系の妻
冬服にメタボラインの気が緩む

三田市 久保田千代
あたりまえの顔して朝がやってくる

限界がくるまで夫婦ごっこする

明石市 桃谷 和郎
長生きの家系を妻は喜ばず

悪党も肌身離さず持つおふだ
藤井寺市 太田扶美代

敬老のころがわかりかけてきた
菊と薔薇どちらも公平に褒める

三田市 北野 哲男
温野菜みたいな妻と五十年
法事終え一人で流すセレナーデ

義理堅い人には上げぬ土産物
晩秋を愛しむ命おしむよう

唐津市 樋口 輝夫
自慢すること全然無くて隅にいる

東かがわ市 川崎ひかり
晩秋のゴキブリ私の完勝だ

弘前市 今 愁女
カメ虫が衰弱冬がやってくる

鳥取市 春木圭一郎
幸せの基準を下げて幸せに

一センチ歩幅広げて朝の道
海南市 小谷 小雪

作付の打順に悩む貸農園
河内長野市 坂上 淳司

そこそこの金じゃ介護も受けられぬ
岡崎美知江

下からの目線で楽に生きている
大阪府 岩崎 公誠

唐津市 坂本 蜂朗
帰省した孫が覚えたドッコイシヨ

神戸市 山田婦美子
いのこづちつき放題の孫の服

四條畷市 吉岡 修
文化祭の一面知らされる

海南市 堂上 泰女
誉めすぎると拗ねる小二の自尊心

堺市 近藤 治子
自分でポタンちくはく三歳児

豊中市 石橋 優明
着るみに泣かなくなつて子は五歳

鳥取県 西谷 悦子
小銭見る眼に緊張感がない

高槻市 片山かずお
遊んでるときは足腰傷まない

藤山 酒井 真由
ちよい悪の行きつくところ好好爺

松江市 三島 淞丘
仕分けしても国はどムダのない家計

高槻市 島田千鶴子
娘に弱み見せたくなくて薄化粧

三田市 堀 正和
恋をして演歌がわかるようになる

奈良市 大久保真澄
気配りもいいけどちよつと放つといて

米子市 成田 公一
KYに水をさぶりとかけてやれ

藤井寺市 鈴木いさお
テレビ観ながら左の耳で愚痴を聞く

尼崎市 長浜 美龍
咳コンコおばちゃんハイと踊くれる

富山市 有澤 嘉晃
権利だがずるい気がする黙秘権

大阪市 笠嶋 恵美
よしよしと鏡言うまで化粧する

香南市 桑名 孝雄
よそ行きの顔でナブキン膝に置く

三田市 田中 章子
田楽の数だけゴミが増えていく

田辺市 岡本 昇
若いものに早寝早起きなら負けん

大阪市 神夏磯典子
したたかそうだ防護服信じてる

奈良市 辻内げんえい
親族に八十九十多いこと

鳥取市 吉田 弘子
娘に渡すヘソクリ損と思わぬ

三田市 福田 好文
ママだけが分かる赤子の独り言

芦屋市 黒田 能子
エンディングノートまだまだ先延ばし

松原市 市川 雄太
気がつけばもう二十四速いなあ

大阪市 谷口 義
ホテルでは一番安いのがカレー

河内長野市 松岡 篤
居酒屋でハイテンションは姫の声

大阪市 坂 裕之
缶ビールあと一本でまたバトル

鳥取市 永原 昌鼓
格言の通り子どもに付いて行く

京都市 坪井 孝一
ロボットも人間並に故障する

寝屋川市 森 西
白髪になってぶりっこやめました

大阪市 江島谷勝弘
腹の虫おさまらんこと多すぎる

堺市 志田 千代
物故者になるまでは振込み用紙

堺市 内藤 憲彦
四季報の儲け話に乗りません

奈良市 加門 萌子
犬連れて立ち話なら得意です

鳥取県 竹信 照彦
前向きに生きると時も速く過ぎ

岸和田市 中岡 香代
誠意あるマッサージ機に日々感謝

寝屋川市 小谷 滋彦
地球儀を回してエコの旅とする

八尾市 村上ミツ子
二択です長生きしたいしなくない

岸和田市 増田 隆昭
風邪熱の舌がビールを拒絶する

倉吉市 野口 節子
脳の皺五七五に支えられ

宇部市 平田 実男
川柳がカンフル剤となる登寿

貝塚市 石田ひろ子
川柳に出合い長生きする覚悟

大阪市 太田としお
自然は凄いい同じものが二つ無い

紀の川市 北山 絹子
ボーナスの出ない夫が起きてくる

茨木市 藤井 正雄
朝ドラのテーマソングと飲む珈琲

三田市 上田ひとみ
丑どしの夫はとてよく動く

尼崎市 市坪 武臣
満月を揺らしてつかる露天風呂

大阪府 高木 道子
冬の蠅ポットの上が指定席

大阪市 奥村 五月
酒二合それも減らせとヤボな医者

西予市 黒田 茂代
医者嫌いでも診察券が増えてくる

堺市 羽田野洋介
軽い口バランスをとる重い腰

京都市 樹本 宏子
うやむやな食事で終る日曜日

奈良市 矢野 良一
路地裏に昭和が残る純喫茶

大阪市 伏見 雅明
口笛は童謡になる妻の留守

鳥取市 前田 風花
秋刀魚でも溺れ死ぬことありますか

高知市 小澤 幸泉
耳元で不況の嵐鳴り響く

大阪市 榎尾 奏子
膿全部出せば小さい私です

堺市 荻野 像山
同窓会打ち切る歳になりにけり

大阪府 小栢こずえ
吾子と居てただそれだけで良夜です

和歌山市 磯部 義雄
黒枠が似合う写真を探し出す

篠山市 円増 純子
つくづくと古い見詰め合うティータイム

高槻市 乙倉 武史
噛み殺す欠伸法律には触れぬ

日高市 根岸 方子
専業の主婦を悩ます納税期

高槻市 佐甲 昭二
雨あがり約束事を思い出す

篠山市 沢山 啓子
一握り黒豆放る二合炊き

亀岡市 井上 森生
ゆず風呂に和む仲間と柚子の里

大阪市 大川 桃花
チャンスになって欲しいと祈る子のピンチ

尼崎市 春城 年代
昭和史で過ごしたことの幸不幸

鳥取県 石谷美恵子
母の目に娘のミジン切りまだ荒い

大洲市 中居 善信
飯の世とはよく言ったもの皆通く

米子市 中原 章子
強烈に刻み込まれている津波

江南市 脇田 雅美
嫁姑遠慮忘れて丸く住む

岸和田市 森元ふみよ
旨い店看板ボロの夫婦店

八尾市 田邊 浩三
マイホーム妻と熊手を買いにゆく

豊中市 松尾美智代
浅草へどじょうを食べに行つただけ

富田林市 山野 寿之
円高で闊歩してきたヨーロッパ

堺市 山本 半銭
一眠りもう着陸の軽い旅

藤井寺市 俣野登志子
小さな罪重ねていつか罰当たる

大阪市 近藤 正
芋粥に梅干し沈めはつかほか

倉吉市 山中 康子
忘れるという有り難い思し召し

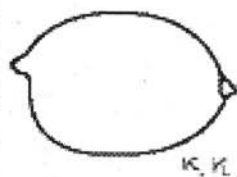
河内長野市 辻村 ヒロ
長寿には腹八分目明日から

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)

(投句 738句)



「ぜいたく」 富士慕情選

ビールだけほんまの物を飲んでいる
産みたての卵で玉子かけごはん
パンの耳あつさり捨てるうちの嫁
ブランドが俄セレブの貌にする
ぜいたくなドレスに合わせ身を削る
ジーンズをわざと破って闊歩する
人よりも高価な服を大が着る
惜しみなく贅沢してる虚栄心
ぜいたくのつけがまわって火の車
ぜいたくな猫で診察券もち
温泉と昇る朝日をひとり占め
ぜい沢のあとに財布が悔いている
ぜいたくがゴミ袋から顔を出す
チンだけのカレー豪華な皿に盛る
京料理盛った器は魯山人

堺市	大隅	克博
大阪市	栃尾	奏子
和歌山市	柏原	夕胡
豊橋市	藤田	千休
黒石市	相馬	一花
大阪市	田浦	實
鳥取市	有沢せつ子	
神戸市	山口	光久
神戸市	山根	弘子
鳥取県	石谷美恵子	
さいたま市	星野	育子
羽曳野市	吉村久仁雄	
高槻市	佐甲	昭二
神戸市	山崎	武彦
茨木市	島田	誠一

「ぜいたく」 池 森子選

ソムリエになつたお屠蘇の三が日
コーヒ店私のホットステーション
リニユールオール電化でセキユリテイ
百選の水での洗車こそばゆい
質素倹約ぜいたくは口にせず
倹約の文字さえ忘れられている
給料日普通のビール買ってくる
晩酌には米麦芽がそろつてる
染付けに目刺し一尾のせ月見酒
チンだけのカレー豪華な皿に盛る
松葉蟹一匹食べた腹の虫
飽食に慣れても老母のにぎりめし
平凡を謳歌している飯茶碗
人並みの贅新米の塩にぎり
ぜいたくな話にのらぬ割烹着

唐津市	仁部	四郎
神戸市	白川	淑子
大阪市	津守	柳伸
高槻市	富田	美義
大阪市	鶴田	遠野
香南市	桑名	孝雄
大阪市	井丸	昌紀
八尾市	田邊	浩三
弘前市	稲見	則彦
神戸市	山崎	武彦
大阪市	神夏磯典子	
大阪市	小泉ひさ乃	
弘前市	高瀬	霜石
富田林市	山野	寿之
吹田市	須磨	活恵

松茸を焼いて煙に噓せている
お腹一杯食べて貧しくなる心
ぜいたくは目覚しの無い朝の床
被災地を見ればぜいたくなど言えぬ
震災に食の驕りを質される
ぜいたくの付け原究に諭される
警沢に空気の吸える町に住む
ボクの家別荘にしているつばめ
美味しいと聞けばホテルの食べ歩き
ゆつくりと一日かけて本を読む
キラキラとああ新米の握り飯
ぜいたくに馴れて誤る羅針盤
ぜいたくに馴れてしまった火よ水よ
たつぷりと棚田の月を浴びた米
ぜいたくもなんだかつまらなくなった
繕った靴下でいいお母さん
ぜいたくは言うまい痛いところがない
ぜいたくは言わぬ若さが欲しいだけ
ひもじさを知らぬ世代の食べ残し
飢餓の子にすまんと思う食べ残し
ぜいたくに慣れて感謝を忘れてる
あの頃はぜいたくだった白い飯
爪に火をともした頃を忘れない

堺市	澤井 敏治
松江市	松本 文子
米子市	竹村紀の治
松江市	三島 裕丘
塩竈市	木田比呂朗
鳥取市	岸本 宏章
福島県	七ツ森客山
尼崎市	藤岡 りこ
箕面市	出口セツ子
鳥取市	春木圭一郎
河内長野市	坂上 淳司
和歌山市	福井 菜摘
米子市	政岡未延子
和歌山市	古久保和子
鳥取市	夏目 一粋
泉大津市	助川 和美
豊中市	江見 見清
和歌山市	上田 紀子
札幌市	佐藤登美子
鳥取市	倉益 一瑠
尼崎市	小池 幸子
鳥根県	伊藤 寿美
東大阪市	佐々木満作

ぜいたくな悩み青竹踏みながら
ぜいたくに慣れてまだまだ上を見る
ぜいたくが過ぎて弾けたシャボン玉
ケータイを持たぬ警沢だつてある
ジーンズをわざと破つて闊歩する
ブランドが俄セレブの貌にする
ぜいたくの報いがいつも秋にくる
警沢な暮し足元見失う
贅を尽していても埋まらぬ穴がある
ぜいたくは敵麦飯はもう食えず
ほどほどのぜいたく足も手も動く
気がねなく我が家で暮らす小さな贅
ぜいたくは敵だと母の筑前煮
ぜいたくだなあ妻の笑顔とハムエッグ
産みだての卵で玉子かけごはん
後戻り既に出来ない贅の味
年金に生きてぜいたく省く輩
年金の枠で自由を食べ尽くす
ぜいたくに使える時間底が見え
ぜいたくの無駄なところに甘い蜜
夫留守ひとり時間を持て余す
ゆつくりと一日かけて本を読む
二十四時全て私の時間です

大阪市	谷口 義
倉吉市	前田喜美子
和歌山市	武本 碧
豊中市	藤井 則彦
大阪市	田浦 實
豊橋市	藤田 千休
藤井寺市	太田扶美代
岩出市	藤原はのか
倉吉市	野口 節子
鳥取市	加藤 茶人
鳥取県	羽津川公乃
鳥取県	佐伯 やえ
尼崎市	長浜 美籠
福島県	七ツ森客山
大阪市	栃尾 奏子
鳥取県	吉野いさお
弘前市	岡本 花匠
枚方市	伊達 郁夫
神戸市	大島まさる
大阪府	初山 隆盛
鳥取県	加賀田志延
鳥取市	春木圭一郎
三田市	上垣キヨミ

味極め辿り着いたという茶漬け
飽食の皿がニヤツと笑い出す

木枯しへ温い便座が待っている
最高のぜいたく妻の膝枕

鳥取県鬼太郎がいるコナンいる

ぜいたくな暮らしも病には勝てぬ
記念日に妻と食べてる時価の寿司

幸せと思える時を生きている

ぜいたくな話にのらぬ割事着

玉の輿ぜいたくな愚痴こぼしてる
花のある暮らしぜいたくだと思ふ

ふる里に元氣な父母が居てくれる

これ以上のぜいたくはない母の味

ぜいたくの報いがいつも秋にくる

紅葉と一服のお茶銘菓付き

究極の贅沢なたつて平和

平凡を謳歌している飯茶碗

生きていることがぜいたくだと思ふ

居ながらにして四季を食う贅沢さ

秀句

衣食住足りて文句を言っている

銀シャリがぜいたくだった焼け野原

総身にぜいたくを着て飢えている

出雲市 竹泊ちかし

倉吉市 牧野 芳光

橿原市 安土 理恵

宇部市 平田 実男

鳥取県 音尾くにこ

岸和田市 増田 隆昭

大阪市 鶴田 遠野

神戸市 大島まさる

吹田市 須磨 活恵

大阪市 榎本日の出

大和高田市 鍛原 千里

弘前市 今 愁女

篠山市 遠山 可住

藤井寺市 太田扶美代

京都市 榎本 宏子

大阪府 米澤 俣子

弘前市 高瀬 霜石

豊中市 松尾美智代

高槻市 富田 保子

大阪市 古今堂蕉子

岐阜市 平野あずま

紀の川市 宇野 幹子

ぜいたくなドレスに合わせ身を削る
贅沢が居座っているくらしむき

朝風呂に入り仏に手を合わせる

現住所のある細やかな幸せよ

味極め辿り着いたという茶漬け

一握りの民が地球の富を食い

ぜいたくは敵だと青春持つてかれ

ぜいたくを極め尽くしていま孤独

シングルになつてぜいたく身に付ける

贅沢は敵だ天から父母の声

かざろいを待つ窓がある贅がある

ぜいたくに一人笑いをして居ます

ぜいたくもなんだかつまらなくなつた

月一度一人特上食べに行く

飽食の皿がニヤツと笑い出す

ぜいたくがゴミ袋から顔を出す

こころ豊かにぜいたくな深呼吸

ありがとう伝えたい人いてくれる

ぜいたくに慣れてススキが美しい

秀句

少ないが子が三人と年金と

24色で描くぜいたくな暮らしの絵

究極の贅沢なたつて平和

黒石市 相馬 一花

美作市 小林 妻子

和歌山市 柏原 夕胡

西宮市 山本 義子

出雲市 竹泊ちかし

富田林市 中崎 深雪

尼崎市 春城 年代

藤井寺市 鈴木いさお

堺市 村上 玄也

松江市 松本 文字

寝屋川市 籠島 恵子

寝屋川市 太田とし子

鳥取市 夏目 一粹

橿原市 居谷真理子

倉吉市 牧野 芳光

高槻市 佐甲 昭二

山口市 中前 幸子

寝屋川市 森 茜

和歌山市 坂部かずみ

八尾市 宮崎シマ子

枚方市 海老池 洋

大阪府 米澤 俣子

— 小島 蘭 幸 50 句 —

モーニングコーヒー開志伏せておく
朝の風呂いざ出陣の日の男
一年生の帽子よ小さい旅人よ
初恋も昭和もいつまでも熱い
輝いているか傷だらけの鱗
なんにもない古い町並みだけがある
鳥になれなかったわたしがいる野原
あなたにも僕にもきつとある翼
森の暗さは父のやさしさだと思ふ
亡父の靴のまわりで虫が鳴いている
暗証番号いつか忘れるときが来る
縄飛びを始めた妻にあるいくさ
長女二女我が行末の波高し
葦揺れる十七歳の葦揺れる
珈琲よ葦は揺れてるほうがよい
犬と僕静かに本を読んでいる
雨が降っても座り羅漢になつて飲む
障子一枚父の威厳をなつかしむ
師を越えることなど出来ず弔詞読む
映画館が消えた銭湯が消えた
食べたらず眠る犬は哲学もっている
ジャングルジムの一番上にいる姪だ
そんなに僕はマンボウに似てますか
鯛の粗男ひとりの昼に炊く
一喝をしてから眠れなくなつた

退職後毎日髭を剃つてるか
野の鼠いい眼をしてるではないか
羊の瞳の中の炎を見ましたか
捨てたものがいつか空から降ってくる
ふとん干す妻の小さな力瘤
自由人ですか宇宙人ですか
絵手紙が今日も山脈越えてくる
振袖を着ると耳まで美しい
風紋よいつもドキドキして生きる
檸檬忌と名付けて夢を語らんか
風になるために生まれて来たようだ
今日は一日おふくろさんの運転手
情熱と情熱握手して静か
動物園のキリンの首に雪が降る
椅子をくださいい神を座らせたのです
おふくろも観音様もいい耳だ
バージンロードをヨロヨロ歩く僕でした
精神力だけで立つてたのか葦よ
ワンカップふたつ祈りの中に置く
葉芽花芽母はひとりが好きと言う
僕も孫もご先祖様の眉をもつ
一本杉はいつも笑っている噂
花吹雪ふたりの一歩しかと見た
水平線キリリと孫の名は航^{わたる}
合掌をしてひとつだけいだいた

織る

政岡未延子選



カタンコトン一生ものの命織る
織り上げるまではそおとしと鶴
もつれ糸たどつてみれば同じ織り
晩学の苦勞して織る五七五
織ってきた暮し根こそき消えうせる
被災地へ世界の絆織り込まれ
ふる里は錦織り成す山の裾
自然美をこよなく織って秋深む
紅葉が織りなす山の嶺は雪
ふるさとの彩も織り込む手漉き和紙
布織機女工が泣いた跡がある
織物が支えた昭和遠くなり
織姫の涙が染みる峠道
七色の糸で家族の夢を織る
人生の苦勞実った錦織
人形を甦らせる博多織
老い楽し花鳥風月綾を織る
余生いま婦唱夫随で夢を織る
夢は夢だと織り糸別仕立て
意外にも波長が合つて布を織る
亡き夫と描いた余生今日も織る
さて今年どんな世を織るコミュニティー

(白)淑子
(泰)女
(嘉)見
(勝)視
(ルイ)子
(堅)坊
(倫)子
(ゆき)の
(智)恵
(正)和
(毅)一
(准)一
(あず)ま
(孝)子
(山)弘子
(唯)教
(敏)治
(淑)丘
(孔)美子
(柳)歩
(俊)美恵子
(倫)洋

夢を織る希望の糸を足しながら
手織りだと野暮なネクタイ自慢する
それぞれに未来を織っている子供
手前味噌少し織り交ぜ孫自慢
きゅつきゅとお蚕が鳴く黄八丈
織物の色あざやかな京時雨
織り上げる構図が違う嫁姑
三世代織りなす柄の賑やかさ
内と外上手に織って世間体
はめことは織り込み祝辞できあがる
身勝手な理屈を織って浮いている
綴帳に神楽織り込む出雲国
綴糸の織り込みが縁深くなる
ときどきは縫れてきみと織る時間

佳
織り上げた自慢の帯に縛られる
思ひ出を織る涙と風を混ぜながら
ふる里へ錦織るのも老いて無理
国が織る筈は荒い目をしてる
小巾刺し老母はゆつくり明日を織る

人
妥協案玉虫色に織り上がる
地
無言でも西陣織というラベル
虹を織るみんな節くれだった指
軸
せいてはならぬ織りゆく時間残つてる

直
比呂朋
哲男
まみ子
(田)章子
(宮)弥生
美義
ヒデコ
淳
せつ子
光久
注湖
遡行
一兆
公一
寒之
文子
一風
芳山
慕情
宏章
ちかし
高瀬霜石

いちばん

柿花 和夫選



フクシマの心配子等の未来です
まだ早い 核心はいちばん後だ
賛成といちばん先に言うサクラ
いちばんになつて気付いた井戸の中
老いました いちばん風呂は遠慮する
男の沽券せめて一番風呂くらい
鼻の差でトップ馬券にチューをする
寡黙だが一番棺を持つ男
いちばんに馳せてこそあれ人の情
宴会の余興トップに指名され
捨てるのが いちばんいいが捨てられぬ
いちばんは落ち着かないとあかんたれ
いちばんになつて広野に立ち竦み
天国に一番近い宇宙船
引出しのいちばん底にある内緒
真つ先に逃げる足なら持つている
先に寝るのは声の大きい奴
いちばんは無理でも好きでいてほしい
いちばんを掴んだはずの赤い糸
リーダーに向いちゃいませんハムレット
風除けにされた先頭力尽く
いちばんが好きで仲間疎まれる

(方)子
(孔)美子
(俊)美恵子
(倫)洋
(弘)子
(孝)雄
(強)一
(悦)男
(政)勝
(二)健
(直)二
(堅)坊
(志)華子
(花)順子
(森)生
(俊)美恵子
(霜)石
(義)雄
(比)呂朋

一番の苦勞を知らぬ雑魚の中
生きていていばんいい日いつですか

公 子
雄 太

一番が二人居るからややこしい
馬鹿になるこいちはんの勝負時

捷 也

一番でなくていい自己新記録
応援をいばん貰う転んだ子

きつこ
久美子

わたくしの子だいいばんは望めまい
いちはんになれる筈ないDNA

一 花
一 花

手を焼いた子がいいばんの親思い
いちはんの背中が見える位置で良い

(白)淑子
(白)紀子

一番の敵と思つていた味方
権力にいちはん遠い位置で吠え

扶美代
週 行

平凡がいちはんなどと言うものの
いちはんと思う天狗のナルシスト

朝 子
惠 美

いちはんの親友だから距離をおく
佳

宏 章
客 山

一番星街のネオンが気に入らぬ
一の糸切れてみだらになる小指

(白)としお
千 休

さしあたり一番困るのはトイレ
早く芽を出せば摘まれる一番茶

正 彦

体操で一番好きな深呼吸
人

ヒデコ

朝刊のバイクで村の夜が明ける
地

輝 夫

無事な顔見ていちはんに出る小言
天

西谷悦子

一番もヒリもみな汗かいている
軸

一番の自慢は生きてることだ

べつたり

藤岡ヒデコ選



忘れない母の手作りおはぎ味
添寝するママもいつしか夢の国 (白)

半 德
幸 子

べつたりは嫌いほつたらかしも嫌
トリストにべつたり朝を塗つて見る

時 雄
芳 山

納豆のねばりが好きな健康児
たまらんわコレステロールべつたりと

花 匠
芳 山

若そうに見えてべつたり貼り葉
年金の目減りに税がへばりつき

(白)由美子
雅 明

お姑さんがべつたりベッドで五年間
ベッタリのタマに亭主が妬いている

柳 弘
深 雪

一番手がべつたりついて気が抜けぬ
白かぶのべつたり漬かり京野菜

恭 昌
愁 女

べつたりと付いて離れぬ欲の皮
べつたりと座り直して長電話

(白)としお
正 雄

過労死の背にべつたりと棒グラフ
千杜札貼つて御利益呼び寄せる

幹 子
政 勝

わたくしにべつたりついたやまいだれ
遣伝子にべつたり添うた子の仕草

活 恵
惠 美

あれ以来べつたりついた濡れ落葉
べつたりを避けるスーパの冷める距離

(白)孝子
美 子

拗らせた風邪がべつたりつきまとう
べつたりと大阪人になった妻

朝 子
ヒ 口

べつたりと貧乏神が来て座る
べつたりと座り動けぬ震度三

松 丘
倫 子

べつたりの親から雛が飛び立てぬ
夫より猫語のわかる妻という

(白)千代
強 一

教科書に墨べつたりの敗戦史
鯛の骨しゃぶりべつたり酔い痴れる

慕 情
保 子

べつたりと熊が座っている畑
寄り添いが安定剤となる老後

セツ子

べつたりと山河を汚すシーベルト
べつたりと塗つて心を視かせぬ

(白)いさお
扶美代

べつたりの女に油断してしまふ
ひと彩を足すとべつたりする熟女

(白)順子
美恵子

ナンバーツべつたり従いてくる焦り
べつたりという手もあつた粘り勝ち

ばつは

音程が狂う弱みがべつたりと
方向音痴夫の傍を離れない

森 生

人のエゴ青い地球にこびり付く
いとおしいべつたり手垢ついた辞書

(白)弘子
富 子

川柳にべつたり漬かるわが余生
疎ましいいとおしいとも思う影

菜 摘
堅 坊

わたくしの溝に溜まっているヘドロ
有難う夫婦茶碗はまだ無疵

千代子

べつたりの影は味方と信じてる
軸

樋口輝夫

天

霜 石

地

千代子

天

霜 石

地

千代子

天

霜 石

初歩教室

題 — 脚

鈴木公弘

足と脚との違いについて質問がありましたので、お答えします。足は足くびが先、脚は太ももから下を指します。

多くの方が馬脚と脚線美を描いておられました。誰でも考え付きそうな言葉を使っているのは芸がありません。新しい着想に努めましょう。

【添削句】

原 しっかりと土台に脚を架けておく 義雄

添 しっかりと土台に足を着けておく

原 脚くせにシューズしっかり合ってきた 正二

添 足癖にシューズしっかり合ってきた

原 白蟻が住みつき予算脚が出る 美紗子

添 白蟻が住みつき予算足が出る

以上は「足」の句でした。

原 脚足が短かく急かす秋の暮れ 孝明

添 出た脚が短く急かす秋の暮れ

原 片減りの靴気にしながら脚かばう 俊子

添 片減りの靴を気にして脚かばう

原 朝日背に健脚たのしむ老夫婦 (山) 久子

添 朝日背に健脚たのし老夫婦

原 雨脚とかけっこ抜かれてずぶぬれに 吉太郎

添 雨脚とかけっこ吹かれずぶぬれに

原 大根役者言われないよう馬の脚 律子

添 大根と言わせないよう馬の脚

原 脚線美見せて貰わすよ試乗会 弘泰

添 脚線美見せて貰わせる試乗会

原 脚力を鍛え余生を花咲かす 紀雄

添 脚力を鍛え余生に花咲かす

原 定年へ妻三脚の紐ゆるめ 菜摘

添 定年へ妻三脚の紐ゆるめ

原 修理中机脚折る気が抜けた ミヨノ

添 修理する机の脚が折れ失意

一度に多くのことを言おうとすれば「起承転結」に無理がきて、まとまらなくなり

ます。添削ではできるだけ作者の意図に添

うよう心がけますが、結局難しい言葉に置

き換えざるをえません。したがって、状態

や心境をすべて言ってしまうと、修理する

ことが、折れたことか、気が抜けたことか

に絞って、描いてくださったほうがいいと

思います。

原 我は大男の脚となり杖となり (安) 由美子

できれば定型の五七五で描くことから始

めましょう。また、この場合は脚より足を

使うほうがより良いと思います。

【他人事の指摘になつてしまった句】

原 真央ちゃん的美脚に保険金 エミ

添 真央ちゃん的美脚に保険金をかけ

添削句は、作者が他人の脚に保険金を掛

けるなど、読み方によっては大変失礼、か

つ、犯罪まがいの句にしました(現実には

ありません)ので、一例と考えてください。

原 八頭身後姿が眼を集め 和幸

添 八頭身の後ろ姿に目がとまる

原 脚光を浴びたスターが忘れられ 憲

添 脚光を浴びたスターも忘れられ

「も」とすることによつて、「やがて私

も忘れられよう」という切なさが描けます。

原 ムチムチのアンヨで地上初歩き ふみ子

お孫さんの事でしたら、状況をそのまま

書かず、感動を描くべきです。

原 脚力でコースが変わる散歩道 英男

添 脚力に合わせて変える散歩道

原 一脚欠け家の風向き変えていく 温子

添 脚一本欠け家風の向き変わる

原 Kポツポツ惜しみなく出す脚線美 きつこ

添 Kポツポツ惜しみなく観る脚線美

原 誕生日五脚揃いの碗目覚め (俵) 玲子

添 誕生日五脚揃いの碗を出す

原 八頭身脚組み座わる満員車 開子

添 満員車脚組み人が邪魔になる

原 三脚にのせてチャンスをねらつて こそえ

添三脚にのせてシャッターチャンス待ち

原渡り鳥旅脚伸ばす秋の空 勝治

添秋空に旅足延ばす渡り鳥

原飢え知らず闊歩している脚線美 起世子

添飢え知らぬ子ら闊歩する脚線美

原夕暮れの雨の坂道足とられ 記久乃

この場合の「あし」はこの「足」が正解です。「脚」の「あし」になっていない点にご留意ください。

原市民マラソン健脚願う道祖神 (編) 則彦

添道祖神この健脚を褒めてくれ

思いがたくさんあって、結局、作者の位置が見えなくなっています。

【入選句】

松茸取り丈夫な脚がよく探る

大見得を切っても所詮馬の脚 寒之

脚が向く明日香の里の深秋に 洋一

足が向くという使い方が良いでしょう。

長い脚でんと電車で気にもせず 敏治

長い脚くの字だんだんハの字書く 安子

以上の二句は、作者が長い脚の持ち主なのだろうと推察しました。

迫る追い尺取虫の脚の中 道子

できれば幅とお書きください。

○脚の父が歩いてきた轍 幹子

○脚も父も「流れます」ので、ご留意ください。

知らぬ間に老いが脚から忍び込む

電球と脚立を見ては夫想う

医者の言う良くは成らない脚鍛え

並足の夫に合わず馬の脚

気取ったらたちまち忍び寄る馬脚

三脚が支えた父の大きな樹

冬本番大のあまえる冷えた足

「足」と「脚」との違いをしっかりと押さえてください。

かくし芸ライディングスの脚線美

ハイドウドウババのお馬の温い脚

脚力に悲鳴をあげる膝小僧

ご苦労さんよう頑張ってくれた脚

脚気など病気でないと動員令

ゆつくりも早足もする脚がある

人工骨の脚で大地を踏みしめる

夕焼けの長い影追うケンケンパ

坂道が健脚作る街に住む

「坂道に健脚もろう町に住む」

脚本に無いこと独り歩きして

「脚本に無いこと独り歩きする」

脚光を浴びたことだけ切り抜いた

「脚光を浴びたことだけ撮ってある」

健康の元まず脚を鍛えよう

縁の下力持ちだよイスの脚

反古を丸めてはうる机の脚の下

魅せられたタンゴの中の脚さばき

治子

妙子

健二

孝代

志延

よしみ

冷子

宏之

ひろ子

武臣

(白) 淑子

まさる

智加恵

美知江

(編) 節子

利子

篤

弘光

秋星

雄太

真由

真砂子

冬囲い脚立の上で武者振い

正確には「武者震い」です。

寒く正しい美脚めざしてはくタイツ

食べ放題ただ黙黙と蟹の脚

【佳句】

ロボットにならないように歩く脚

脚色の多い話は鼻で聞く

最期までしかと立ちたい脚二本

猿芝居馬脚を期待する棧敷

口だけは脚力ほどに衰えず

政権の失脚狙う野党の目

学校の調節出来ぬ椅子の脚

脚に意味こんなにあつた広辞苑

脚本にアドリブ乗せて磨く芸

速い脚先祖は飛脚だったかも

【今月の推せん句】

橋脚に山野の呻き声がする

橋脚を刺された山野は悲しいのです。

蟹股にブーツ合わせる難しさ

そうでなくとも簡単には履けないブーツ

なにがニマタとは……

脚注を追ひなるとどう思う秋

意味深長な季節を使って成功しました。

【私の句】

やまびこの脚が三段跳びをする

幽霊の脚にソックス穿かせよう

(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

登美子

(高) 弥生

久美子

一子

真澄

堅坊

一兆

一泉

(後) 美恵子

宏造

のり子

志郎

(中) 章子

楠原 富子

小谷 滋彦

丸山 孔一

登美子

秀句鑑賞

同人吟 三好專平

—12月号から

商魂が脱原発を許すまい

古手川 光

仰せつかつてから大堪能衆堂へ能を観に行

った。世阿弥の「風姿花伝」に

「上手は下手の手本、下手は上手の手本」ということばがある。上手な人から学ぶのは勿論、どんな初心者の演技にもキラリと光る一途な美しさがある、そこから上手は学ばねばならぬ、というのである。

私は晩学で柳歴も浅く、初心である。上手な人の句からしっかりと学んでゆきたいと思

っている。

もう我慢することはない泣きなさい

加島 由一

庶民の一生は、考えてみればたいいて我慢我慢に尽きるのではないか。私なども戦時中はお国のために「質素儉約」を強いられ、戦後は食べるものはろくになく、飢え死に寸前。母は赤痢に苦しんだ。今回の災害でも、「節電」。急に冷えこんできて寒い。泣くにも泣けないのだけれども、泣く以外にどうしようもない。「泣きなさい」とはうがったはげま

しである。涙が出なくなるまで泣いてみたい。

ロスタイムこの上望むものは無い

秋元 てる

老人が邪魔者扱いされるようになってきた。高齢がもてはやされる時代は終わったようである。しかし高齢化はすすみ、百歳も稀ではない。「このお金はどうするのですか？」と金さん銀さんに尋ねたら「老後のために貯金します」と答えて、みんな唖った。私も八十歳になったが、ここまで生きさせていただいたことに感謝しなければなるまい。

校則を破り仲間にしてもらう

西川 無限

煙草を吸い、酒を呑み、喧嘩をし、遊郭に通い、とにかくしたい放題であった。それが許される時代を生きぬいてきた。藤本義一はポン引きまでしたという。級友であったがサボって顔を見たことがない。いまでも同じである。ちがうのは、学校を出ても仕事はない、金もない、恋人もない。まじめ人間は引きこもるよりない。餓鬼大将の時代が、今となつてはなつかしい。

チェルノブイリ事故後も、原発の建設はつづいた。「安全神話」である。「新幹線に事故はない」という驕りが生んだ悲劇。すでに放射能汚染は関西地域にまで及ぼうとしている。核抑止の名目で「核競走」がはじまり、揚句の果てに、処理に困った列強が売りに出た。原発を押しつけられ、日本は断らずに受け入れた。「むざんやな申の下のきりぎりす」(芭蕉)

どうしても妻には言えぬ理想郷

牧野 芳光

毎日がみがみと怒鳴られ、うつとうしいが、さりとて反発することもできぬような、脛に傷を持つ男。私も酒に狂っていた若い時代がある。職場から帰ると、閻魔大王のような顔をして妻が待ちかまえている。「お酒と私とどっちが大事なの！」頭が上がらない。酔いにまかせて「実家に帰れ」とわめく。本当はさびしい。「どっかええとこないか」

あなたにも笑みを送った罪がある

伊達 郁夫

「別れる切れるなんて殺生や」と惚れた弱み。人間みんな恋に生きて死ぬ。唐の玄宗皇帝すら楊貴妃の美しさには勝てなかった。傾

国という。恋は無限の罪をつくり続ける。年齢にも地位にも関係はない。和歌山の紀久子さんは紫色の恋をしてます今八十路と詠む。

ひまわりの絵ハガキにある青い空

藤岡りこ

ゴッホのひまわりの烈しさではない。ゴッホはアルコールに溺れ早世した。三十七歳だった。普通の人は、あの大きなヒマワリに圧倒され、夏を実感する。そのむこうに青い空があり、夢がある。夢に生きているのはチルチルミチルばかりではない。

マスコミの網すり抜けてゆく泥鰌

堂上泰女

この句が時事詠というのだから驚く。「泥鰌」はいまの首相の渾名である。昔、中学時代、先生に「バケツ」とか「ゲタ」とか「タコ」とか渾名をつけてさわいだ記憶がある。

のらりくらりとして要領を得ない。「考えおきます」だけなので、国民はイライラしてくる。本音はどうなのかあやしい。なまくら坊主の方がましである。

声かけて育てた花に笑みがある

岸本宏章

丹誠をこめてつくと、どんな花でも立派に咲く。野菜、米しかり。植物は人間のいつくしみに応えてくれる。平家落人の部落をた

ずねたことがある。急斜面に、黄・赤・白のすばらしい菊が咲いていた。

人を育てるコツも、老人介護の仕事も同じであろう。「うんうん」と何でも聞いて大切にしていた義母は、九十三歳で仏のような顔になり「ありがとう」と言って死んでいった。その笑顔がまた私を支えてくれている。

まず一步後はなんとかなろうだろう

小川 てるみ

この楽天性こそ、かけがえのない人間の知恵というものだろう。くよくよしていても何にも変わりはない。ところが、この一步が曲者である。陸上の100メートルでは、スタート寸前に恐怖心がおこると記録は出ないという。無心の大切さである。「残高ゼロのカードを持ち歩く」(井蛙)という前向きな達観を得ていない私であるが。

全員をロボットにして社が伸びる

坪井孝一

コンピュータ万能社会は、非人間的要素が強い。マニュアル的人間も増えてきた。人間が機械の奴隷になる。

命令一下、有無を言わず働かされる。反抗する奴はクビである。企業のために一生懸命に働いた終身雇用性の良さが見直されている。

ああ、チャップリンは天才である。高くない鼻の先から日焼する

原 さよ子

作者には悪いけれども、思わず笑ってしまった。さぞや不満でありましょう。

カタカナにひらがなのルビ打って読み

太田 昭

日本語ほどすばらしい言語はないと思っている。文字が豊富である。漢字、ひらがな、カタカナ。おまけに外来語もそのまま取りこんで使うことができる。

ルビを打つことができる。ルビを打つ外国語を私は知らない。それも、右にも左にも、場合によって下にカッコつきで。

外来語はカタカナで書く。キリストなど。国名もカタカナ。ところが、意味のわからないカタカナがふえてきた。面倒なのでそのまま書く。「T P P」などと。これにはカタカナでルビを打つても仕方がない。漢字でルビを打つと「環太平洋戦略的経済連携協定」

おかちゃん後ろにいるよがんばりや

小林 わか

子供はありがたい。「しつかりせなあかへんやん」「足も腰もうこかへんのやがな」大阪弁の温もりが伝わってきて嬉しい。ふと保田龍門の合掌する母親像を思い出した。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 12月号から

古久保 和子

いいんです折れた傘でも役に立つ

工藤 千代子

人それぞれの立場や、体力に合わせてお役に立つことがあるはず。若者のようにスピーディーな身のこなしも、カタカナ語にも対応は出来ないけれど、役に立つことがあるならば、率先参加が元氣のもと。

人の恩生きてる内に返して

今井 万紗子

「お陰さまでありがとうございます」と墓石に頭を下げるよりも、受けた恩はしっかりと相手に分かるように、お返しすることで肩の荷が下りたのかも知れません。

不器用な息子が家業守ってる

土屋 起世子

「不器用」なんてとんでもない。本当は一番親思いのやさしい息子さんです。働く親の背中をしっかりと見て育ったのですね。

母白寿長いドラマが終らない

磯部 義雄

長生きは本当に幸せなことなのかと、問いかけられた一句。いつまでも元氣な母が居てくれることは嬉しいことです。長寿社会の現在、充実した福祉制度に、期待をしたいものです。

沈黙のまん中へんにあるリング

七ツ森 客山

沈黙にも、いくつもの状況が想像されます。赤いリングが香りを放ちながら、まん中で空気を読んでいるという逆転の発想も、ありかなと思いますか。

独りもの誰も怒らぬ不幸せ

上山 堅坊

誰からも干渉されず自由を謳歌するのもよし、しかし現在社会の中で、透明人間になつてだけ耐えられるものだろうか。

指の傷染みて後悔してしまふ

木見谷 孝代

どんな苦い思い出があつたのか、興味が沸きました。指の傷とは、ただ事ではないです。書くように話す人にはさからえず

藤原 昭

句のようなお人柄の方に諭されると、素直になれるのも当然。鼻息も静かになります。

豊かさか医者薬もたんとある

倉繁 泰輔

三食をきっちり食べて、食後・食間とカラフルな薬を何錠も飲み、サプリメントの錠剤と、ややもすると薬を飲むために食事をする事になりかねない。手のひらに薬に豊かさはと、問いかけてみたくなる。

大口で笑うと元氣湧いてくる

山根 邦代

全身に新鮮な酸素を充分に取り入れるのには最適な方法、智恵も元氣も湧きます。

十指みな賛成をした訳でない

小林 妻子

世の中の流れに、ほぼ納得して現在に至る。反対論はどうやら酒の肴になるらしい。

なんとなく難しそう抱つこ紐

土井 輝恵

おんぶ姿を見なくなった代わりに、お洒落な抱つこ紐のカンガルーママたちが登場。紐一本でおんぶしていた世代には、まるでバズルのよう。

ど忘れにア行力行と繰っている

源田 啓生

貴方もでしたか、知っているはずがどうしても出てこない、どうも私の周りに人たちが同じらしい、妙に安心をしています。



迷ったときは、動く

「私は、生まれつきシャイで無口で引っこ込み思案で……」などと言いますと、たいがいの場合「冗談言うな!」と笑われてしまいます。しかし、これは本当のことで、小学校の四年生頃までは、まったくの「あかんたれ」でした。中学校へ行くようになって、ようやく「これじゃアカンな……」と思うようになり、少しずつ矯正するように努めました。

もちろん、生まれつきの性格を変えるのは至難です。いや不可能かもしれません。表面的にはでかいツラをして、どんなにも臆することなく向き合っているように見えるでしょうが、何かにつけて、本性の「引っこ込み思案」が顔を出します。たとえば、川柳大会が連続している場合、出欠に迷うことがあります。そのようなとき「迷ったときは、動くこと!」と自分を叱咤して出かけるようにしています。出欠に迷うのは、疲れているとか忙しいという要因もあるのですが、多分に本性の「引っこ込み思案」が作用していると思うからです。

このように、迷ったときは引っこ込まず、積極的に動くことを繰り返した結果、交友関係も徐々に広がり、「エネルギー!」などと言われるようになりました。酒を飲むともつと輪をかけてエネルギーになるのですが、これは「酒の力を借りたエネルギー」ですから自慢にはなりません。

話が横に逸れかけましたが、今回のテーマは、私と同じように気が弱くて消極的な人へ「迷ったときは動きましょ」とエールを送ることです。もちろん、川柳は外へ出て行かな

くても楽しめます。本誌への投稿や新聞柳壇など、発表する場に困ることはありません。ベッドに臥している人や外出困難な人も取り組むことが出来るのは文芸の良いところです。

しかし、句会に出られる状況でありながら、「句に自信がなくて」「出無精なので」等と逡巡しておられる方は、勇気を出して出席してください。必ず新しい世界が広がります。

会場が近くにあれば便利でしょうが、電車やバスで一時間以上かかるというのなかなか良いものです。

地下鉄に乗りに行くのも呆けぬため 森下よりこ

というように、時刻表を見たり、行き先を確認したりして乗り物に乗るだけでも頭の体操になります。また、外出することによって「身ぎれいにしなければ」という意識が働きます。これも呆け防止になり若さを保つことにもなるでしょう。

そして、何よりも良いのは交友関係が広がることです。人間関係は煩わしいこともありますが、それを含めての交友は大いに刺激になり脳の活性化につながります。

ただし、ここで述べている「迷い」は、「引っこ込み思案からの迷い」いわば「心の弱さから生じる消極性」を言っています。冷静に状況を判断して、なお決断できない事態であれば、軽率に動かず見極めがつくまで静観するべきでしょう。

また、「疲労から生じた迷い」の場合も動いてはいけません。体調が悪いのに無理して出席するのは義理が絡んでいることが多いものです。「正義と人情を秤にかけりやう、義理が重たい男の世界」というのは「唐獅子牡丹」の歌ですが、義理と身体を秤にかければ身体の方が重たいのは当然です。アクセルとブレーキの加減を心得て動き回りましょ。



高瀬 霜石の津軽おもしろ景色

奇数月の連載になります。

2つの誓いの巻 ⑦

去年は、僕の川柳人生の中で——といっても、せいぜい、25年くらいだが、——とても大きい節目の年であった。

6月11日、12日に、仙台で開催された日川協の全国大会で、当日選を任されたことである。事前投句の方は、言っちゃあナンだが、何千句来ようが大丈夫。でも、当日選は時間との闘いだから、どうなることかと思いましたよ。

僕の川柳人生で一番大きな節目は、今からちょうど一回り前の西暦2000年（平成12年）。僕は、きっかり50歳だったこともあり、本気で誓いを立てたのだった。

2000年を「二專念」と引っかけて、飯の種である《生業》と、一生の趣味になるであろう《川柳》の2つに専念しよう、心に誓った。

僕はその頃、浮世の義理で某ボランテニア団体に入っていた。会合の度に、ウォーとか、ローアとか吠える会。なにせ小さい街である。右を向けば恩人。左を向けば知人にぶつかる。ここを辞めるには、会社が左前で首が回らなくなったか、体調がいたくすぐれないかのどちらかでないとなかなか足抜け(?)できない会であった。

会社も身体もどちらもアブナくない僕が、亡父の時代からの恩人がわんさかいるこの会を辞めるといことは、すなわち、座右の句《古くとも僕には仁義礼智信 路郎》の精神にもとることにもなるから、随分と悩み決断した。

その年の3月。弘前に『アッブル・ウェーブ』（以下、AW）なるミニFM局が開局した。川柳人の僕が、AWに係わることになったのも、これまた浮世の義理であった。

AWの社長に就任したのが、弘前商工会議所副会頭とか、弘前観光協会会長とかのエライ役職をこなしている僕の高校の同級生だった。出世頭の友人が、AWの社長に就任したのだから、本当は宣伝なんかする必要もない僕の生業でも、一番安いコースのCMにつきあうしかないかなあと諦めていた矢先、開局準備スタッフから電話が入った。

「高瀬さん。実はお願いがありまして……」

「分かるとるがな。一番安いコースハナンボや？」

（東映ヤクザ映画の見過ぎで、友人知人なんぞには、つい下手くそ関西弁になったりもするのだった）

「イヤイヤ、高瀬さんは宣伝費なんていりませんよお」

「エッ?ほんまか?嬉しいな。君、いい男やなあ」

「でもね、高瀬さん。そのかわりといっちゃあナンですがねえ、高瀬さんは、身体で払ってもらえませんか」

「エッ?なんやて?」

「聞えませんでしたか?身体ですよ。カ・ラ・ダ」

そんなこんなで『やじうま川柳』なる番組を持つことになった。オット間違ひ、持たされたのだった。

時は流れて、2012年。番組はどうに3000回を越えた。この番組から生まれた柳人も、すくすく育っている。

最近ふと思うのだ。これはひょっとして、僕のライフ・ワークなのかもしれない。

英語 de Senryu ①

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代

(岐阜保健短期大学)

二階を降りてどこへ行く身ぞ

walking down
from the second floor
where should I go?

見渡すと ユダのころを みんな持ち

looking around
the spirit of Judas
is in us all

あの女 この女 みな十九なり

that girl
this girl
all are nineteen years old

～リバーウィローのため息～

日本の短詩型文芸である短歌、俳句、川柳の翻訳は31文字、17文字の短さだから簡単に出来ると云う人があるかもしれませんが、そう簡単にはいきません。タイトルのリバーウィローは川柳をそのまま英語にしたものですが、短詩の翻訳では詩心をいかに外国語に置き換えるか悩めます。翻訳できないこともしばしばあります。むしろ出来ないことが多いかもしれません。英語圏を始めとして外国の読者が意味と詩心を理解するように翻訳しなければなりません。そこには文化の差異によってパーフェクトな翻訳が生みだしにくいことが起こります。例えば、日本人が持つバラのイメージと英国人のバラのイメージは同じバラであっても異なります。そのようなバラをどのような言葉に置き換えたらいいのか、一語の英語の語彙を見つけるためにああでもないこうでもない悩めます。そのためネイティヴ（外国語を母語とする人）と組んで翻訳することがしばしば行われます。また作品の内容からみれば、短歌の物語性を如何に翻訳するか悩むところです。そして俳句では季語というキーワードがイメージの増幅に貴重な役割をします。川柳の翻訳が意味の説明になって面白くありません。川柳作家の強烈な独白を受け止めて翻訳していかねばなりません。頭と心を同時に使い、作者に添って想いを寄せて初めていざ翻訳となります。いったんはまり込むと止められない面白い作業です。

同人特集

私の一句

(順不同)

歲月や尾道の句碑 弓削の句碑

句読点いっぱい打っておく絆

春夏秋過ぎたわたしの季節たち

宇宙から孫がケイタイかけて来る

自画像は手に一杯の赤い薔薇

ありがとうをひと言添えてきた餅

魂の叫びゴッホの絵の刹那

陽君はいいなあ三歳はいいなあ

新鮮な花供へあり六地藏

初恋をそのままにして原爆忌

知らぬ間に同心円が太ってる

お多福がげっそりしたら絵にならぬ

祝い酒今夜は月も二つ出る

お化けよりもっと怖いは目に見えぬ

竹原市 小島 蘭 幸

大阪市 西 出 楓 楽

米子市 八 木 千 代

篠山市 遠 山 可 住

藤井寺市 鴨 谷 瑠 美 子

四条畷市 吉 岡 修

香芝市 大 内 朝 子

河内長野市 植 村 喜 代

東かがわ市 木 村 あ き ら

吹田市 野 下 之 男

唐津市 樋 口 輝 夫

鳥取市 倉 益 一 瑤

橿原市 居 谷 真 理 子

弘前市 今 愁 女



待つほうが気が楽やでと祖母早出
ゆっくりと歩く野の花友として

川柳塔私のいのち抱き給う

お酒っていいなこころを丸くする

虚弱児のうれしい誤算喜寿祝う

貧しくも笑顔があったなあ昭和

2011神の吐息が洩れてくる

バランスのとれた夫婦になる喧嘩

得をした気がする第五日曜日

追い風はもう考えぬマイペース

人形は真っすぐわたし見てくれる

がんばってがんばらぬようしています

一人旅ホームシックは言わんとこ

熟年の温もり八十路の平和知る

落ち込んだ時には好きな本を読む

仏様良性でしたありがとう

四月一日嘘は一度も吐いてない

茨木市	藤井	正雄
出雲市	多久和	敬子
大阪市	笠嶋	恵美
鳥取市	岸本	孝子
鳥取市	岸本	宏章
三田市	堀	正和
高知市	小川	てるみ
鳥取市	中村	金祥
海南省	三宅	保州
大阪府	米澤	俣子
枚方市	寺川	弘一
八尾市	村上	ミツ子
藤井寺市	俣野	登志子
河内長野市	井上	喜醉
藤井寺市	若松	雅枝
寝屋川市	平松	かすみ
豊中市	藤井	則彦

せっかくの人生のんびりいたします
 被災の地「ふるさと」唱うまた唱う
 微笑が他人の垣根低くする
 孔孟の教えの国の無法ぶり
 無駄なことみんな省くと味気ない
 たおやかに老母へ女ごころを添え木する
 時代からこぼれぬように生きている
 駆け抜けた昭和の話などしよう
 うれしいな地球は今も青いのだ
 遺産なし謝り状を書いておく
 オルゴール聴かせて赤子昼寝さす
 今日生きる顔を写して見る鏡
 浄瑠璃でせつない義理に泣かされる
 夢ひとつ小袖に包み初詣で
 白い絹少し翳って好きな味
 パレットに絵具を足してまだ未完
 生命線くっきり出てる間に手術

藤井寺市	大阪市	堺市	吹田市	大阪市	東かがわ市	姫路市	八尾市	東かがわ市	大洲市	尼崎市	鳥取市	高石市	大阪府	鳥取市	高槻市	羽曳野市
津	大	山	須	榎	清	古	宮	川	中	長	奥	浅	板	深	峯	塩
田	川	本	磨	本	川	川	崎	崎	居	浜	谷	野	東	澤	村	満
シルク	桃花	半銭	活恵	舞夢	玲子	奮水	シマ子	ひかり	善信	美籠	彩子	房子	倫子	千恵子	勲弘	敏



握り合う両手に通い合う誠

生きるとや大きなクイズまだ解けぬ

凍らせておけばよかった母の味

旅仲間老いてそこそこ金を持ち

約束の日はまだ 天へ舞うさくら

出る幕のない勢いを持て余す

穏やかな時間流れる雨の午後

わたし雑魚へこたれぬのが取柄です

日本の四季を安近短で愛で

繰り言を上手に流す無洗米

美辞麗句鎖骨あたりに波しぶき

水が水色に光るふる里いとおしむ

高望みに挑戦肥やしにはなった

命ある句は出来たのか持ち時間

ともすれば独り善がりになる利那

平成の疎開追われる放射量

やんわりと杭を打たれたアドバイス

美作市 山本 玉恵

西宮市 亀岡 哲子

寝屋川市 太田 とし子

横浜市 小野 句多留

豊中市 水野 黒兎

鳥取県 石谷 美恵子

岸和田市 雪本 珠子

生駒市 飛永 ふりこ

札幌市 三浦 強一

美作市 大石 あすなろ

富田林市 中井 アキ

鳥取県 佐伯 やえ

豊中市 江見 見清

西宮市 奥田 みつ子

大和郡山市 坊農 柳弘

鳥取市 吉田 弘子

富田林市 片岡 智恵子

エコカーに青葉の茂る道続く

錯覚を楽しみました青春期

断捨離も出来ず娘に叱られる

瓦礫から新芽が拳あげている

セシウムを気にかけてつつもテニスやけ

お互いの気くばり弱点に触れぬ

一滴の善意繋げばもう大河

オペ前はケキヨ退院後ホーホケキヨ

炊飯器明日生きるとも果てるとも

予測超えどこまで備えても不安

ケンカした日を思い出す墓掃除

腕組めば信じられてる良い心地

十二支の留をつとめております

身形は野暮でも心はお洒落です

物腰の良さ学歴も職歴も

百年の紀州見越して樹を植える

母にまだ届かぬ石を積んでいる

鳥取県 細田 裕花

堺市 西村 りつえ

富山市 島 ひかる

羽曳野市 徳山 みつこ

日高市 根岸 方子

池田市 栗田 久子

河内長野市 村上 直樹

河内長野市 坂上 淳司

大阪市 津村 志華子

枚方市 安達 忠央

枚方市 丹後屋 肇

大阪市 平嶋 美智子

大阪市 谷口 義

東大阪市 佐々木 満作

八尾市 宮西 弥生

和歌山市 喜田 准一

三田市 上垣 キヨミ



辻まがるまでよそゆきでいる背中
人には勝てぬが自分には負けない
歩留りの悪い頭をマッサージ
こんな地味着れぬと亡母の歳になり
婆さんは孫におもちゃにされている
育メンのお手本見せている野鳥
さやさやと木も葉も揺れて慈雨となる
真実は黙っていても主張する
傘寿すぎ哲学が持つ読みごたえ
消去法そこに残っただけのこと
神さまは公平でない事を知り
万策が尽きた時には寝るとする
長生きに欠かせぬ妻の調味料
復興の瓦礫無念を積み上げる
桐の花母が笑ったように咲く
過ちは咎めぬ広い心持ち
走らねば置いてけ堀をくいそうだ

京都府	さいたま市	犬山市	犬山市	鳥取市	犬山市	鳥取県	鳥取県	出雲市	鳥根県	奈良市	松山市	愛知県	弘前市	倉吉市	大阪市	神戸市
三宅満子	星野育子	金子美千代	吉田幸子	土橋はるお	関本かつ子	岩崎和子	斉尾くにこ	富田蘭水	竹治ちかし	天正千梢	宮尾みのり	早川遯行	福士慕情	牧野芳光	河井庸佑	山口光久

災害が国家を呑んだ怖い年

馬鹿正直な鏡だ馬が合いそうだ

ピリオドを打って前進するヒール

夏瘦せも知らぬメタボを持て余す

怠けさえせねば亀には勝つ兎

緑陰にゴッホを真似て筆踊る

好きなもの好きな時食べ感謝する

名月と歩いて丸くなるころ

蕉翁も賢治も記すみちのくよ

十代の汗に貫っている勇氣

案じながら待つてよかった駆けてくる

忍耐を濃い目のお茶で溶きほぐす

成人の孫を見るまで竹を踏む

天下りと言う安全牌を持っている

とつとつと言う真実が胸をつく

清と濁織りませ愛はほんまもん

寝た振りをして外濠を埋めさせる

亀岡市 井上 森 生

松山市 古手川 光

和歌山市 玉置 当 代

加西市 金川 宣 子

堺市 村上 玄 也

弘前市 岡本 花 匠

大阪市 津守 なぎさ

大阪市 津守 柳 伸

堺市 源田 八千代

大阪市 鶴田 遠 野

高槻市 指宿 千枝子

和歌山市 松原 寿 子

堺市 齋藤 さくら

熊本市 永田 俊 子

堺市 宮本 かりん

神戸市 山崎 武 彦

黒石市 相馬 一 花



休もうと思えど意地が許さない
ひまわりだったことのあるおばあさん
未来への夢溢れそう竹トンボ
嗚呼神よ日本が何をしたという
お逢いしたい追伸にある微熱かな
婿が搗き孫がまるめた餅の味
座禪半畳宇宙の旅に行くとする
遺したら恥ずかしい物捨て始め
踏んばって夢へ向かって舵を取る
我が国に欲しい大きな道しるべ
ハートだけ電池外してみたい夜
あかんなあ国も私も迷走中
背伸びした日々が外反母趾にある
核競うヒト科に神も荒れたまう
スイッチを入れたら冬の街になる
人間の知恵が人間追い詰める
的外ればかりの矢にもある一念

熊本市	京都市	芦屋市	奈良市	藤井寺市	神戸市	羽曳野市	泉佐野市	鳥取市	大阪市	西宮市	箕面市	河内長野市	大阪市	藤井寺市	豊中市	倉吉市
岩切	高島	黒田	米田	増井	木村	吉村	山本	春木	佐藤	吉井	広島	山岡	中村	太田	松尾	山中
康子	啓子	能子	泰昌	ヨシ枝	貴代子	久仁雄	蛙城	圭一郎	忠昭	菜々子	巴子	富美子	叡子	扶美代	美智代	康子



赤飯を囲む笑顔が生む絆
搜索の日を追う毎に葵えてくる
太陽に勝る指揮者は無いだろう
釣り糸を垂れてじっくり知恵比べ
雑魚なりに身につけました生きる術
嘘ひとつついて気付いた空の青
注連縄のまた新しい年を綯う
衰えの自覚とつても寒くなる
紙に字の調うまでは難儀でも
なに事も万里一空とはいかぬ
膝に抱く姫の羽化まで見えようか
地震国やはり原発そぐわない
知りたがり喋りたがりで淋しがり
居酒屋で明日のビタミン補給する
ひと粒の麦地に零れ地は満てり
僕だけが本音喋って損をする
旅に出る変化をしたい紙風船
健康が最後にものを言うのです

堺市	吹田市	堺市	和歌山市	松原市	藤井寺市	大阪市	鳥取市	鳥取市	鳥取市	鳥取市	明石市	大阪市	大阪市	鳥取市	西宮市	松江市
志	太	奥	木	森	鈴	江	吉	森	中	中	枇	長	井	山	緒	小
田	谷		本	松	木	島	田	山	原	原	谷	井	丸	下	方	川
千	篤	時	朱	まつ	い	勝	孔	盛	諷	み	汲	善	昌	節	美	注
代	子	雄	夏	お	さ	弘	美	桜	人	子	香	純	紀	子	津	湖

■句集紹介

『続・二人三脚』

富田美義・保子 著

らしさ 太田 昭

美義さん保子さんのお二方をあまり存じ上げない私ときが執筆することに、やや烏滸がましさを感じつつ、取えて筆を執らせていただきます。

三年前の『二人三脚』に続き今回の『続・二人三脚』を夫婦句集として刊行されました事をお祝い申し上げます。

これまでに川柳塔で、親子句集・夫婦句集を出された方はいらつしやいますが、美義さんの様に、ご自身の古希の節目に『二人三脚』を出版され、続いて奥様保子さんの古希を記念して、『続・二人三脚』を夫婦句集として上梓されたのは稀で、その作品の蓄えと資力と意欲に敬意を表します。

今回の句集の序文にもあります様に、富田家は、そもそも記念の節目には何か記念となるものを残す家系にあるのかも知れませんが、それにしても立派なものです。

『続・二人三脚』の夫婦句集を拝見し、まず感じたことは、美義さんと保子さんそれぞれの「らしさ」と言うことであります。各所の句会やなわ柳壇などで、ご夫婦揃ってのお名前をよく拝見致しますが美義さんの「剛」の陰にある優しき」と、保子さんの「柔の陰

にある強み」と言うそのらしさであります。

私は日頃から「らしさ」と言う事をいつも自分に言い聞かせて参りました。焦らず、驕らず、飾らず、無理をしない自分らしさをもって他人と接することが出来、表現出来たと考えて居りますが、時折これから脱線することもあり、歳とともにこれの修正に苦慮をして居ります。

美義さんの長年のコンピュータシステムの仕事を通じて得られた人間関係の機微と、男としての意地の様なものを作品を通して感じられます。

亀ならに哲学がある慌てない

句集の巻頭にありますこの句こそ、美義さんの男としての意地であり哲学でありましょう。人間が句を作り、句が人間を作ると申しますが、まさに、この度の句集を拝見しておりますと、日頃の対話から感じられる美義さんの「剛」の印象とは異なった優しきを感じさせる作品を多く目に致します。

晩学のページ焦らず歩を合わす

流れ星おっとお前も一歩をかい俺という貧乏籤を引く妻よ

焦らず、相手に優しく語りかけるこんな作品に美義さんらしき句が感じられます。

一方、保子さんの句を拝見致しますと、片足をすくう女は線つくる

この巻頭句に見られます様に、如何にも女性らしさを内に秘めた柔らかなみと、目線の確かさがうかがわれます。国内の各都道府県を踏破され欧州を含む十二ヶ国を廻られたことも、これまで保子さんが句を詠まれて来られた上で血となり肉ともなつて来たことでありましょう。

『二人三脚』、これはご夫婦共々健在で

同じ趣味のもとに着実に歩んで来られたが故であり、決して弛む事のない絆で結ばれた二人三脚で、いついづれでも歩まれる事を祈念して止みません。

お聞きするところでは、お母様が100歳をお迎えになられるとか、この様な節目の中で、この度記念すべき『続・二人三脚』の夫婦句集を刊行されましたことは、親孝行でもあり、同時に保子さんに対する贈り物でもある様に思え、心の温まる思いが致しました。最後にになりましたが、美義さんと保子さんの作品の中から、私の心に残る句を記して句集の紹介と致します。

(美義さんの作品)

逆上がり出来ないままに卒業す
ユーモアの通じぬ人とおでん食う
晩学のページ焦らず歩を合わす
五時に起き父に似た顔洗う
左遷地の冷たい水で意地鍛え
月給が俺より凄いや嫁が来る
俺だけに叱る女房に従いてゆく
清貧に慣れた女房が偉く見え
不器用で真つ直く以外歩けない
二人三脚やっぱり妻が先に出る
(保子さんの作品)

手抜きせず綱を磨いている誇り
子と同じ目線でのみだ拭いてやる
突き放す強気の裏で手を合わす
地図に無い旅に亭主を送り出す
何はともあれあな選んだのは私
愛と忍まん中に置く箸一膳
義理を欠くこれが意外と勇気いる
割り箸で逃げるうどんを逮捕する
泣いたって弱い女に見えませんか
のるのろと歩けば風も凪いでくる

川柳塔碑合祀祭要

於高野山大霊園

前日の雨天が嘘のように晴れ上った十一月十二日、ケープルで高野山に上ると、一面錦秋のほかばかとした小春日和、持参したコートは終日不要でありました。

そんな好天に恵まれ、高野山川柳塔碑合祀祭が厳粛に実施されました。合祀の対象者は十名様、そのうち二家族様（泉南郡岬町から澤田和重様ご遺族五名様、茨木市から岡本久峰様ご遺族の二名様）のご参列を頂き、また川柳塔社からは西出理事長ほか総勢十名が参列致しました。

ご遺族様とは霊園の入り口で待ち合わせ、十二時過ぎに合祀が開始され、先ず西出理事長より概ね左記のご挨拶をいただきました。

「今日は温かくよいお天気になりました。

お忙しいなかを有難うございます。合祀者十名の方々は、極楽の蓮の上で仲良く句会をし

たり川柳のお話をしておられると思います。本日はご参列有難うございました。」



法要参加の方々

次いで大霊園次長様の読経を賜り、故人のお名前一人一人を読みあげて頂き川柳塔碑に合祀されました。また参列者全員がご焼香を致しました。

読経の後のご法話で「焼香の煙がいつかは消えるように、また今日の好天がいつまでも続かないように、万物は変化しこのことを諸行無常と申します、故人の皆様方のご逝去もその具現であるかもしれません。

故人様の一覧表に見るご年齢がおしなべてご高齢であられることを知りましたが、これも川柳による脳の活性が一助となっているかもしれませんね」などのお言葉を賜りました。法要を終え、献杯、昼食、懇談となごやかなひと時の後奥の院参拝組、買物組など三々五々散会いたしました。（水野黒兎記）

平成二十三年度合祀者十名（敬称略）

- 澤田和重（22・6・23没）相馬銀波（22・8・27）中村れんげ（22・9・26）宮口笛生（22・10・1）山本益子（22・12・10）櫻庭順風（23・2・15）堀端三男（23・3・20）岡本久峰（23・4・30）清水利武（23・5・16）榎原秀子（23・7・21）

第26回 国民文化祭・きょうと2011 (11月6日)

本年度国民文化祭は京都府井出町町立泉ヶ丘中学校体育館で開催された。
事前投句、高校生・一般の部は7656名、小・中学生の部は4244名、当日参加は911名。
大会各賞は下記のとおり。

◎ 高校生・一般の部

文部科学大臣賞

人の道説いて寂しくなっている 栃木県 日野原亢児

国民文化祭実行委員会会長賞

キャベツからあなたは誰と聞かれてる 滋賀県 小梶 忠雄

京都府知事賞

無添加の古都そのままよろしゅう 京都府 平尾もも代

第二六回国民文化祭京都府実行委員会会長賞

農耕の血を細々とブランター 福岡県 古野つとむ

京都府教育委員会教育長賞

道を訊く明日の匂いがするひとに 京都府 山本知佳子

井出町長賞

ガイドラインに馬乗りになる少年期 京都府 岩田多佳子

第二六回国民文化祭井出町実行委員会会長賞

完封へ捕手は呼ばれぬお立ち台 栃木県 塚本 勘平

井出町教育委員会教育長賞

独裁の手がスイッチを弄ぶ 山梨県 中沢久仁夫

(社)全日本川柳協会会長賞

糠漬けの底に激んでいる家風 大阪府 湯澤冬扇坊

京都川柳作家協会会長賞

すっぱんの野菜がいののです僕は 岡山県 西村みなみ

◎ 小・中学生の部

文部科学大臣賞

いもうとのやわらかい手とかえるみち 小2 阿地 莞汰

国民文化祭実行委員会会長賞

やわらかい風にゆられて木が歌う 中1 舟木 菜月

京都府知事賞

いやなこと全部シャワーで流すんだ 小5 長峯 令奈

第二六回国民文化祭京都府実行委員会会長賞

汗流す頑張る君がかっこいい 中1 山内椋太郎

京都府教育委員会教育長賞

速いなあ楽しい時間すぐ流れ 小6 金森もえ花

井出町長賞

春の日の井出のそよ風やわらかい 小5 東村 涼矢

第二六回国民文化祭井出町実行委員会会長賞

お寺はね信じる人の心だよ 中1 高田勇二郎

井出町教育委員会教育長賞

流されたゲーム返して大津波 小4 稲垣颯一郎

(社)全日本川柳協会会長賞

仏様日本の未来守ってね 小5 柿本 勇紀

京都府川柳作家協会会長賞

お寺にはみんなのねがいつまってる 小4 黒田 涼太

二次選者 大野 風柳・久保田元紀・竹本瓢太郎・西出 楓楽・平山 繁夫

本社十二月句会

十二月七日(水) 午後一時
アウイーナ大坂

十二月句会は、花屋の店先にシクラメンとポインセチアがずらりと並び、どことなく師走の慌ただしさが漂う七日、106名の参加にて開催された。初参加は松山市の神野きつこさん。

句会に先立ち、先ごろ亡くなられた同人、酒井一壺氏、武田帆雀氏へ黙祷を捧げた。

今月のお話は、和歌山三幸川柳会の三宅保州さん。「川柳いろはカルタ」と題して、「い」から「ん」までの46文字にそれぞれ川柳の上達やタブーを詠んだ一句を添え、解りやすく解説された。数句をご紹介します。

- ① 没の句も直せば佳句に生き返る
- ② 抜けぬのを選者の所為にするでない
- ③ 孫の句を詠んでるうちは進歩せぬ
- ④ ひたすらに読んでひたすら作るべし

保州さんの巧みな話術に参加者全員、時の経つのも忘れて聞き入った。(いさお記)

月間賞は2ヶ月連続、堺市の柿花和夫さん(司会)美籠・善純(協取り)安子・真理子(受付)義・キヨミ(清記)勝弘

席題 「どっこい」 山口 光久選

こんな俺にどっこい妻は美女である
揉めている夫婦のはずが御懐妊
焼酎を飲んでどっこい若返る
おとほけの裏で野望を膨らます
正面は避けてどっこい雑魚の意地
後期高齢どっこい日本支えてる
足腰が勝手に言わすどっこいしょ
踏まれても雑草どっこい生きている
失言と言うがどっこい許さない
いい女見ればどっこいニューハーフ
ほら吹きでどっこい憎めない
明るさが心情どっこい生きている
はっどっこい唯しが弾み三昧が映え
どっこいしょけうの日課に捻子を巻く
離婚してどっこい女華になる
一本気どっこい向きを変えてみる
どっこいしょ年寄りくさい嫁叱る
夢いっばいどっこい財布許さない
人情がどっこい生きている田舎
忠告があとどっこい生きている
どっこいしょメタボの腹をもてあます
優等生今やどっこいどっこいや
弱気にはならぬどっこい老いの恋
耐えに耐えどじょうどっこい昇り竜
歳でん何をすることもどっこいしょ

弘風 真理子 朋月 完次 郁夫 和夫 時雄 一步 時雄 千代 美籠 義子 唯教 楓楽 宣雄 正雄 すみ子 黒兎 好 まつお 蕉子 富美子 直樹 太郎

どっこいしょ言つても重い暮れせまる
三歳の孫が真似するどっこいしょ
デートなどさせぬ残業言いわたす
おとどっこい閻魔の誘いには乗らぬ
得手勝手どっこいそうはさせないぞ
どっこいしょ言つた言わんと笑い合い
女ひとり生きてどっこい花咲かす

佳

奥の手にどっこい本音坐つてる
死んだふりどっこい耳は立っている
どっこいしょ荷物広げてカギ探す
老いるの恋どっこいしょどっこいしょ
傍目にはどっこいどっこいの夫婦

人

どっこいと父が背負った荷の重さ

地

一日はドッコイショから動き出す

天

呱呱の声響けどっこい明日は晴れ

軸

百点とれどっこいそうはいきません

兼題 「不足」 飛永ふりこ選

言い訳に電力不足言いふらす
ネジ一つ足りずロケット飛び立たず
不足など言えぬこんなに美味い飯
電力不足ヒートテックで迎え撃つ

幸泉 舞夢 美智代 富子

仏様の不足を聞いたことがない
暑い寒いと不足言えるも平和ゆえ
不足なく育ったけれどふがいない
さしすそ足して行く内古が麻痺
不足など言わない蟻の長い列
万物を過不足なしに陽が照らす
何不足ないがと前置きの小言
不足ある暮らしに闘志燃やす日々
坂の上の雲不足のない勇士
この星へ足りぬやさしさ思い遣り
幸せな国で質素に生きてます
不足補い生きる絆は美しい
三ツ星に負けぬなにわのタコ焼屋
風景画人が恋しくなっていく
近頃は太和ことばが不足がち
動物園の熊芸しても同じ餌
薄味のうどんに掛ける唐辛子
学期末は親も子供も叱られる
不足分妻のトシチでカバーする
カルシウム不足かすぐに腹が立つ
言い足りぬくらいでちょうどよい主張
おとちゃんのとこに不足がありますか
満足を語るぬ人の向上心
何不足あるのか妻の無言劇
不満など言わない仮設にや雪が降る
会話不足冷たい戦争まだつづく

佳

蘭幸 満子 紀子 弘光 淳司 郁夫 見清 すみ子 弥生 完司 日の出 たもつ 和夫 保州 義子 朋月 信子 光久 完司 保州 耕治 美智子 淳司 浩二 理恵

不足とは無縁日だまり抱く心
残高が不足夕陽が目にも沁みる
最良目にも力不足のトップだな
御曹司何が不足の御乱行
そこは知恵パワー不足をカバーする
人
大臣の力不足にブーイング
地
輪廻とや不足は言わぬ神仏
天
過不足があつて人間おもしろい
軸
福島の牛の慟哭 不足など
兼題 「ゼロ」 山本 義子選

朝子 朱夏 時雄 千代 牙子 シマ子 楓楽 幸泉 楽生 まつお 唯教 真理子 公誠 順子 靖鬼 武彦 楽生 千代 紀子

ゼロからの門出仮設に灯が点る
友に囲まれ財布ゼロでもあたたかい
可能性いっぱい持っているゼロだ
ゼロ歳が今日もわが家をかきまぜる
ゼロ戦が涙を誘う基地知覧
来た時と同じ重さで帰る釣り
とりあへず争いは無い遺産ゼロ
わたしからお酒を引けばゼロになる
ここからはゼロに戻ってゆく勇氣
遺産ゼロ揉めることなしと平和
わからなかつたらゼロに戻りなさい
人生はプラスマイナスゼロがよい
何もかも奪ってゼロにした海よ
視界ゼロにやつと無い知恵絞り出す
我が校にいじめゼロと木の校舎
ゼロからと決めると肩の荷が軽い
不器用な愛ゼロばかり積んでいる
ひたすらに古道歩けば無の境地
出直しのゼロは希望をまんタンに

佳

恭昌 みつ子 希久子 ばつは 浩二 茂 誠一 朋月 葉子 淳司 信子 則彦 能子 則彦 宏子 美籠 希久子 弥生 朝子 瑠美子 千代 信子 わこ 武彦 千ヨミ

地

美しいゼロになれよと木の葉散る

完司

天

マイナスをゆつくり溶かし入る風呂

わこ

軸

母の愛ゼロ膨らませふくらませ

兼題 「惜しむ」

米田

恭昌選

何であれ遊びに骨身惜しまない

雅明

惜しんで貯めてみんな存貯して逝きはった

萌子

落語会惜しまれ急ぐ風雲児

たもつ

惜しむべしセシウム浴びたコシヒカリ

いさお

そこまでとその先までと送る母

賢子

惜しまれて逝きたいなんてもう遅い

和夫

惜しまれて死んでも棺桶はひとつ

きつこ

惜しまれて逝つたと皆に言わせた

直樹

いい人はほんまにほんま先に逝く

勝弘

愛でられて菊は香りを惜しまない

好

惜しいねと言われて涙とまらない

瑠美子

敵にしておくには惜しい飲みつぶり

保州

無我夢中で生きた昭和をいとおしむ

富子

生前葬では聞かれなかつた惜しむ声

昭

流れ去る一日惜しみつつ歩く

完司

もったいない惜しいと娘の服母が着る

シマ子

切り札を出し惜しみましたまま負ける

時雄

惜しまれて辞める首相は皆無です

紀子

近く友の笑みが別れを惜しませる

武彦

マータイさん「もったいない」を広め逝く

堅坊

わくら葉も命は燃えていた筈だ

寿子

年金では出し惜しみするほかはなし

光久

今こで出し惜しんだら悔い残す

克己

葉出し惜しむ医者です信じます

保州

大阪人生きた金なら惜しまない

たもつ

触れなくばあと幾日も咲いたのに

俣子

惜敗で銚子三本まだ酔えぬ

正雄

惜しまれて去る監督のいい笑顔

太郎

惰眠を貪る惜しまれないように

敏治

自尊心がほんのり見える負け惜しみ

則彦

引退は惜しむが後ガマ狙つて

求芽

寸暇惜しんで晩学の趣味に生き

希久子

佳

惜しみなく昭和を生きた母である

美籠

自画像へ若さを惜しむ紅を足す

朝子

当選へ土下座も泣きも惜しまない

誠一

ナデシコジャパン喝采は惜しまない

扶美代

夭折の詩人みずの才惜しむ

いさお

人

電力を惜しみ炬燵にされる猫

浩二

地

骨惜しめない背中を子に見せる

すみ子

天

惜しんでる間はないけれど前を向く

月子

軸

弔辞ではこの僕だつて惜しまれる

月子

兼題 「力」

松原

寿子選

お力をお貸し下さい待ってます

幸泉

無力でも群衆という強いもの

萌子

ダブル選勝利したのは突破力

淳司

お力になります但し金以外

哲男

力抜くコツを覚えてから脱皮

富美子

再生の絆を見せる底力

宣子

力出し切った敗者のいい笑顔

いさお

溜息を遠心力で振り飛ばす

弘風

一歩引くそれから前へ出る力

(久) 千代

全力で頑張っている木の根つ子

完司

鈍感力つけて終電気にならない

敏治

人も木も光る彼方へ湧く力

弥生

こんな時こそ絆の力試される

希久子

地震津波神の力も届かない

満子

軽いジョーク投げて力量試される

美籠

立ちどまり可愛く力補充する

義子

寂聴の法話みちのく力づけ

満子

力にはなれぬが笑顔差し上げる

楓楽

なでしこの力も借りる国興し

朱夏

息子には父のパワーを見せておく

美籠

原子力も要らないと言う地球

寿子

百歳の詩集さらさら力まない

時雄

力抜くコツを憶えて波に乗る

すみ子

もう今は力を込めず母を抱く

黒兎

力では勝てぬ頭を働かす

克己

いざと言う時突然に出る馬鹿力

年金カッソ力の限り生きてやる

屈辱を重ね力がついてくる

札束でどうにでもなる天の声

美人なら力貸そうと待っている

底力分婉室が熱くなる

力ではとても勝てないペンを研ぐ

佳

スクラムを組むと力が湧いてくる

なでしこが見せた日本の力こぶ

活力が漲る志士の都構想

目力が優しいひよっとしてもししか

人

クレーンを掛け文明を吊り上げる

地

ゆっくりと力を出す山動く

天

札束の魔力人生裏返す

軸

来年の予定力を込めて書く

兼題 「反省」

小島

世界中から愛の力が押し寄せる

反省は明日で早寝をしよう

反省をまとめ消却炉に入れる

神さまたまには反省してほしい

反省猿のその後の噂かぬまま

舞夢

求芽

唯教

玄也

かずお

ばっは

一歩

富美子

求芽

満作

見清

楽生

公誠

俣子

完司

小島

蘭幸選

月子

瑠美子

求芽

恭昌

男なら丸坊主にもなれましょう

反省しきりでも生きていてありがたい

ごめんですめば警察いらん言うたはる

薬よりまずは反省ですと医者

百万遍反省しても放射能

湯につかる今日を省みる時間

今にして姑は満足してたのか

人間陶冶の詩がまだまだ出ていない

妻の居ない場所反省しています

反省のたびにポロリと椿落つ

反省はあなた選んだ四十年

飲みすぎと言う反省が続かない

また今年もあはなごとして暮れてゆく

もう一軒余計だったと頭痛薬

懺悔した帰りに美女が手で招く

反省のこたまでしょうか海が哭く

反省の座禪の風は阿弥陀堂

ナベツネが反省したら世も終わり

反省も猿がするのは可愛い

反省を重ねトップの座を守る

反省はしないお詫びもする気ない

反省をしても賠償金値切る

焼酎を飲んで反省するばかり

反省は簡単一行で終る

反省のボーズでロダン像を観る

反省を重ねて夢は伸びて行く

反省がいつばい月曜日のスーツ

樹千代

賢子

宏子

善純

たもつ

希久子

みつ子

ルイ子

理恵

千里

ふりこ

美智代

修

茂

敏治

富子

弥生

弘風

萌子

弥生

公誠

楽生

朋月

信子

武彦

満作

瑠美子

佳

千鳥足反省なんかするもんか

ごめんねと曇り硝子に書いて寝る

反省のかたちに手足折りたたむ

悪いのはわたくし愛しすぎました

ソプラノがあればから出なくなりまし

人

反省会焼肉屋から始まった

このまま行けばアルコール依存症

地

反省を綴れば自分史ができた

天

午前様になった反省会でした

軸

平成23年本社句会皆出席者願不同

足立 茂 石田隆彦 岩崎公誠 居谷真理子

上山堅坊 江見見清 榎本舞夢 江島谷勝弘

大内朝子 加川靖鬼 柿花和夫 榎本日の出

亀岡哲子 黒田能子 小島蘭幸 太田扶美代

志田千代 谷口 義 遠山唯教 奥田みつ子

長浜美龍 西内朋月 西出楓楽 鴨谷瑠美子

藤井則彦 藤井正雄 坊農柳弘 古今堂蕉子

前たもつ 前田紀雄 升成 好 鈴木いさお

水野黒鬼 三宅保州 村上玄也 飛水ふりこ

村上直樹 森本弘風 山野寿之 平嶋美智子

山口光久 山田耕治 松尾美智代

山岡富美子

おどろ城

毎月24日締切・35句以内厳守掲
載は原稿到着順となります。楷
書で誤字のないようにお願いい
たします。
編集部

川柳塔打吹鳥歌

野口 節子報

東北の地図を覚えた311
ミミズ這う宇宙から見た日本地図
地球儀で私の居場所たしかめる
単線へ乗り換えせよと里の地図
故郷の地名変った日本地図
人間の欲とするまで地図が出来
迷宮へようこそと二幕目の地図
近道と書かれた地図が行き止まり
国境の無い地図つくる秋日和
よばれ膳おしいかったが気を使う
あれも食えこれも食べれと三の膳
赤青黄膳いっぱい母心
お膳立てされて無風の庭に立つ
お膳の上で跳ねて喰わぬ毒饅頭
二の膳の上で跳ねて可愛がった母
どの花も捨てず可愛がった母
ゴミ出し日捨てられぬよう御用心

公恵 勝憲 貴恵 玲子 美代子 泰山 くにこ 富恵 照彦 悦子 玲坊 節子 美ツ千 芳光 克枝 泰輔

見栄を捨て鎧も脱いで軽く生き
実母の味捨てずに受けて夕餉する
ブライドを捨てずにいれば脈がある
プロポーズ捨てて身が生きた花が咲く
聞き捨てする事に慣らされ今がある
農業を捨てた村にも秋が来る
妻だけは捨てることない愛と恩
捨てて捨てて捨てて十七字
君に会う時は時間を捨てて行く
五十年の肩書き外し旅三昧
鬼の面外すとお酒旨くなる
肩書きを外すと羽根が生えてきた
ラブラスにおじゃまの様で席外す
近頃は顎外すほど笑わない
有頂天梯子外されべつちゃんこ
金が要るはなし仲間から外れ
遂に来た黙って指輪外す時

和歌山三幸川柳会

武本

四面楚歌遺影にすぎる懦夫の面
母さんのパズルにずばり嵌る影
ひょいと辻曲れば母の影に逢う
うっかりとしてと影も鏡びてくる
木洩れ日の影は神秘な万華鏡
よく見たら影に尻尾が生えている
やみくもに走り自分の影がない
頼りない影ですあな踏まないで
鏡には父の遺影を越えた顔
呼び鈴を押すとカーテン動き出す

たけ代 久芽代 勝譽 清 善江 美知江 禎元 石花菜 三津子 紀美恵 重忠 みち子 龍枝 和子 美美子 螢 盛桜 碧報 幹子 碧 ひろ子 純子 柳昌 順一 菜摘 かず子 武 かずみ

赤い実が爆ぜて繁栄する孫
栄転の辞令笑いに耐えている
妻という伴侶が福を持ってきた
権花一朝夢のつづきは次の世で
栄転のあなたの背中眩しすぎ
K点を越せば栄える日もあろう
栄えてる人の出入りの多い家
五分あつた何処でも眠るチャンピオン
ウイニングランで王者の顔になり
空高く積乱雲はチャンピオン
百点のテスト一日チャンピオン
チャンピオンになつても低いまの鼻
チームブレイのチャンピオンなら蟻だろ
心技体揃つてこそそのチャンピオン
勉強さらい鉛筆まわすチャンピオン
心から妻に感謝のチャンピオン
五ツ星目指して舌の競い合い
ママよりもパパがレシビのチャンピオン
家庭菜園自分で決めるチャンピオン
視聴率一気上げるチャンピオン
クレヨンのはマンシヨンから昇る
鈴虫あげます張り紙があり裏通り
見上げればゆきあいの空まだ残暑
母は今秋の夜長を編んでいる
第二章が始まる秋の避雷針

竹原川柳会広島

古田

太虚報

震災後昭和の箱が光り出す
一芸はマジシャンが積む箱にある

富夫 宏夫 朱夏 昇 登美代 房代 章子 智三 喜久子 起世子 八重子 保州 東吉 俣子 准一 当代 孝子 イセ 夢子 町子 美子 義雄 絹子 和子 輝恵 規代

千代紙の空箱なぜか捨てられぬ
過去を秘めわたしを試す玉手箱
復興を願う小さな義援箱
陰湿な空気ジョークで和みだす
ジョークもう種切れですか日は高い

ジョーク生む心緩緩窓が開く
プロポーズ本気なのかジョークかな
引つこみがつかなくなってきたジョーク
父のジョークがゆるりと効いてくる枕
ふるりの柱のキズは誰のかな
秋の傷風になって飛んでゆけ

傷だらけ名医を待っている列島
母さんはこころの傷も癒えな
瞳の奥の傷は他人に語れない
笑いなさい泣いても傷は癒えません
電話一本ときどき傷を置きに来る
象も私も回る地球に立っている
ストレスは溜めないように弱音吐く
根性の歪みも治す整体師
コスモスが揺れて優しい笑い声
白少し足して私の色にする
虹が出たいことあると自己暗示
泣いて笑って人は大きくなるのです

松露川柳会鳥取

小西 雄々報

茶碗並べ四季折おりの紅葉柄
旅先で記念に夫婦茶碗買う
新米へ茶碗大盛りお替りだ
夫婦茶碗欠けて寂しい思い出へ

年子 汎美 淑子 栄恵 笹舟 弘子 六口 房子 蘭幸 半徳 千代美 幸子 敬子 笑子 慶子 一路 静風 厚子 栄香 比呂子 史子 千枝

萩焼に一目はれて買う茶碗
手造りのコーヒー茶碗美味さ増す
久し振家族そろって茶碗むし
茶碗むし底の銀杏ますさがす
年金に見合う茶碗を買ってくる

川柳くだの会鳥取

岸本 宏章報

孫が来て爺にべつたり離れない
いちばんを狙ってみるがまだ遠し
船を漕ぐ至福に浸るときだろ
出し過ぎて保湿クリーム塗りまくる
聞かぬ振り聞きたがりやの壁の耳
一番成り先すは仏に差し上げる
日焼止めべつたり塗って野良仕事
アンカーはだれもテープを切らたがる
不法ピラ剥がせぬように貼ってある
週間の予報べつたり雨マーク

南大阪川柳会

前 たもつ報

訛りある女に少し油断する
しみじみと親の身しのお拉致家族
しみじみと思ひ巡らす忠魂碑
要領の良いのが知らぬ間に抜ける
しみじみと母の形見に手を通す
しみじみと昔はなしをする枕
来し方を一人しみじみ秋夜長
歳重ねしみじみ思う親の恩
しみじみと匂う瓦礫に冬がくる
しみじみと母なる大地に思い馳せ

久子 弘子 静江 正光 雄々 寿賀子 邦昭 大鯨 清子 玲子 孝子 仁子 せつ子 宏章 富貴子 克己 タカ子 とし子 庸佑 シマ子 ひさ乃 弘風 あや子 憲太郎 更紗

佳句地十選

(12月号から)

古今堂 蕉子選

カプセルに青い希望が詰めてある
生きている心が愛を食べたがる
いやされる旅に心の鍵外す
首位を追う人とおんなじ絵は描かぬ
禁煙で里帰りした飯の味
かたすぎずやわらかすぎぬいい握手
準備した椅子が足りないうれしい日
ソムリエがささやくように注ぐワイン
激励の母の拍手がまだ響く
書いてまた消したところにある本音

しみじみと同居うれしくありがた
しみじみと鏡の中の顔に惚れ
徒然草人恋ゆるる夜をしみじみと
見えぬからしみじみ怖い放射能
焼酎を飲んで二人の口ははずむ
焼酎を飲みだしたころ座が弾む
焼酎で昔は傷を治してた
酒ビール焼酎ワインみんな好き
隠してた伊佐美息子が空にする
焼酎の魔法にかかる樽の酒
ほんのちよつとボクも参加の義援金
すこしだけ時間下さいそれっきり
きつかけはほんのちよつとびり飲んだ酒
ちつばけな秋を見付けた鯛雲

玄也 菜美 忠良 淳司 忠央 恵子 善純 克博 ルイ子 弘泰 柳弘 和雄 柳右子 修 忠昭 勝弘 志華子 恭昌 あおい 昌紀 正春

ほんの出来心でしたと謝った
気配りのほんのちよつとが暖かい
ひと言ですむのに妻はあやまらぬ
131字お読み下さい九条を
抜けたところから人は従いて来る
老いてなお抜けない母の蝶糸
抜け道に母の匂いが置いてある
何時迄も昔の夢が抜けていく
ひと粒の梅に疲れが抜けていく
自己主張ばかりの会議そつと抜け
最高の気づきばりそつと抜けてゆく

高知川柳社

小川てるみ報

虫の息になるまで伏せていた事実
青虫が石の地蔵にじやれている
しんみりと無常を語る虫の声
一寸の虫流水に這い上がる
引つ懸かるあんたが阿呆と嗤う蜘蛛
標本のトンボが睨む新学期
窓開けて老母に聞かせる虫しぐれ
宿題を急かす晩夏の法師蟬

川柳ねやがわ大阪

籠島 恵子報

心よく留守引き受ける下心
大口の決着終えて初春を待つ
やりがいを探してみれば足もとに
道草で生きたるパワーを積みました
美智子妃のバレード今も忘れない
道草はしない男のまつしぐら
道草で拾った生きて行くヒント

太 郎	集 一	ばつは	ダン吉	東 吉	楓 楽	典 子	弘 子	紀 乃	直 子	一 歩	暖 史	哲 史	典 雄	和 広	美 々	三千世	てるみ	三 郎	柳 弘	集 一
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

大地からの恵み儲ける夏野菜
道草もいいな焦るな振り向くな
儲けてる人余分なことは喋らない
好奇心あふれ道草のトンネル
汗をして儲けるルール子に教え
金儲け下手でも友のたんと居り
決済をつくらとせまる女文字
やりがいを見つけた顔が走りだす
呉れたのはパス賃ほどの還付金
妻介護三年越しを生きてくれ
失恋の心の留守へ入れ込む
ばる儲けと飢えが同居の世紀末
大花火上げる財布は惜しまない
儲け話に乗らないからか火の車
北に住む我が子を今も待つ家族
儲けよりひとの喜ぶ道選ぶ
留守狙いちよつと頭を下げに行く
やりがいは後姿についてくる
あの時の道草で今のほくがある

城北川柳会大阪

伊達 郁夫報

大成の夢に向つて玉の汗
大だつて好みのタイプあるらしい
自殺するタイプじゃないと放つとかれ
ムツリ男と遊ぶラムネ玉
被災地にひとときわ赤く彼岸花
野仏に一円玉の彼岸花
ごめんねと言えは皮肉は出ないのに
位牌みな非常袋に詰めておく
愚痴言わずいつも働く嫁が好き

ルイ子	喜八郎	弘 一	紀 乃	一 仁	修 風	祥 昭	仁 清	忠 央	弘 風	鈍 甲	寿 子	麗 子	賢 子	朝 子	郁 夫	恵 子	亜 成	郁 夫	千恵子	美智子	榮 子	とし子	縣 侘	麗 子	杵 香	隆 男
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

貴男がどれほどのモノかといいたい
原子村玉手箱から放射能
肝つ玉小さいくせにホラを吹く
底なしの陽気へつつかい棒がいる
探すのは階段よりもエレベーター
セシウムにも負けずひまわりの賛歌
まさかの時はまさかの時と腹くる
くす玉が割れて歓声空をつく
グラマーで大根足が僕は好き
金出して口を出さぬがいいタイプ
百歳が十年手帳持つまさか
まさかまさかしゃべりませんようちの犬
気づくだろうたつぷりお世辞言うといた
はめられた玉はきれいに光りだす
ダイヤだと思いついてたガラス玉
お薬にと言われましても菌科の椅子
大吉のまさかをじつと待っている
死ぬなんてことを忘れて飛んでいる
好きなのは母が妻かに似たタイプ
ノクターン溢れる星と虫の音と
核心に触れると喋り出すまさか
千年に一度のまさか生きている
まつたけを送ってくれた老人日
おばちゃんのアメ玉万能社交術
新しいタイプの恋に今燃える
あと少し真摯に生きていく覚悟

川柳花の輪大阪

妻谷 重風報

勝 弘	正 弘	克 己	妻 子	弘 風	求 芽	正 子	宏 子	一 歩	野 鶴	葉 子	集 修	倫 子	たもつ	志華子	孤 遊	かずお	直 樹	柳 弘	賢 子	典 子	和 夫	朝 子	ルイ子	ミヨノ	一 幸
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

しっかりと聞いたつもりが覚えなし
淋しさをすっかりレンジで温める

風 泰子

二人づれ雲にかくれたお月さま
万全に隠したへそくり場所忘れ

やすの 三一案

好きな子に見つかる様にかくれんば
隠すこと知って娘は花になる

勇太朗 克衛

すつくりとした顔なんか隠してる
こんなとき怪物総理でてこんなか

重風 敬子

セシウムという怪物に悩まされ
怪物の爪跡だらけ雨列島

照好 みちる

怖いのは見えぬ怪物放射能
川柳塔唐津佐賀

仁部 四郎報

どう見ても悪人じゃない笑い皺
太陽に恥じること無い無位無冠

勝視 高明

無い袖も振って孫へのお年玉
老人会会費係を先ずこなす

輝夫 四郎

一万円出てきた古着捨てられず
年毎に身に沁む妻の有難さ

實 蜂朗

川柳塔おっぱい吟社(香川) 川崎ひかり報

低金利心配するほど金がない
利回りに誘われ元も見失う

放任 あきら

人生の勝利者となる米寿まで
親切が過ぎてお茶まで出す羽目に

いさむ はつ恵

政治家に民のカマドが見えてない
一三跳び越えられぬ溝がある

ひかり よしみ

金色の波ころばせている入り日
弘

川柳塔きやらぼく鳥取大塚 恵子報

秋風は人なつかしく人恋しい
生かされて夕焼空で立ち止まる

ゆき 恵子

ナンタナンタと小豆の虫とわかるまで
気が付けば何も出来ないでくの棒

春枝 寿々子

被災地を照らして月も涙する
しわよせが老いと三つ字でやってくる

麗 亜弥

朝鳥病む友思い遭る瀬ない
人前に出て己の心耕す

鶴子 喜周

丁寧に歩く私の道だから
励ましの潮の匂いに秋の風

未延子 瑞枝

うかうかと芒の声を聞きもらす
川柳塔なら

千代 瑞枝

閑同士幼馴染みと長電話
退屈なニュース続けば世は平和

坊農 柳弘報

オレ流でやがて花道飾ります
握り飯と空気が美味しいハイキング

彰治 隆子

握り飯はつと安堵の味がする
勘所おさえ幹事の名調子

(中) 勝弘 紀雄

無能だが勘を頼りに世を泳ぐ
不覚にも握り返した手を悔いる

ふりこ 郁夫

食の量多くて悩む冷蔵庫
初対面やがて親しくなる予感

賢子 とし子

木の苗がやがてやがてと思う森
退屈を飽きると風と戯れる

博一 堅坊

勘違いなんて言わさぬ核ボタン
赤い月やがての地球思い遣る

次郎 隆之

握っても直ぐ逃げていく諭吉殿
そのうちに泥鰌の鍋もつつかれる

(印) 弘風 勝弘

夢違仏微笑の果てにあるやがて
古希すぎて益々妻の勘弁える

恭昌 修

お人好し勘の鈍さが命取り
学歴はないが退屈のない読書

比呂志 弥生

ベン先がわたしの心握ってる
退屈な時は決まって死ぬ話

信子 理恵

勘にぶい私気楽にやっています
残り時間もうありません抱きしめて

一風 ばつ

退屈なふり一声を待つている
わだかまる心を許し合う握手

ダン吉 良一

あの人の秘密握っているわたし
少年のやがてに翼生えてくる

太郎 富子

退屈を知らぬ手帖がよく弾む
千の風わたしもやがて風になる

朝子 隆盛

以上でも以下でもなしでやがてゼロ
やさしいね別れが近いのでしょね

洋子 真理子

五分粥に退屈感が疼き出す
握ったら握り返してくる笑顔

順啓 柳弘

川柳ふうもん吟社鳥取夏目 一粋報

男と女の平均台を踏み外す
海の色少し残してサンマ焼く

洋々 無限

失恋の傷引きずって引きずって
下品さの中にこそある真実よ

一瑤 弘康

長引くぞ自慢話が始まった
ひょうとくる言葉が深い溝作る

節子 凱柳

拉致の子と何をトレードしたいのか

振作

下品でも懸命に生き燃えている

千代

下品さもコテイングして婚活だ

栄子

ひょうとくる人は弱者をよく見つけ

志延

ひょうとくるな山を動かすかも知らぬ

美恵子

下品だが何故かみんなが寄ってくる

雅女

指折って拉致の子を待つ親が古い

殺

ひょうとくるな君は出来るか蛙飛び

とも湖

トレードで二軍選手に日が当る

地佳平

嫁さんは二度とトレードなどするな

妻子女

大臣の下品な舌がもつれたす

金祥

長引くか相討ちのキズ浅くない

善夫

情熱の割りには何も出来ません

一京

大好きな手にはめられて指輪

みゆき

趣味一緒夫婦げんかも五七五

清信

毒舌が吐ける親父はまだ元氣

孝男

風止んで私の行方見失う

行男

ひょうとくるなボケも加齢もすぐそこだ

菊香

ひょうとくる孫の台詞に微笑こぼれ

回春子

離婚せずトレードに妻出したが

大鯨

トレードされて古巣の弱み知って勝つ

由美子

愛情を計る物差し古くなり

春名

この度は長引きさそうだ妻の乱

秀四

避難所の長引く辛い夜が明ける

清帆

品のない唄が宴会盛りあげる

蟹郎

蕎麦する下品な音も味のうち

義徳

老々の介護トレードして欲しい

昌鼓

トレードで自分の価値を思い知る

主一郎

プライドが老いてますます鉄になる

一粹

川柳塔鹿野みか月(鳥取) 福西 茶子報

門出の日までは確かに竜だった

盛桜

竜の額かけて待つて福の神

くに子

一部落墓地になるよな過疎の村

いさを

B級グルメ流行るとみんな列につく

美ツ千

流行の風邪はマスクで止めておく

久枝

一畑薬師の柱を竜が九重に巻く

重忠

助手席の足がブレーキ踏んでいる

宣子

焼酎の湯割り水割り流行らせる

螢

竜の目にならまれ正座する客間

茶子

日本語が言えなくなっている巨匠

はお

ぼろぼろの日記くつきり愛残す

彩子

朝焼けの雲がだんだん竜に化け

照彦

寄り道はダメよダメよと赤い点

孔美子

車椅子同じ目線の手を添える

弘子

善人で流行る器にすぐはまり

八重

流行にすぐのれるのは風邪のとき

西和子

近頃は歩いて来ても車代

実満

世に歌を流行らせている潮の渦

富久江

百万の裸婦の巨匠にひとめ惚れ

満

岡本太郎はいつも爆発する

小鹿

一筆で富士が聳える巨匠の画

惣子

流行りとは破れズボンのいい男

節子

台風で竜の落とし子迷い込む

美代子

過ぎ去った流行りのコート今も着る

和子

百才の巨匠に学ぶ処世術

みさ子

我が娘にも巨匠となる部屋がある

かおる

龍の絵のふすまで幼児眠れない

露子

名僧のいのち巨匠として響く

永子

竜巻や良いも悪いも持ち去られ

京

流行の健康食を貯めている

忠良

巨匠の絵展を組んでも分らない

蟹郎

川柳塔みちのく(青森) 小寺 花峯報

初恋の君を想えばほのほのと

小とみ

灰汁抜けてほのほの余生生きて

一湖

花造り好みの色に満足し

つとむ

淡泊で波風たたぬ夫婦道

綾子

母論す言の葉にあらあたたかさ

きよし

仲間去ってもまだ唄えたる理想論

吞舟

血圧が強気の僕をたしなめる

洋子

手を洗い直して頸を撫でている

ひとし

一人居の頸の動かぬ日が続く

美鈴

わだかまり払ったあとの雨上がり

芳生

頸引いてトップを走りテップ切る

隼人

「はんだよ」日暮れに合やすはの声

則彦

シャボン玉弾けるまでの愛の酔う

一呑

陽だまりで笑いが弾む車椅子

ふさ

淡泊な味に慣られ長寿みち

花匠

頸だけが動き顧問の役をする

井蛙

二階からシヨパンが洩れる雨宿り

黙人

しがらみを軽く包んで頸軋む

花峯

頸髭が思案している不況風

慕情

午年の女房が蹴る糞親父

一花

まだまだと古桶は喇叭を吹きたがる

磊

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

青い空おいしい空気の深呼吸吸

英子

二次会の幹事は下戸に委せられ

ちよえ

故里の空氣慕つて来た雀
空氣からはみ出しているサングラス
なかなか空氣がよめぬ嫁姑
手をひろげ朝の空氣の有難さ
パソコンに義理と人情置き忘れ
募金箱小さい銀貨の音もする
満天の澄んだ空氣をもらう幸

長柳会大宛

坂上

淳司報

セシウムに取り残された墓哀れ
孤独から脱皮している蟬の羽化
幸あれと嫁ぐ娘の背を流す
叱られる娘等居てこれも幸せか
錆ついた手足と脳が守る老い
呆け防止孤独の食事自分流
子ら巣立ち孤独楽しむ一人酒
いつだつて笑つて暮らす医者疎遠
大笑いして細胞に活入れる
この町に笑い声はと耳澄ます
針と糸ボタン付け替え愛芽生え
被災地の子らもサンタに夢託す
ひと時の孤独忘れる酒の席
新人の不安な声が初初し
偏屈で友もできずに孤独の身
孤独だが氣楽三食昼寝付き
大笑いすれば頭がかるくなる
アドバルーン小春日和に欠伸して
山越えて笑顔がそつと拭く涙
茹で蛸になって出て来たサウナ風呂
喧嘩する相手がほしい一人旅

かつ子
はるみ
好栄
恵美子
澄子
博利
清泉
淳司
エミ
けい子
三和子
光弘
マサ
正子
隆彦
ふみ
弘光
加修子
よしこ
よしお
ヒロ
武男
明子
正一
和代
靖博
輝子

友ひとり居れば孤独を免れる
飲み放題やめた同期の名幹事
戦力外と言われ燃え立つ自尊心
クラス会作り笑顔をする彼女
スマイルという最高の化粧法
最強の武器はあなたの笑顔です
人間を極め独りで渡る川
この場合笑うしかない勘違い
長生きのおまけについてくる孤独

川柳家はしら(愛知)

関本かつ子報

呑み過ぎてゆがんだ部屋に倒れこみ
ゴキブリのお蔭で整理できた棚
年下の仲間パワーを呉れる春
メンテナンスタ家も体もいる齡
欠礼に何か疎遠になりそうな
アベマリアいつも癒され枕元

ロース川柳会(兵庫)

木村貴代子報

煮詰った鍋の小言を聞く夜更け
四等でもニコニコ笑う大物だ
明日のためこでピリオド打つておく
七五三ネクタイ結び子も紳士
考えて考え抜いて無駄を買う
今のうちいっぱい遊ぶことに決め

川柳塔まつえ吟社(島根)

相見 柳歩報

天の雫は亡母さんの涙かも
ケーキにはハートのしずくまでおく
米安値汗のしずくが怒つて

孝代
直樹
敬二
正博
正美
富美子
久美子
和子
芳野
まみ子
遡行
幸子
美千代
雅美
かつ子
年代
貴代子
てる
みつ子
哲子
義子
文子
聡美
長吉

酸性雨のしずく静かに花濡らす
マンネリのはずくを受けている器
ひとしずくむらさき足して味をしめ
少年の汗のしずくを信しよう
幸せのしずく6Bからもう
スイッチポントースターポンはずむ朝
胸のスイッチおまかせで踏む八十路
切り替えがうまいスイッチ持つて
スイッチバック動きの鈍い粗大ゴミ
スイッチパクしながら生きた七曲がり
ぐつたらのスイッチ入れてボニョになる
担がれているとも知らず人がいい
身にあまるものを担いで蟻になる
担がれて後放られる予感する
今の世をしつかり担ぐ総理待つ
担がれて所信曲げない肝っ玉
屋台骨担いだ肩も今は老い

ラブレター終りの言葉点・点・点
百点のテストは見える子の笑顔
点よりも面で話が飛んでくる
点滴のメロデー聴いて眠る日々
一点を見つめた眸から火の匂い
点と線結んで仲間らしくなる
お互いの欠点徴が生えてきた
空に点アルマゲドンじゃあるまいか
悪口の連鎖を俺の場所で切る
切り捨てた尻尾宇宙と通信か
切り返す言葉もんしる蝶になる
締め切った窓から鳥が呼びにきた
今の世も松の廊下はおわします

千里
熊四郎
政子
桂子
禮子
ゆき
幸子
知恵子
注湖
治代
寿代
町紅
涼子
ちえこ
左余
浜丘
幸代
久絵
草庵
七七
多喜
美智子
昌枝
芳山
柳歩
玲子
博子
久枝
芳恵

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

力添え欲しく灯明かかさな
力瘤が僕の自信を知っている
呱呱の声力のかぎり母を呼ぶ
世界不況いま国力が試される
実力がないから人の後を追う
美しく散るまで力残しとく
破れても悔いなし力出さった
型を破って少し遊びを入れてみる
破れてはまた貼り替えて傷のあと
発見の芽は常識を突き破る
森ひとつ消えて童話が崩れたす
紅葉の森へ五感が溶けて行き
人生の森にも絡む葛蔓
地球に託び森を描いて植樹する
幼き日迷った森がゴルフ場
何処へでもお供しますと握り飯
やさしきは他人の飯も食ってから
幸せな話ひろげなまぜ御飯
新米の湯気に不安もちよつとある
母退院バツと華やぐ晩御飯
お構いなくといつも来るのは御飯時
三食をきっちり食べて丸くなる
プラスアルファアルファ一分の卵飯
風雪に耐えたお米だ気にしない
フクシマの御飯でよいと仏さま
負けん気の強さを隠す京訛
知事選の投票私の意志です
阪神へ来いマージンとタルビツシュ

穩夫 太郎 能子 いさお 勝弘 朱夏 克己 信子 武宏 和子 野鶴 准一 敏子 秀夫 篤 久 弘泰 紀乃 隆昭 たかこ 美世子 柳弘 丹吉 一步 桃花 シマ子 六子

被災地は進んでますか冬準備
アイフォンで平成二宮金次郎
朝いちに元気をもらうカーネーション
都構想麻酔もなしに手術する
ヤンバルの森を壊すな基地づくり
この国が浪に呑まれる夢を見る
濡れて行こうと言えなくなった放射能
ご飯でもいかがと誘いたい熟女

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

風ですか母さんですか呼んだのは
年度末もしや異動か闇の渦
情よりも恋に焦がれて悶々と
両方をたててまあるく痛み分け
十七の音字に弾む君の詩
空耳かもしやと思ひ振り返る
言い訳は無駄あやまれば落むものを
五感とき脂がのつた杖歩行
いつの間に自慢の瞳白内障
お姉さん呼ばれてもしや私かな
もしやお宝鑑定に出し夢消える
武庫の荘人間国宝御座候
可愛いと頬ずりをする大きい瞳
追い込んでいらん事まで知りウツに
お喋りな女もしやの妻の声
ジャンボくち若しやが怖いから買わぬ
青い目の瞳になったコンタクト
片言の孫の言い訳聞いてやる
言い訳を考えながら終電車
と忘れが多いもしやと気にしてる

美智子 昭 美花 紀雄 正 純甲 保州 まつお 靖鬼報 ひとみ 健二 重幸 初音 洋子 幸香 よしこ 泰子 茂幸 りこ 野薫 イサミ 里江 柳明 勝巳 靖鬼 あかり 祐康 耕治

大空の心が映る児の瞳
もしかして踏んでしまった蟻の列
親戚を何度も殺さずする休み
瞳の中の故郷やさしい顔をみる
意外性あるので期待ばかりする
すみません私ちょっぴり痴呆症
傷つけた地球に言い訳では済まぬ
大津波痛さを抱いて冬に入る
顔見れば心が痛むひとがいる
おねだりの孫の瞳に断われず
頂こう君のほっぺのご飯粒
恍惚の母も瞳は澄んでいた

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

海峡を越えてあなたに逢いにゆく
支え合い共に越え行く愛の坂
吃水線こえると愛が冷めてくる
さりげなく無理させまいと愛妻家
震災で花火の様に人の愛
動物の愛の深さに及ばない
近き物が夫の愛に気付かない
追う夢あり損を承知で生きた
ぐらり傾く塔です損をしたらしい
損をした分だけ女神はほえんだ
取り返すつもり損が倍になる
損も得も織りませ人は生きている
人生のルールに垂らす潤滑油
泥くさいドジョウになって生きてみる
命乞い鰻めるぬる手に負えず
ぬるぬると白寿をめざすカタツムリ

比ろ志 和月 朋月 美籠 見清 正和 キヨミ ヨシエ かずお 五月 菜々子 奮水 大輪報 准一 輝子 よしこ 秀子 克子 俣子 翠子 あきこ 和香 美子 寿子 緑良 登美代 佐一 徑子

美しい夢へエステの泥を塗る
護身術なめくじ塩をくぐり抜け
とおきの言葉が少しぬめりだす
臥薪嘗胆とは糞虫のことだろう
風まかせ糞虫揺れて天下知る
糞虫もルンルン今日は日本晴れ
鬼の子に学ぶ住居の通気性
糞虫の平和は糞の中にあり
糞を剥き取られた虫が私です

はびきの市民川柳会大阪 徳山みつこ報

節電の冬は明るいベスト買う
来年は新幹線で暮参り
北海の寒さが染みる猛吹雪
龍馬さん海のものこの国を見る
海蛭我を招くや父母のごと
海の青苦心の跡の絵の具皿
近頃は枯れすすきにも似た二人
惜しみなくお辞儀で招くすすき達
月見より団子食べたいすすきの穂
飛鳥路を歩くすすきを道連れに
サライズに踏みきれないプロポーズ
驚くのは早い奥の手見せてない
スクープの記者も驚く生現場
還暦の友が再婚した便り
おばちゃんの素顔仰天した鏡
百歳の現役医師のスケジュール
孫の靴ビッグサイズに驚いた
フリーサイズという気楽さに馴れる
フリーサイズベルト一本持ち歩き

富美子 紀久子 大輪 保州 英子 泰女 小雪 紀子 夕胡 美喜 敏 雄太 フジ 久仁子 庸佑 アヤ子 りつえ 淳介 いさお 喜久子 登志子 猿沓 ヨシ枝 六点 みつこ 恵子 扶美代 悦子

連れ合いの指輪のサイズ言えますか
風呂あがりビール小瓶が手頃です
子等の目が光るメロンの五等分
人間のサイズででかい口をきく
年金の暮しへサイズ書き替える
きつかけがあつて大きな輪の中に

京都塔の会

都倉

求芽報

つまると他人同士が屋根の下
園遊会やマトナデシコ満開に
スマートフォン携帯やつと慣れたのに
真子さまの笑顔にティアラよく似合う
年金を貰えるうちに逝くつもり
戦犯モノだ電気屋のキノコ雲
すがりつく目で見ないでよ野良の猫
転んでも手助けしない親の愛
神様のなやみ離婚が多すぎる
一命を助ける火だるまの覚悟
助けたいけれど私も溺れてる
助け合うふりも疲れるフルムーン
究極の助っ人やはり金だらう
叶うなら映像戻し助けたい
出来るかな助け呼ぶのも逃げるのも
ありありとわかる嘘だがまあいいか
食欲の秋体重計にありありと
ありありと男とわかるのど仏
ありありの詭弁そろえる議員さん
大物で箱には入らない器量
重箱の中身が違ふ暮らし向き
どの箱にも断捨離の種芽生えてる

光男 章司 ちづる ダン吉 泰子 美代子 ますお 満子 宏子 益子 公子 求芽 鹿太 綾子 篤子 ふりこ かずお 則彦 美義 義昭 葉子 朝子 昌乃 英旺 文代 欣之 庸佑 比ろ志

桐箱でもつともらしくなる茶碗
初恋も出世も詰めた玉手箱
ゴミ箱の係りは僕と決まってる
重箱はベーターベン シンフォニー
何を入れられても文句言えぬ箱
旧友は疲れたころのくすり箱

川柳同友会みらい(鳥取) 吉田

陽子報

この映画泣きそうだから一人観る
きつかけを求めあちこち糸をたれ
欲しいなあ頭良くなる処方箋
佳き日は玄関まわり化粧する
責めないで大きな声は親ゆずり
階段が今日の体調見てくれる
被災地に啼いていてくれ秋の虫
明日にすだく虫の音聞き分ける
道きかれ住民意識湧いてくる
嫁姑未知の関係案しもう
親離れ出来て子離れできぬ親
決断をすればページが動き出す
改革は便利になると勘違い
飛行雲ふと詩ころ旅ころ
天災を救えぬ神にまだ祈る
古い師過去の事だけ大当り
一日の心を撫でる茜雲
あの時がチャンスだったと後で知り
この国の余命占いたくもなる
放射能帯びて稲穂が軽くなり
黒船に乗り押し寄せるTPP
腰低く歩く明日へのシミュレーション

福子 肇 泰夫 昭 啓子 弘之 久司 みどり 章子 ふみ子 温子 美恵子 純宏 寒之 陽子 ひとみ 千恵子 安子 三郎 嘉子 敦子 みち子 慶一 五百子 正雄 華蓮 菜美 勇

国宝の壁に落書きしたくなる
いずれ軽石になる骨いたわって
不況風のちを軽く吹き飛ばす
三億円のチャンスチャンスのまま終わる

岩美川柳会鳥取

石谷美恵子報

一 眸
和 代
遊 子
公 弘

今日のわたし石つぶてでも甘んじて
即席でもらった嫁に仕切られる
即席でアドリブ入れる名子役
即席でウィット溢れる語り口
庭の柿小鳥が先に試食する
ああうまいメタボ忘れる鍋の秋
新そばを打つ手さばきも母の味
目を閉じて噛みしめよう試食会
年金で食わせてもらって御蔭様
神さまのいじめたろうか地が揺れる
いじめてた過去が消えない胸の奥
妻ふみでいじめた苗は強くなる
父兄が今や教師がいじめられ
寂しくて友達いじめなお孤独
いじめてた友と出会う今ほ部下
いじめつ子年は移ろい今は部下
標的を自分に絞るアスリート
前世でいじめられて強くなり
いじめられはじめて悟るいじめつ子
生き上手尺取虫の屈と伸
充電をしなくて空へ背伸びする
図書館に眠り薬がまかれてる
鯛雲大漁願う漁師町
踊りの輪だんだん小さくなって冬
責められて返す言葉に四苦八苦
没の句に未練があつて自由吟
無宗教先祖をつなぐ橋がない
清濁も水多すぎて溺れる
鏡見なさいそれがいつもの貴方なの
伝い歩き後で両手待機中

いわゑ
武彦
基輔
勤
千賀子
弘

非常識多数を占めて闊歩する
月の兎を信じてる児の瞳がきらり
他人には愚かに見える愛も愛
秋夜長猫の背なでて見るテレビ
西宮北口川柳会兵庫 小林 わこ報

浩司
美穂
無限
みつ子

忠

敏夫

折杭

浩司

朋月

直

耕治

紀乃

光子

淑子

弘子

遼子

武臣

美代子

りこ

基輔

盛夫

哲夫

正和

ひとみ

しげ子

秋果

親の目にまだ幼さの娘が嫁ぐ
味が良く黙っていてもよく売れる
盲導犬よけいなことはしゃべらない
黙っていたが心機一転すると言う
浴衣着て下駄履いてゆく渚まで
どんぐりの野心高下駄履いている
日本の文化を守る下駄屋さん
父よりも大きな下駄で闊歩する
軽いけどすぐちびてくる桐の下駄
ニールック日本の夜明け下駄マント
嫁に来た下駄が今でも箱の中
バランスの悪い収支に苦労する
家族の和バランス役の母が居る
お喋りと無口バランス良い夫婦
白いかの刺身に生妻あ日本
見栄ばかりはってバランス崩してる
天地人バランス保ち咲かす菊
亡き父の愛用の下駄履いて見る
熱い鍋居間まですぐそそろそろり
女三人黙っているは酷なこと
黙っていても目と眼と瞳とは通じ合う

孝男
主一
完司
はるお
螢
一瑠
重忠
忠良
蟹郎
公子
菖子
一京
節子
たぬ
幸安
一粹
幸子
昭弘
和子
雅女
美恵子

鏡見なさいそれがいつもの貴方なの
伝い歩き後で両手待機中

盛夫
利子
勝
淳
茂
繁義
淑子
洋一
政一
和郎
義博
忠貞
康子
妙史
弘子
保雄
千代子
和子
能子
武臣
登美子
照子
弘

男なら散り際だけは間違うな
散り際が大事と選別に諭吉
激論が火花散らしている会議
失言で散る大臣が後絶たず
一合で乱れる友の守りしてる
いささよく散らずしぶとく生きてやる
追伸の乱れた文字に会いに行く
散骨がいい紅葉の頃ふと思う
美容院せつかくの髪風が吹く
TTPって何賛否乱れ飛ぶ
散りぢりにさせられた人皆無口
散り散りの家族の絆掲示板
スポーツ紙にてたため記事が乱れ飛ぶ
深酒すだけど家に帰れます
玄関に客手櫛でなおす乱れ髪
四角だと整理整頓思うまま
寂聴さん四角い心丸くする
幸せな花は四角に咲きもする
真四角な顔で頑固な父でした
寅さんの四角い顔に会いたいな
直角にしか曲れぬ男の千鳥足
金星に座布団が舞う国技館
バラバラは踊れるように踊れない
バラバラと氷雨仮説の屋根を打つ

秋果
勝弘
毅

バラバラと喪中ハガキが届く鬱
バラバラの年金バラになる予感
古日記にバラバラ残る夢の跡
右脳にもバラバラ塩を張りつける

こはしてもいいよと母を抱きしめる
シャンブーがなかなか減らぬ髪量

鍋物にまあるい豆腐腐したことない
本棚の本が私に火を点ける

ペアルック女の方が着せたがり
思いのたけ書いた筆勢的を射る

錆びてきた脳によくきく赤ワイン

川柳クラブわたの花大阪 西川

夢いっぱい包む風呂敷薬結び

秋の風老境なれど道半ば

いもの葉にキラリと光る露泉かな

大猿の仲でも今は共白髪

心する母なる海が人をのむ

恋人はやはり可愛い方が良い

階段の手摺りが年を知っている

理由つけ絞る取ろうとねらう税

母介護昨日のようが早や五年

国会も仲良くやつて犬と猿

信頼の結び目魔法掛けてある

旅に出て高い建物先ず探す

読み聞かせの絵本は長いドラマです

ヘルパーの白い腰にもコルセット

あと少しカベ塗り終えて私です

自由には自由の憂い萩の露

キヨミ

宏造

比ろ志

順子

麻也

茂

伯備

無限

美津子

千代

めぐみ

義明報

知佐子

民

博子

愛子

奈良司

宏至

いつみ

宏

義明

正春

俊子

はじむ

晴美

浩三

孝子

和子

大津波奪えるものを皆奪う

不機嫌な医者顔の色見せしめう

小さな幸を今朝も結んで夫婦著

よい知らせやっぱり妻に先知らす

川柳さんだ(兵庫)

堀

七十億宇宙は広いどんとこい

湯けむりにしっとり肌を期待する

心情を酌んで差し出す缶ビール

内緒だと耳打ちされてからの乱

腹いせに買ったバッグは内緒です

無駄な日は一日もないカレンダー

去年の内緒に錆が浮いてくる

辞書にない造語が増えていくふたり

最後の恋だから守りたいのです

誤字だとは言えずにそつと辞書を見る

米どころ旅の夜長をひとり酌む

あのねえと酌をするのはスネカジリ

年末が何とせんのに戸をたたく

熨斗を替えもらった土産お歳暮に

めくばせで通じる友がいる安堵

湯上りの匂う浴衣の横座り

ゆつくりと歩いて風の色を知る

晩酌にボーショレヌーボー待ち侘びる

晩酌をやめると脳が狂いだす

恋すると美人の定義変化する

大都市の地下に広がる別世界

一度だけひねってみたい消火栓

晩酌を妻の小言をアテに飲む

ますみ

美代子

耀一

一風

正和報

順子

宣子

キヨミ

淑子

喜代子

美和子

紀乃

菜々子

ひとみ

ちあき

真由

雄司

健二

雄太郎

光久

晃

茂山

雅司

朋月

好文

一泉

忠

祐康

雨の日の遊び相手はやはり雨
雨の日はイブモントンと独り酒

富柳会大阪

古田

千華報

解放感欲しくてこの山を越える

深く散ったなどと母さん思わない

深く散りたい余生どの辺り

パウー全開まだまだ火の坂を走る

面取りも覚えオトコの台所

心底が笑うと涙溢れ出す

開運を願う絵馬にも誤字がある

夏過ぎてもみじの仮設棟

ふところの無念をバネに炎の鼓動

父さんの手垢が残る重い辞書

美僧行くもみじの道に香薫る

バレットに秋のポーズをゆだねてる

母の背の重さに秋を食べつくす

叫んでも呼んでも遠さかる景色

朝焼けに小さな秋を見つけた

ポケットの秘密が重くなってきた

ふところに恋人入れて持ち歩く

心血をいつも補う回り椅子

ふところが渴いて明日を見失う

許されてからの歩幅が重くなる

窓を開けもみじの赤を引き寄せる

カーン押しママのふところ探るババ

ぬくぬくと抱かれ私はまだ卵

曼珠沙華秋だきだと髪染めて

のめり込むふところの奥がない

正和

哲男

洋子

ダン吉

初太郎

帆子

明子

孤遊

海童

七朗

紅紫朗

登朗

千華

高鷲

晴美

アキ

壽峰

和子

寿之

佳子

信子

鬼焼

千恵

武人

奏次

彦次

欣次

発想を変えて見ようか逆上がり
嘘一つ消せないままに陽が落ちる
一膳の箸が重たい秋夜長
散つてなお水面をアートするもみじ
霜葉が馴染め山を駆け下る
微力でも無力でない面をあげ
押し返す力を秋の日溜りて

米子住吉川柳会鳥取 渡辺多美子報

しきたりで村がふくらむ秋祭り
青空にコスモス咲いて秋です
乗り降りも出来なくなつてやがて冬
悔やむなど教え堂塔凛と立つ
青空に冬の訪れ忘れそう
主夫業に電子レンジの有難さ
やれやとシートベルトのクセがつき
四人組温泉旅行予定組む
チャランポラン川柳で脳ストレッツ

岬川柳会大阪 八十洞庵報

すつぴんで抱かれた孫が恐怖顔
大海原哀飾を知らぬ児がさわぐ
観覧車目を瞑つて乗る恐怖症
皿に盛る御馳走色取り絵のごとく
批評しながら楽しく回る作品展
いまいちと思ふ手作り喜ばれ
つき合える孫のテンポに乗り切れず
列島を恐怖に包む放射能
幼児画に色のヒントがかくれんぼ
何もかも飲み込む水の恐さ知る

よしみ 華 恵 深雪 未知 伸雄 森子 すみえ 登美枝 未延子 公一 多美子 紀の治 宏之 欣子 正二 寛 琴 貞夫 富美子 悦子 令子 とみ 富美 茂平 年子

作品展僅れの人座つて
この作が没を知りつつ書くつらさ
作品が思わぬ出来で満足す
二十四時どこかで地球が揺れている
自信作鱈の佃煮につめてる
読み返せば若気の至り赤面す
児童画に未来の夢が溢れてる
良い作を考えすぎて邪念わき
東北の被災に続く雨荒し

翠洋会大阪 佐々木満作報

ごめんねは日が経つほどに言にくい
風向きが悪いこっそり席を立つ
フクシマが満身創痍冬に立つ
いつの日に帰宅の目途が立つのやら
立つ座る口も揃つて今が旬
立つ位置を少しずらしてカメラ見る
ひとりにはひとりのいくさ風にたつ
省エネを殺し文句に売る企業
昔から我が家はエコに徹してる
エコライフこたつ湯たんぽ大はやり
じつくりと話そう秋の夜は長い
迷う子にじつくり聞かす人の道
じつくりと未来見据えている野心
じつくりと子育て出来ぬ共稼ぎ
じつくりと着込むおでんに燭をつけ
重苦しい空気に耐える膝頭
石庭をじつくり眺め無に浸る
じつくり生きる句読点打ちながら

和香 清一 圭史 峻史 洋子 和美 東吉 圭子 洞庵 楓楽 理恵 富子 浩二 すみ子 蕉子 志華子 真澄 舞夢 日の出 千歩 照子 満作 知之 弘子 正雄 紀子 希久子

PPPじつくり練つた振りをする
原発の無い分知恵を出し合おう
傷口に触れずに帰る思い遣り
撒き餌かも知れぬ敬語が多すぎる
背をかめ子供目線で見える高架
目標は母のふところ父の背な
まだ傷は浅いと髪を染めている
でかい夢切羽詰まった気にもなり
頭いた又正月がやってくる
好き嫌い越えてなくてはならぬ人
法字びその網くぐる策を練る

川柳塔すみよし(大阪) 岩崎公誠報

指切りの指のぬくさが残つて
裂かれても駆け落ちしても添い遂げる
ゆびずもかわいいおててとはつけよい
傷口がまた裂けるのに恋をする
ささするめ囁んでしゃぶつて月見酒
秋深く辛く柿でころころに
存分に寝かせてやれと日曜日
天国行きキップを買つたが反古になり
世話人の気くばり映える宴の席
やばい時まる虫になり逃げようか
人恋し果がころころ町へ出る
ころころと笑う女に油断する
天変地異それでも昇るお日さまは
指と指合せて拝む三蔵児
この指に止つた人を信じ切り
おにぎりが転がりワツと歓声だ
激流に生きたわたしの丸い石

桃花 善昭 捷也 げんい みつ子 義彦 公平 恭昌 公誠報 のん子 五月 伸子 シマ子 温子 順子 庸佑 篤子 妙子 直子 たかこ 一歩 半銭 舞夢 日の出 ばつは 和代

指人形笑顔の家族そろいます

ころころと転がり噂尾鰭付き

もみじ手の十指可愛いわらべ唄

左指少しパソコンお手伝い

バーゲンに妻のテンションまた上がる

ころころとチェンジしてる好きな人

農に生き大地と仲のいい十指

夫婦仲裂けてなるかとテープ貼る

影絵つくる指かた民話こぼれ落ち

格差社会底辺だけが裂けてる

無党派の十指が決める知事市長

人生を回り舞台で踊らされ

川柳大阪

長井

善純報

同情が愛に変わって四十年

人情が大震災で甦る

愛情より金が全てと女言い

傷ついた情景戦争を憎む

男で情はしつかり染みている

愛情を一杯受けた児の笑顔

情よりも絆大事に我が家族

置き去りにしていませんか人の情

人を恋う歳がいくつになろうとも

義理と人情の間で脱皮せず

手を合わせ神戸に向かい十七年

十八に戻せとなんかそれは無理

父も居たアルバムの中母の笑み

我が人生過去振り返りこんなもん

美しく過去のかげらが艶を帯び

美世子

昌紀

柳弘

勝弘

まつお

芳香

朝子

裕之

桃花

蕉花

公誠

遠野

善純報

彦太

喜楽

川童

比呂志

信醉

かよこ

とし坊

柳弘

一步

紀雄

珠生

五月

万紗子

功

柳昌

政権の過去を悔いてか遍路旅

スリーサイズ昔は自信あったのに

過去のことでと割り切れぬ私です

年金まだ今日の夕飯シンプルよ

シンプルな言葉の裏に野心見え

シンプルに生きて老後へ貯える

シンプルな讃岐うどんにある人気

シンプルな味付けそれがうちの味

シンプルに生きた私はアナログ派

歳かさねシンプルライフ板につき

シンプルに伝えられない恋心

弁当の残りが母の昼ご飯

シンプルな服装今日は参観日

シンプルな名刺でメモにされている

シンプルでいいから欲しい妻の愛

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

薄いかももつと足してよ焼酎を

ももつと年は取っても欲消えず

私の耳へもつと悲しみ捨てなさい

生きるなら良いこもつとしていこう

もつと呉れワリカン酒に歯止めなし

被災地にもつともつとの思いやり

もつとほしいあの世では紙切れだ

我慢しても心はドクターの加齢臭

ドクターもおの傷は治せない

自分さえ出来へん事を言うお医者

よく歩きよく昼寝して医者いらす

ドクターと巡り合うのも運不運

いつふみ

芳香

勝弘

美世子

鉄心

一風

すがお

花笑

和

堅坊

義明

照月

まつお

善純

勝弘

喜代子

婦美枝

雄太

清之

フジ子

昌子

一箇

雅枝

扶美代

栄

アヤ子

隆昭

淳風

幸子

ドクターもメタボになつて顎二重

眼科医のめがねを拭いてあげましょか

孫のよな医者に不摂生しかられる

マイナスイオン求め六十路の山ガール

疑問符が解けて森から出る安堵

森の中古城がロマンかき立てる

メルヘンの森へトトロに逢いにゆく

マンションに取り囲まれた里の森

枯葉舞う森は静かに冬支度

ふるさとに鎮守の森がある安堵

木の実降る明日香の森は秋深し

鎮守の森秘密の基地はセピア色

試し書きもつと続けてふたりの名

ボケ防止の仕事が溜まりウツになる

もう一步譲り折衷案目指す

ブレーキの無い自転車のような人

瓦礫の下にもつと生きたかった命

岸和田川柳会(大阪)

米富

淳風報

月に居て是非見てみたい地球の出

自分史に紅葉の彩の章書む

仕事なの常常父は午前様

ときめきを胸に畳んで冬木立

居酒屋で常にかス抜きする孤独

ASEANへ援助バーゲンは総理

是非逢おうの約束逢えたのは楯

是非もなく掛けた保険に助けられ

悲しみはそつと畳んで海の底

都構想是非を問われる選挙戦

トヨ子

みつこ

シルク

ちづる

龍一

絹枝

六点

光男

政男

悦子

みよ子

ヨシ枝

瑠美子

一步

庸佑

美代子

いさお

昭

蛙城

和美

香代

清

慶一

見清

幸子

淳風

隆昭

小春空眺めて猫と日向ぼこ
バーゲンの大が誰にも愛想よい
是非もないすぐに判らぬ抽象画
埋み火を日記の余白へと畳む
常常の肌の手入れが輪隠す
異常気象毎日続く小春の日
常々は儉約祭りには浪費
畳んだままの国旗広げる
常々がと妻も医者もが素っ気ない
夜店を畳み次の祭り

川柳塔さかい(大阪) 村上

バツイチのデート子連れの遊園地
お忍びのデートは出来ぬ相撲取り
借金をしてでもデートしたくなる
誘ったら妹連れてきたデート
ちぐはぐな会話でつつがなく暮らす
菜食と肉食同居して平和
ブランドをまとい三食カップメン
逸る気ともたつく足で追い掛ける
ちぐはぐな返事愛しい父となる
品格を上げると下がる視聴率
ちぐはぐな二人も独りよりはまし
ちぐはぐな会話相槌だけは打つ
ちぐはぐな言い訳その場切り抜ける
ピフテキをつつく田舎の祖母の箸
材木を組んだだけですログハウス
正念場迎え日本おろすと
強敵を迎える笑顔作らねば

珠子 ダン吉 忠太 哲矢 (四)ひろ子 (中)弘子 三成 宗博 義泰 敏治 竜之介 政男 玄也 世紀子 日の出 明子 澄空 扶美代 誠一 好 かりん 舞夢 のん子 和幸 としお 天笑

姉さんがきやはる掃除念入りに
迎春と書いても心躍らない
婆ちゃんのお迎えいつもよう来たな
新しい命待つて紙おむつ
お迎えはこちらの都合聞かず来る
迎えより見送る声が弾んでる
青い目の嫁を迎えた過疎の村
雑魚寝した苦勞の母と露天風呂
財界の黒幕動く老獺に
雑学を駆使して敵を論破する
約柄がざあます言葉喋つてる
デートする相手次第の勝負服
鮎食えば私帰ると言うデート
帰らない人を迎える絵蠟燭
冷蔵庫詰めて待つてる里帰り
拒否出来ぬ神様からの迎え待ち
婆ちゃんとデート制覇ばかりです
遅刻した人は拍手で出迎える

倉吉川柳会(鳥取) 竹信

年金は減る増税されるのも困る
困つて感性乏し句が詠めぬ
困り事相談員で困つたな
作句する手前で壁がそびえてる
温すきて干し柿くさり困つて
七十億人盛つた地球が狂いだす
ちよいと毒盛れば加わる人間味
放射能表土の土は何処へ盛る
一服を二服も盛つたヤブ医者め

月子 清晋 像山 和夫 雅明 山彦 ばつは 冬虹 八千代 進 俣子 時雄 愿 朋月 さくら りつえ 健吾 千代 龍枝 恭子 鬼一 風露 賀寿恵 重忠 節子 喜美子 次男

盛り沢山旅のチラシで夢をみる
祈りこめ仏のめしはてんこ盛り
忘れたい忘れられない逝つた人
故郷も忘れるほどの様変わり
忘れてる言葉が咽喉でもがいてる
平穏が好きで忘れた事にする
物忘れするが御恩は忘れない
冷蔵庫の奥に忘れた期限切れ
忘れなな想定外もあることを
忘れないためのメモ張探してる
亡母の形見桃色の珊瑚にある絆
沖繩の辺野古の珊瑚震えとる
さんご礁自然破壊のバロメーター
珊瑚礁目指し夫は妻忘れ
戦争を忘れていない珊瑚礁
こころ母の形見の珊瑚つけ
青い海きれいな珊瑚絵ハガキで
原子炉の冷却ままにならないぞ

はたる川柳同好会(大阪) 水野

腰痛がプチ断食で楽になる
ボケたかな同じ所で腰を打つ
お通じがあつて話の輪に入り
緑陰に通じ抜ければ秘湯の宿
その通り言われてはと胸をなで
耳栓で夫の文句に通せんば
金網の破れが好きならランドセル
我家にも内外事情山積みだ
無視できぬ女心の意外性

由紀子 智恵子 瑞子 玲子 萩江 日出子 けいこ 美代子 祐子 醉芙蓉 美ツ千 石花菜 康子 和子 盛桜 悠 美津恵 照彦 公子 順子 見清 長一 純子 康子 幹治 郁子 久子

意外とか言われ刺繍が女っぽい
海外の人も知ってるモッタイナイ
意外性まだ七十の胸にあり
県外避難サントクロース来るかしら
節電へ共に歩もう寒椿
節電に猫を添い寝に冬を越す
誇らしげに寒さに耐える冬のバラ

豊中もくせい川柳会大阪 藤井 則彦報

マニフェスト期待外れの民の鬱
精一杯生きて寛く仕舞風呂
相談はするも受けるも日向にて
復興に神とほとけの手を借りる
相談もせず始める旅したく
脱線軌道に乗せた妻も老い
ベッドからそつと下りる二日酔
解答のない問題に夜を明かし
さよならを言わずにそつとメモと鍵
さぞかし期待外れるバックシャン
星の降る夜に答を探します
雨の予報外れ一日ぐずる傘
事故現場お花がそつと置いてある
師の一句胸にきざんで今日がある
栄光もつるべ落しの秋に似て
弱点に優しく触れてアドバイス
無所属の時間に浸りたい余生
寝静まる厨でひとりの米を研ぐ
もう一度そつと通帳たしかめる
胸中に未練のボエムひとしずく

契子 正子 扶美代 春代 桂子 柳童 黒兎 則彦報 庸佑 健二 幸子 行兵衛 千恵子 佳恵 歌留多 幹治 さらり (永)玲子 雀舎 志津子 隆 則彦 千代 寿美子 美義

動物園じつくり見れば友縁者
相談は内部告発起きてから
錬金術など私にはありません
夫婦道何度も工事やりました
磨かない靴で気楽に歩いている
いかないかわからぬように住んでいる
耳傾けているのに本音さこえない
かすがいが外れ夫婦にある試練
人生に未練いっぱいもがく日日
眼裏に残る未練を持って余し
むつかしい話はないのが大人

八尾市民川柳会大阪 土屋 耀一報

冬空へ瓦礫は今も町の中
収穫の秋へ心も満たされる
想い出も一緒に連れて行く浄土
立冬へしみじみ被災者を想う
一言に構図が変わる秋の画布
五欲捨て五感を磨く秋日和
TTP擦った揉んだで参加する
結納も金離婚もお金死もお金
相槌のうまさ本音まで解く
何遍も狼少年聞き直す
美しい糸で縫ひ縫ひ直す
直角に話をすれば四面楚歌
肉類がメインでベースの晩御飯
駅裏に今日も行きたい秘密基地
何もかも吐かしてしまいう聞き上手
聞き上手話し上手で夜は更ける

すみ子 巴子 千枝子 (若)玲子 求芽 啓子 葉子 美智代 見清 幸雀 耀一 一風 寿鶴 いさお 賢子 森子 寿之 紀雄 (中)勝弘 欣之 草風 野鶴 雄太 紀乃 朝子 耀一

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

忘れたい卯年忘れてならぬ年
引き出しに詰め込むだけの大掃除
日に三度薬を飲んで異常なし
不況など感じさせない力二売り場
遊ぶた誠心誠意バカになる
木枯らしが吹くと熱欲しくなる
旨い話たぐり寄せてる地獄耳
お寺からおいさ話聞いてくる
もう二度とうさぎは亀と走らない
貧乏性旨いものほど後で食う
良い噂ばかり集める長い耳
一目惚れ妻とあるのを忘れかけ
子守柿今年一つでないようだ
うまい柿つくる木枯らし寒太郎
来年も同じ総理に気にかかる
ドレス来たベットの抱いて散歩する
年金が孫の遊びに間に合わない
晩秋と気付かず咲いている桜
遊ぶのはせいぜい村の喫茶店
おいしさに負けて過食の肥満体
床の間とトイレに同じ菊生ける
八十五歳五臓六腑に異常なし
行列をしてでも試す旨いもの
あと一つハードル跳べば陽の目みる
幸せな一日でしとて寝る
除染より地球丸ごと洗いたい
イノシシは食べたウサギと熊はまだ

照彦 玲子 宏章 孝子 芳山 寿代 久絵 美恵子 忠良 紀の治 大鯨 泰輔 石花菜 けいこ 美ッ千 蟹郎 幸子 水歌 恒子 久子 重忠 鈴野 悦子 すみゑ 仁美 完司

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 ねやがわ	15日(日) 14時締切 ラッキー・鏡・雪	寝屋川市立総合センター 4F 第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤 井 寺	15日(日) 朝 (三人共選)	場所、時間は会報にて通知
岬川柳会	15日(日) 14時締切 懐・さらさら・冷える	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊 中 もくせい 川 柳 会	16日(月) 13時40分締切 疑う・予感・じつは・自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さんだ	17日(火) 13時から 宝・ラッキー・会う そわそわ・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
岸 和 田 川 柳 会	21日(土) 13時30分締切 運・改まる・明るい・ロマン	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川 柳 塔 みちのく	21日(土) 17時締切 新しい・うきうき・朝日	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
はびきの 市 民 会 川 柳 会	22日(日) 14時締切 年始・複雑・レントゲン・茶	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	22日(日) 13時開場 放射能・リスク・種明かし	開発ビル 2Fホール 鳥取市片原1-107 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪
南 大 阪 川 柳 会	23日(月) 18時から 味わう・世代・シャンシャン 雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中心区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	27日(金) 9時から 松・鶯・机・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川 柳 塔 すみよし	28日(土) 14時30分締切 愛着・欲張る・しみり	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和 歌 山 三 幸 会 川 柳 会	28日(土) 12時開場 雪・知る	新年句会「まつや」 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」
京 都 塔 の 会	30日(月) 14時締切 礼・かちかち・囲む	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

1 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 会 川 柳 会	7日(土) 10時30分開場 川・膨らむ・50・自由吟 50周年記念新年会	「錦城閣」キャスルホテル3階 京阪天満駅西改札口1分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	7日(土) 14時締切 招く・ビック・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉 吉 会 川 柳 会	7日(土) 14時締切 譲る・エネルギー・栞	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え	7日(土) 13時45分締切 新・水・抜く・ひやひや	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
八尾市民 川 柳 会	8日(日) 13時30分締切 笑顔・夢・試す・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0831 八尾市山本町北5-9-3 土谷耀一
川 柳 塔 わかやま 吟 社	8日(日) 14時10分締切 初・つもり・閏年・部屋	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 堺市浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
松 露 川 柳 会	9日(月) 10時30分締切 辰・寒い・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
西宮北口 川 柳 会	9日(月) 13時45分締切 希望・飾る・ロマン・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにのみや4F 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川 柳 あまがさき	10日(火) 14時締切 反省・その気・らしい・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほ たる 川 柳 同 好 会	10日(火) 13時30分締切 役・祝う (折り句)そ・う・り	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川 柳 塔 な ら	12日(木) 13時開場 叶う・財・時代	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川 柳 塔 さ か い	13日(金) 14時締切 文化・味方・(折り句)ソウル	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
あかつき 川 柳 会	13日(金) 14時締切 輝く・道・香水・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	14日(土) 14時締切 澄む・印・主役	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 打 吹	14日(土) 13時締切 門・夢・ほがらか	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光

柳界展望

出雲市川柳連盟賞

松本 文字

墓穴と知っても掘らねば
ならぬ時がある

幸せの影絵が障子から漏
れる 小島 蘭幸

★第63回西日本川柳大会当
日出席の部成績は次の通り。

★第63回大阪川柳大会は11
月25日、大阪市立住まい情

岡山県知事賞 牧野 芳光

★平成23年度愛媛県民総合
文化祭川柳大会は、11月3

報センターで開催。参加者
186名。同人成績は次の通り。

★第29回東北川柳連盟弘前
大会の優秀句

日ひめぎんホールで開催。

最大のマナーは平和守る
こと 三宅 保州

★第6回和歌山城観月俳句
川柳・短歌大会(川柳の部)

参加者282名。同人の秀句。

大阪市長賞

さくら色 高瀬 霜石

マナーから外れた毬がよ
く弾む 小川てるみ

腹の底見せるとみんな去
ってゆく 西出 楓楽

観月大賞 三宅 保州

★第16回「川柳クレオ」川
柳大会は11月6日、大阪市

★第5回岡山県川柳大会は
11月27日、笠岡市保健セン

青空も買いたいフリーマ
ーケット

立東淀川区民会館で開催。

戦いて咲くオキナワの赤
い花 木本 朱夏

☆小島蘭幸主幹は11月12
日、井原市文化祭川柳大会

同人特選は次の通り。

台所あたり高波注意報

出席。11月20日、大竹市文
化祭川柳大会選者。11月25

★第33回出雲総合芸術文化
祭川柳大会は、11月19日開

★大竹市文化祭川柳大会は
11月20日、大竹市総合市民

大会の選者を務めた。

催。同人成績は次の通り。

会館で開催。参加者131名。

☆西出楓楽理事長は、第25

教育長賞 新家 完司

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

タコヤキの丸さコロコロ
みんな吉

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

みんな吉

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

大竹市文化協会長賞

新同人紹介

宇都宮 ちづる

―敏・みつこ・泰子・美代子推薦

後藤 美恵子

―蘭幸・楓楽・公弘推薦

中原 章子

―蘭幸・楓楽・公弘推薦

澤井 敏治

―天笑・楓楽・玄也・和夫推薦

回記念NHK学園全国川柳大会事前投句の選者として

11月18、20日東京都国立市行

☆佐藤古拙氏（同人・黒石市）は、青森県川柳社及び

黒石市柳連盟会長、市文化財

保護審議会議長、秋田雨雀記

念館長としての長年にわたる

文化振興への寄与により

「黒石市褒賞」を受賞。

☆11月10日、読売新聞「編集手帳」に麻生路郎著「川柳とは何か」が引用された。

☆三宅保州さん（理事・海

南市）は10月から毎日新聞

和歌山川柳欄を担当。

☆木本朱夏さん（副理事長

和歌山市）は「川柳人900

号」に「川柳人はなぜ貧し

さを詠まないのか」を執筆。

◇柳界動向◇

▽翠洋会（米田恭昌会長）

は平成24年1月1日より、

会長を太田昭氏に交代。

▼ 訃 報 ▲

●酒井一壺氏（同人・羽曳

野市）は9月24日逝去。享

年98歳。ご家族葬にて見送

られました。

●武田帆雀氏（同人・鳥取

市）は11月22日逝去。享年

79歳。25日の葬儀には新家

完司副主幹、岡川洋々理事

他、同人多数が参列。

▽ 図書寄贈 △

○「大震災を詠む」101人

それぞれの3・11川柳宮

城野社主幹・雪石隆子氏）

編

○「現代川柳の宇宙」（著

者・佐藤岳俊氏）

▽ お詫びして訂正 △

▼11月号P115中段11行目

芳生→芳山。P117中段19行

目、炎天を味方につけて百

日紅↓味方につけて。

▼12月号P61下段1行

目、三田市山口久子↓三木

市。P68上段6行目、寺井

弘子さんの作品は川柳塔欄

の間違いにつき訂正。P

115上段13行目、手前様↓

午前様。P115中段14行目、

みんなあふわりと→みんなふ

わりと。P126下段2行目、

初代正彦さんの住所訂正。

高槻市本町5-26↓高槻市

上本町5-26。

▼12月号裏表紙、本社12月

句会案内、兼題「ゼロ」は

山本義子、「惜しむ」は米

田恭昌、「力」は松原寿子

の誤りでした。お詫びして

訂正します。

▽ 新誌友紹介 △

みよし市

紹介者

大阪市

紹介者

和歌山市

紹介者

篠山市

紹介者

大阪市

常任理事会

①各地地区代表者・役員拡

大会議②高野山合祀報告③

定例確認事項④各部報告⑤

その他

福呂 秀子

福本 英子

畑 静子

遠山 可住

安田由美子

★12月号P2目次下

7行目、「みどりご

のあくびの口の美し

さ」は「美しき」で

あり、出典は武玉川

八篇であると織田正

吉氏よりご教示頂き

ました。

ひとこと欄原稿募集

一行 15字 20行

タイトルは別 締切 毎月24日

同人・誌友にかかわらず応募できます

編集の都合上原稿は整理する場合があります

採否は編集部に一任願います

お願い

川柳塔への投句（川柳塔・水煙抄・愛染帖・一路集・檸檬抄・初歩教室）は、毎月15日必着で締切っています。土、日、祭日は前倒しになります。

賀 正

川 柳 塔 社

常任理事

” ”

副理事長

”

副主幹

理事長

主 幹

名譽主幹

村	松	長	鈴	黒	久	鴨	居	鶴	木	河	新	川	西	小	河
上	原	浜	木	田	保	谷	谷	田	本	内	家	上	出	島	内
直	寿	美	い	能	千	瑠	真	遠	朱	月	完	大	楓	蘭	天
樹	子	籠	さ	子	代	美	理	野	夏	子	司	輪	楽	幸	笑

山	山	水	坊	佐	古	柿	江
口	岡	野	農	々	今	花	島
光	富	黒	柳	満	蕉	和	勝
久	美	兔	弘	作	子	夫	弘

川柳塔社常任理事会

謹 賀 新 年

平成24年 元 旦

川 柳 塔 さ か い

会 長 河 内 天 笑

山	矢	宮	日	西	中	遠	島	斉	源	奥	太	榎	岩
本	倉	本	野	村	崎	山	尾	藤	田		田	本	崎
	五	かりん		りつえ	深	唯	政	隆	八千代	時	扶美代	舞	公
進	月	ん	愿		雪	教	男	男		雄		夢	誠

米	矢	村	伏	原	中	徳	島	澤	小	柿	大	大	内
澤	野	上	見		野	山	田	井	寺	花	谷	久保	海
俣		玄	雅	清	健	みつこ	誠	敏	竜	和	篤	のん子	綾
子	梓	也	明	晋	吾		一	治	之介	夫	子		乃

和	山	元	升	樋	西	永	高	志	齋	河	荻	太	榎
田	本	永	成	口	内	田	木	田	藤	内	野	田	本
つづ	半	雅		冬	朋	山	世	千	さくら	月	像	としお	日の出
や	銭	子	好	虹	月	彦	紀子	代		子	山		

新年おめでとうございます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館
(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南出口徒歩3分)

プレラにしのみや4F

投句先 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子

河 亀 株 片 緒 江 梅 上 伊 石 足 浅 秋 奥 西
井 岡 元 山 方 島 澤 垣 勢 原 立 野 元 田 口
庸 哲 玲 美 勝 盛 キ 歳 房 て み い
佑 子 子 津 弘 夫 ヲ ミ 穀 子 茂 子 る 子 わ
ゑ

春 西 七 長 富 都 谷 田 酒 小 黒 蔵 久 北 河
城 内 反 浜 山 倉 中 田 林 田 田 保 野 原
年 朋 順 美 ル 求 祐 章 浩 わ 能 光 千 哲 折
代 月 子 籠 イ 芽 康 子 司 こ 子 子 代 男 杭

両 山 山 山 山 丸 松 牧 堀 古 藤 藤 福
川 本 田 田 口 山 下 渕 川 本 岡 島
無 義 婦 耕 光 一 比 富 正 奮 り 弘
限 子 美 治 久 之 志 喜 和 水 直 こ 子

年 賀

寺 井 藤 柳 川
さ さ み 柳 川

代表 高田美代子 会 員 一 円

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団

湯 川 胃 腸 病 院



消化器科 放射線科 脳神経外科

緩和ケア（ホスピス）

デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2

TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

あけまして

おめでとうございます

大阪川柳人クラブ

会員一同

会長 礒野 いさむ

副会長 板尾 岳人

板野 美子

幹事長 竹森 雀舎

事務局 伊達 郁夫

会計 中川 隆充

新年おめでとうございます
今年もよろしくお願い致します

川柳塔すみよし

会長 鶴田 遠野

石橋 直子 奥村 五月 西村りつえ

石丸正太郎 河井 庸佑 福岡 末吉

板尾 岳人 川端 一步 藤島たかこ

井丸 昌紀 北村 賢子 堀田 温子

岩崎 公誠 吉川 哲矢 坊農 柳弘

江島谷勝弘 古今堂蕉子 宮崎シマ子

榎本日の出 坂 裕之 宮本かりん

榎本 舞夢 澤田 定子 森松まつお

大内 朝子 阪井美世子 森松 芳香

大川 桃花 柴本 太郎 矢倉 五月

大久保のん子 柴本ばっは 山根 妙子

大隅 克博 鶴田 遠野 山本 半銭

大谷 篤子 中井 萌

奥田チエコ 長浜 美籠

例会 毎月第4土曜日

但し会場の都合で変更になる場合もあります

新年おめでとうございます
川柳あまがさき

山本 幸香 井上 龍 堀 正和 加川 靖鬼 田原 一兆 軸丸 勝巳 西部 イサミ 藤田 雪菜 古川 奮水 酢谷 亀与子 村山 あかり 松村 里江 木村 美代子 奥村 五月 松下 比ろ志 山田 耕治 西内 朋月 長浜 美籠

大浦 初音 上田 ひとみ 大久保 泰子 中井 茂幸 渡辺 柳明 大岸 和子 上垣 キヨミ 谷 祐康 北野 哲男 扇野 よしひさ 片山 かずお 吉井 菜々子 高野 政江 小山 紀乃 富田 美義 都倉 求芽 小熊 江美 矢野 野薫

明けましておめでとうございます

いずも川柳会

会長 竹 治 ちかし
会 員 一 同

事務局 〒693-0006

出雲市白枝町 4 2 3 伊藤 玲子 方
TEL 0853-23-3200 FAX 0853-23-3201

明けましておめでとうございます

川柳塔きやらぼく

会長 政岡 未延子^{ひえこ}

会 員 一 同

事務局 〒683-0845 米子市旗ヶ崎3-12-13
TEL 0859-34-1729

謹 賀 新 年

自費出版 川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号
TEL (06) 6372-1178
FAX (06) 6372-1196
E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

スランプを克服する良書！
 初心者はもちろん、中級者やベテランにも役立つ
総合川柳入門の決定版！

川柳の理論と実践

- ・著者 新家完司
- ・装丁 B6判・326ページ・ソフトカバー
- ・定価 本体 1600円＋税
- ・送料 1冊300円、5冊以上無料

——— ご希望の方は下記出版社へご注文ください。 ———

新葉館出版 〒537-0023 大阪市東成区玉津1丁目9-16 4F
 TEL 06-4259-3777 FAX 06-4259-3888

あけましておめでとうございます

翠 洋 会

高杉	佐々木	小谷	古今堂	小谷	奥田	太田	大久保	大川	榎本	榎本	岩本	井上	阿部	安土	浅井
千歩	満作	集一	蕉子	滋彦	みつ子	昭	真澄	桃花	舞夢	日の出	浩二	照子	紀子	理恵	公平
渡辺	米田	吉田	横山	山本	前川	藤井	原田	西出	中村	天正	寺井	津村	辻内	谷口	
富子	恭昌	知之	捷也	希久子	善之	正雄	すみ子	楓楽	叡子	千梢	弘子	志華子	げんえい	義	

明けてましておめでとうございます

竹原川柳会

会長
監査
会計

小島幸	時広一路	岩本笑子	古田太虚	森井菁居	石原淑子	山内房子
ほか会員一同						

迎春

平成 24 年

第35回鳥取県川柳大会に際し、皆様から温かい御支援を賜り
こころより御礼を申し上げます。ありがとうございました。
本年は第36回大会として鳥取県東部地区の担当となりますが、
旧に倍する皆様のご支援をこころよりお待ち申しております。

鳥取県川柳作家協会

会長 森山盛桜

ほか会員一同

※事務処：〒689-0405 鳥取県・鹿野180 森山盛桜方

明けましておめでとうございます

川柳ふうもん吟社

会長 両川 洋々

会 員 一 同

事務局 〒680-0874 鳥取市宮長205-45

萩原 みゆき

TEL 0857-53-1185

月例会：毎月第4日曜日 13：00～

会 場：砂場隆浩事務所（鳥取市片原1丁目107）

献 壽

平成 24 年

第31回“みか月”記念大会に際し、皆様から御支援をたまわり
ころより感謝を申し上げます。ありがとうございました。
本年は第32回目バースデーの記念大会は辰年となりますが、
旧に倍する皆様のご支援をころよりお待ち申しております。

川柳塔鹿野みか月

会長 森山 盛桜

ほか 会 員 一 同

※事務処：〒689-0405 鳥取県・鹿野1279 中原 諷人方

あけましておめでとうございます

あかつき川柳会

鶴彬顕彰事業基金
川柳九条の会

あけましておめでとうございます

岩美川柳会

会員一同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-115
TEL 0857-72-0762

山下蟹郎

あけましておめでとうございます

エイシス堺

講師 河内天笑

米澤	矢倉	元永	村上	宮本	升成	伏見	樋口	西村	中野	高木	島田	斎藤	源田	奥	太田	榎本
俣子	五月	雅子	玄也	かりん	好	雅明	冬虹	りつえ	健吾	世紀子	誠一	さくら	八千代	時雄	としお	日の出

大 阪 川 柳 の 会

事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL 06 (6303) 7297

安	森	本	藤	内	伊	竹	黒	大	碓	足	世話人	磯	代
井	口	田	井	藤	達	森	川	堀	永	立		野	表
英	美	智	満洲夫	光	郁	雀	孤	正	祥	淑		い	
華	羽	彦	枝	夫	舍	遊	明	昭	子	む			

賀 正

川 柳 塔 唐 津

山	樋	仁	坂	市	岩	井
口	口	部	本	丸	崎	上
高	輝	四	蜂	晴	實	勝
明	夫	郎	朗	翠		視

熊 本 川 柳 会

明けてまして

おめでとうございます

岩	永	高
切	田	野
康	俊	宵
子	子	草

あけましておめでとうございます

京 都 塔 の 会

会 員 一 同

迎 春

川 柳 さ さ や ま 一 同

代 表 遠 山 可 住

あけましておめでとうございます

川 柳 さ ん だ

会 員 一 同

例会：毎月第3火曜日 13時・三田市中央公民館

あけましておめでとうございます

城北川柳会

会長 伊達郁夫
会員 一同

賀正

ホップ・ステップ・ジャンプ

川柳大阪

本年も宜しく願い申し上げます

部長 長井善純

副部長 山崎珠生

部員一同

謹賀新年

川柳茶ばしら

関	金	吉	板	脇	早
本	子	田	山	田	川
かつ	美	幸	ま	雅	遡
子	千	子	み	美	行
	代		子		

謹賀新年

河内長野

長柳会

講師

板尾 岳人

会員有志

水谷 正子
村上 直樹
山岡 富美子
坂上 淳司
黒岩 靖博
山室 光弘

あけましておめでとうございます

鳥取県川柳作家連盟

会 員 一 同

連絡先 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364

安田方 春 木 圭一郎

TEL 0857-24-2834

あけましておめでとうございます

川 柳 塔 な ら

大内 朝子
中 原 比呂志
米 田 恭 昌
坊 農 柳 弘
吉 川 寿 美
居 谷 真理子
渡 辺 富 子
安 土 理 恵
飛 永 ふりこ
森 中 博 一
加 門 萌 子

会員一同

新年おめでとうございます

西宮ローズ川柳会

山	山	春	西	木	亀	小	奥	岩	秋
本	崎	城	口	村	岡	倉	田	倉	元
義	君	年	い	貴	哲		み	キ	て
子	子	代	わ	代	子	藍	つ	ク	る

あけましておめでとうございます

川 柳 ね や が わ

会 員 一 同

会 長 山 本 三 郎
事務局 高 田 博 泉

迎 春

はびきの市民川柳会

会 員 一 同

会 柳 富 年 新 賀 謹

池 中 中 山 関 藤 古 石 小 河 中
井 崎 野 田 田 橋 野 野 村 外
森 ア 深 寿 よし 奏 千 未 紅 彦 一
子 キ 雪 之 み 子 華 知 朗 次 惠 同

明けてましておめでとうございます

会 柳 川 せい 中 も 豊

同 員 会

あけましておめでとうございます
ほたる川柳同好会

水野黒兔 藤澤長一
小牧信男 高嶋勝
宮田輝 田中螢柳
藤原桂子 米原雪子
栗田久子 寺井柳童
江見見清 多田契子
中山春代 神野字乃子
松尾美智代 笠田幹治
貝塚正子 池田純子
荒木郁子 中島公子
樋口順子 西村康子

句会 第二火曜日 午後一時より
勉強会 第四火曜日 午後一時より
場所 豊中市蛍池公民館

謹 賀 新 年 川柳塔まつえ吟社

主幹 石橋 芳山

同人一同

事務局 〒690-0001 松江市東朝日町206-7 石橋 芳山 方
TEL.090-2003-5846

あけましておめでとうございます

南 大 阪 川 柳 会

会 員 一 同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋 6 丁目駅③出口）
原則として第 4 月曜日・6 時から

あけましておめでとうございます

川 柳 塔 み ち の く

主 幹	主 幹	副主幹	相談役	顧問	理事	監 事	会 計
齊藤 嘉	小寺 花峯	福士 慕情	森中恵美子	波多野五楽庵	岩淵 黙人	高橋 岳水	高橋 洋子
						肥後和香子	高森 一春
						小枝ふさゑ	福士 慕情
							ほか同人一同

明けてまして

おめでとうございます

六甲川柳会

メダ力の学校

世話人

伊勢田

毅

黒田

能子

山口

光久

山口

穂

両川

無限

無

美

光

能

明けてましておめでとうございます

八尾市民川柳会

会員一同

あけてましておめでとうございます

米子住吉川柳会

会員一同

〒683-0804 米子市米原5-1-3-304

竹村紀の治

明けましておめでとうございます

川柳らくだの会

会 員 一 同

事務局 〒689-0202 鳥取市美萩野1-134 岸本宏章方
TEL・FAX 0857-59-0435

サークル 檸檬

吉村久仁雄	山本義子	山本希久子	山本加お里	山口光久	松尾美智代	前村たもつ	西村哲夫	西村楓楽	西村いゐゑ	長浜美籠	鶴田遠野	古今堂蕉子	久保田千代	片岡智恵子	奥田みつ子	太田扶美代	井丸昌紀	浅野房子
-------	------	-------	-------	------	-------	-------	------	------	-------	------	------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------

脇俊子	杉本晴美	馬場宏	井尻民子	篠原いつふみ	乾美代子	八倉知佐子	山本宏至	吉村一風	生嶋ますみ
坂本奈良司	今川孝子	菫矢正春	土谷耀一	上田和子	小西博子	松浦愛子	田邊浩三	寺川はじむ	西川義明

川柳クラブ
わたの花

あけまして
おめでとうございます

謹 賀 新 年

わ か あ ゆ 川 柳 会

奥谷	松本	渡部	武島	菅田	河原	松本	福岡	石田
澄子	聖子	好栄	ちよえ	勝子	恵美子	はるみ	博利	清泉

謹賀新年

和歌山三幸川柳会

事務局

〒640-8111

和歌山市新通七―一七

TEL 073・423・8930

古久保 和子

主 幹	三宅 保州
理事 長	木本 朱夏
相談 役	桜井 千秀
副主 幹	古久保 和子
副理 事 長	喜田 准一
理 事	田中 みね
楠見 章子	
川上 智三	
武本 碧	
玉置 当代	

例会

毎月第四土曜日 午後一時

和歌山商工会議所

(和歌山市役所西側)

あけましておめでとうございます

本年もよろしくお願い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

同 人 一 同

事務局 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪方
電話・FAX 073-462-7229

和歌山県川柳協会

「和歌山県川柳協会発足20周年誌上大会」を実施します。
応募締切 5 月末日(詳細は後日)。ご応募をお願いします。

会 長 三 宅 保 州 副 会 長 川 上 大 輪
大会実行委員長 木 本 朱 夏

【お問い合わせ先】 事務局長 古久保 和 子
〒640-8111 和歌山市新通7丁目17 TEL 073-423-8930

中	堤	土	次	鈴	助	佐	児	小	沖	稲	岩	石	飯	井	荒
岡	橋	井	木	川	藤	玉	島	葉	佐	田	田	伊	木		
香	檜	房	義	益	和	幸	俊	笑	泰	ダ	ひ	忠	東	は	
代	代	枝	泰	子	美	子	昭	司	弘	洋	吉	子	太	吉	え
山	米	雪	山	森	向	宮	三	松	松	増	不	藤	林	仲	
本	富	本	本	井	野	宅	岡	浦	田	破	原	谷			
	淳	珠	蛙	龍	み	保	浅	英	隆	仁	つ	弘			
暘	風	子	城	子	清	江	州	子	夫	昭	緑	昭	さ	子	

岸和田川柳会

明けておめでとうございます

(日川協加盟)

「川柳いのちの詩」発行

川柳同友会みらい

会 長 鈴 木 公 弘

《事務総局》 〒689-0343 鳥取市気高町殿410-2
稲村遊子方 TEL.F 0857-84-3149

編集後記

★新年や男も龍も玉を抱く

薫風

★昨年の新年号の編集後記に私は、「読んで楽しい川柳塔をモットーに」と書いた。今年もその方針に変わりはなく、新しく英訳川柳のコーナー「英語の川柳」の連載が始まる。

★筆者は昨年の塔まつりで「ブライスと川柳」について、お話しくださった吉村侑久代氏。路郎の川柳がどのように英訳されるか興味津津。学生時代にかえってコンサイスを片手に、楽しみたいと思う。

★編集部員のいさお・勝弘まつおのトリオは、時代小説、殊に藤沢周平の愛読者である。時代小説のどこがいいのか訊ねたところ、曰く「悪者がはつきりしている。勧善懲悪だから」。

★そういうえばテレビの水戸

黄門も8時45分ごろには印籠の御威光で、悪者は小気味よくバツバツとやっつけられたのだ。大いなる

マンネリではあったが、安心して観ていられた。さすがにネタが切れたのか、スポンサーの事情が先ごろ打ち切りが発表された。

★山折哲雄著「義理と人情——長谷川伸と日本人のこころ」(新潮新書)を読んでも感銘を受けた。長谷川伸の著作「暇の母」や「二本刀士俵入り」などは木津川先生の「二人語り劇場」のテーマ。義理人情という今の日本には廃れつつある美風を見直させる一冊。

★心に響いたもう一冊は驚田清一著「待つ」ということ(角川選書)。携帯電話の出現によって私たちは「待つ」という楽しさ美しい、宝石のような時間をいつのまにか失っていた。

★携帯電話があれば「君の名は」の擦れ違いも、「ロミ

ひとこと

討ち入りの夜に・・・

十二月十三日までに返す約束で、「忠臣蔵」DVDをお借りした。貸主曰く「討ち入りの日に酒を酌みつつじっくりと楽しみたい」との事で実に粋な人である。

昭和三十六年東映の松田定次監督だが、今見ても充分楽しめるし、やっぱり泣かされる。今回も大石東下りでは泣いた。

九条家用人、立花左近と名乗り

本陣に入った大石の許に本物が到着、両者の緊迫した問答が続くが業を煮やした左近が九条家通行書を示し、大石にも見せろと迫る。大石は平然と一枚の紙を差し出す。中味は白紙。怪訝な顔の左近が乱れ箱の違ひ鷹の羽の紋に気付きすべてを察する。名場面である。内蔵助は片岡千恵蔵、左近は大河内傳次郎であった。やはり日本人の心地よい涙を誘うのが忠臣蔵ではないだろうか。(森松まつお)

オとジュリエット」の悲劇も起きなかった。ということとは名作の数々も生まれなかったということか……。

利便性を優先させると情緒が薄れるようで寂しい。

★ご愛読いただいた麻生路郎句抄は前月で終わり、新しく「中島生々庵句抄」が始まりました。お楽しみ下さい。

(朱)

□お正月早々恐縮ですが、「川柳塔・水煙抄」などの投句の遅れ、十二月は八通もありました。私も編集部

員でなかった頃は、締切り間際まで投句できなかったことを思い出します。そこで提案、作句帳に毎月トツに欄を設け、月の一番始めに作句してはどうでしょうか。そうすれば遅れることはないと思いますが。

□大阪「秋の陣」が終わりました。新聞・テレビは当選者の圧勝と煽りましたが、ある新聞のコラムに「果たして圧勝か」の見出しで、野球でたとえるなら、六対四は圧勝ではない、負けたました。

(勝)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種
目「

「発表(3月号)

地名

都 府 道
市 市 市
姓 姓 姓
雅 雅 雅
号 号 号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「目指す」 (1月15日締切)

3月号発表

池 森子 選 — 共選 — 福士 慕情 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

3月号発表（1月15日締切）

川柳塔（8句） 小島 幸選
水煙抄（8句） 川上 大輪選
愛染帖（3句） 新家 司選
檸檬抄（目指す） 福士 情共選
（2句） 池森 子選
（個性） 古手川 光選
一路集（3句） 「カーブ」 喜田 准一選
「しつかり」 有沢 せつ子選
初歩教室 「カラー」（3句） 鈴木 公弘担当

4月号
檸檬抄「人柄」
一路集「飼う」「設計」
「まさか」
初歩教室「掴む」

本社1月句会

とき 1月6日（金）午後1時開場・2時締切り
―開場時間、締切時間を変更しています。―注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ケ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし「町並みとエキストラと川柳」
兼題「駅」
「マスク」
「地図」
「祝う」
「麺類」
西出 北池 伊藤 藤山 小島
野哲 達井 本島
楓 哲 郁 希 蘭
楽 男 子 久 幸
選 選 選 選 選
（各題2句以内）
会費 1000円 投句料 500円（切手可）

本社2月句会

7日（火）午後1時から
兼題「厄」「つもり」「都合」
「物好き」「錆びる」

第30年度 夜市川柳募集

第8回「不要」鈴木公博選
ハガキに3句 1月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までお願いいたします。

〒543-0052

定価 八百円（送料92円）
半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）
二〇一二年（平成二十四年）一月一日発行
発行人 小島 和幸
編集人 木本 朱夏
印刷所 美研アト
発行所 川柳塔社
電話（〇六）六七九一三四九〇番
振替 〇〇九八〇四二九八四七九番
大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの

一句を募集します。

兼題

「ごま」川柳塔社主幹小島蘭幸 選
応募要領 郵便ハガキに2句、郵便番号、住所、
氏名、電話番号を明記してください。

入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。
本紙4月号にて発表いたします。

発表

締切り

2012年1月31日(当日消印有効)

投句先

〒543-0052 大阪市天王寺区

大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

オニザキの

手作りの味わいに
こだわり続けて
五十余年

ごま



株式会社 オニザキコーポレーション
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア (ホスピス)
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>